2026 年 10 月

食料安全保障月報
（第 64 号）



令 和 8 年 10 月 30 日

農林水産省

食料安全保障月報について

１ 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

２ 対象者

本月報は、2021 年6月まで発行していた海外食料需給レポートに食料安全保障の観点から注目している事項を適宜追加する形で、国民のみなさま、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

３ 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報（生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等）について重点的に記載しています。

４ 公表頻度

月１回、月末を目処に公表します。

2026 年 10 月食料安全保障月報（第 64 号）

目　　次

概要編

Ⅰ　2026 年 10 月の主な動き・・・

３ コメ・・・

（概要編）

Ⅰ　2026 年 10 月の主な動き

主要穀物等の生産量等について

10 月の米国農務省（USDA）の需給報告によれば、2026/27 年度の各品目の生産量等の状況は以下のとおり。

小麦の生産量は、カナダ、トルコ等で上方修正されたものの、EU 等で下方修正され、前月からわずかに下方修正された。前年度からは、トルコ、モロッコ、インド、シリア、イラン、ウクライナ等で増加するものの、米国、EU、アルゼンチン、豪州、カザフスタン、カナダ、ロシア、ブラジル等で減少し、世界全体の生産量は前年度から 21.7 百万トン減の 822.4 百万トンとなる見通し。

とうもろこしの生産量は、EU 等で下方修正されたものの、米国で上方修正され、前月から 2.8 百万トン上方修正された。前年度からは、中国、カナダ、ロシア等で増加するものの、米国、アルゼンチン、EU、インド、ブラジル、南アフリカ等で減少し、世界全体の生産量は前年度から 36.9 百万トン減の 1,293.8 百万トンとなる見通し。

大豆の生産量は、インド等で下方修正されたものの、米国で上方修正され、前月から 0.4 百万トン上方修正された。前年度からは、パラグアイ、ロシア等で減少するものの、米国、ブラジル等で増加し、世界全体の生産量は前年度から 13.5 百万トン増の 442.7 百万トンと史上最高となる見通し。

期末在庫量は、小麦、とうもろこし及び大豆とも前年度から減少となっている。消費需要は引き続き旺盛であり、注視が必要。

FAO（国連食糧農業機関）が公表した9月の食料価格指数（最新値）については、肉類及び乳製品の価格指数が下落したものの、穀物、植物油、砂糖の価格指数が上昇したことにより、8月の 134.0 から 1.5%（2.0 ポイント）上昇し 136.0（参考：2025 年9月 128.6）。

海上運賃については、バルチック海運指数（穀物輸送等に使用される外航ばら積み船の運賃指数）が、9月末時点 3,113（8月末時点 3,186、2025 年平均値 1,680）。



写真：ブラジル・マット・グロッソ州の 2026/27 年度の大豆。前作 2025/26 年度のとうもろこし収穫後に作付けが行われた。
撮影日：2026 年 10 月５日



写真：カナダ・オンタリオ州の大豆。収穫期を迎えている。
撮影日：2026 年 10 月 13 日
撮影者：Leonard Hobbs 氏

ウクライナの生産・輸出動向

10 月の USDA の需給報告によれば、2026/27 年度のウクライナの小麦の生産量は、前月予測からの変更はなく、単収が史上最高となることを受け、前年度から8％増加し 2,600 万トンとなる見込み。一方、輸出量は、前月予測からの変更はなく、黒海での混乱を受け前年度から11％減の 1,250 万トンとなる見込み。

2026/27 年度のとうもろこしの生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積及び単収が増加することを受け、前年度から3％増加し 3,180 万トンとなる見込み。一方、輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度から1％減の 2,200 万トンとなる見込み。

ウクライナ農業政策食料省によれば、10 月５日現在、2026/27 年度の小麦の収穫面積は 512 万ヘクタールで、収穫量は 2,601 万トンとなっており、収穫は終了しているとみられる。とうもろこしの収穫進捗率は6％で、現地情報会社によれば、9月末現在の作柄は概ね良好となっている。また、10 月６日現在、2027/28 年度の冬小麦の作付進捗率は 50％となっている。

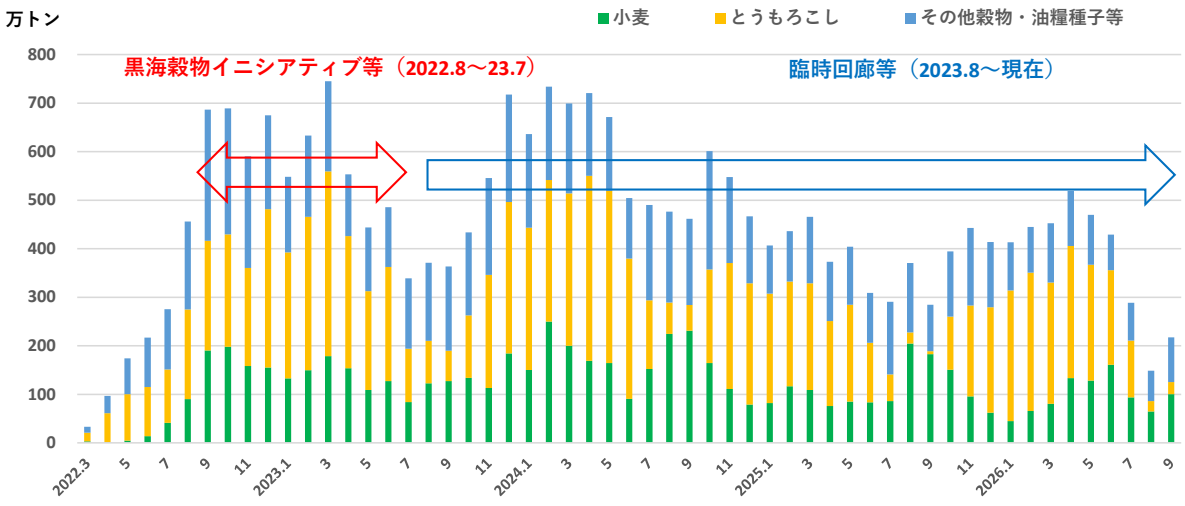
穀物・油糧作物の輸出については、ロシアによる黒海港湾の攻撃激化により、特に多くが海上輸送されていたとうもろこし及び小麦で大きく減少している。

臨時回廊からの輸出状況

2022年７月22日の国連、ウクライナ、ロシア及びトルコの4者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意（黒海穀物イニシアティブ）により、同年8月以降、オデーサ港等3港からの輸出が再開したが、2023年７月17日にロシアが同イニシアティブからの離脱を表明し、輸出が停止した。

黒海穀物イニシアティブの停止後、ウクライナは、ルーマニア・ブルガリアの黒海沿岸を通過する新ルート「臨時回廊」を国際海事機関（IMO）に通報し、2023年8月以降、運用が開始された。現在、臨時回廊のほか、運河等を利用し、ルーマニアのコンスタンツァ港などを経由した輸出等が行われているものの、2026年7月以降、ロシアによるオデーサ港等への攻撃が激化し、穀物の輸出に支障をきたしており、動向について注視する必要。

（参考）ウクライナの輸出量の推移（月毎）（2022 年３月～2026 年９月）



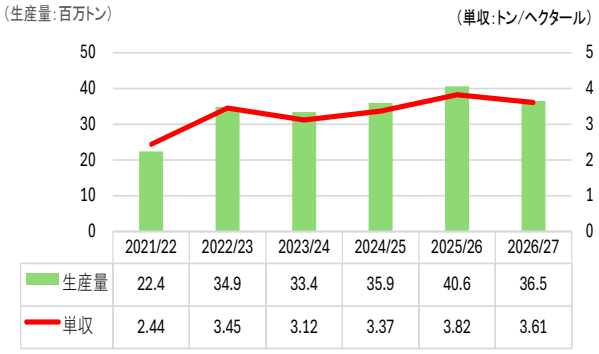
出典：ウクライナ経済・環境・農業省、ウクライナ穀物協会のデータをもとに農林水産省で作成

注：データは港湾、鉄道、陸路などすべての輸出の計

1　カナダ：2026/27 年度の小麦の単収は平年を上回るものの、前年度には及ばず

USDA によれば、2026/27 年度のカナダの小麦生産量は、前月予測から1％上方修正され、史上最高の前年度から 10％減となるものの、過去5年平均から9％増の 3,650 万トンとなり史上3番目となる見込み。これは、収穫面積が前月予測から変更なく、前年度から5％減、過去5年平均から2％減の 1,010 万ヘクタールとなるとともに、単収が前月予測から1％上方修正され、史上最高の前年度から5％減となるものの、過去5年平均から 11％増の 3.61 トン/ヘクタールとなり史上2番目となることによる（**図1**）。

図1：カナダの小麦生産量及び単収の推移



	2021/22	2022/23	2023/24	2024/25	2025/26	2026/27
生産量	22.4	34.9	33.4	35.9	40.6	36.5
単収	2.44	3.45	3.12	3.37	3.82	3.61

出典：UDSA「PS&D」（2026.10.9）をもとに農林水産省で作成

2026/27 年度は、プレーリー地方の大部分で良好な単収となり、カナダ東部では前年度を上回る降水に恵まれた。カナダ統計局の推計によれば、作付面積及び単収は、前年度に比べ減少したものの、単収は過去5年平均を上回ったため、生産量は、史上最高の前年度から 10.9％減の 3,612 万トンが見込まれている。

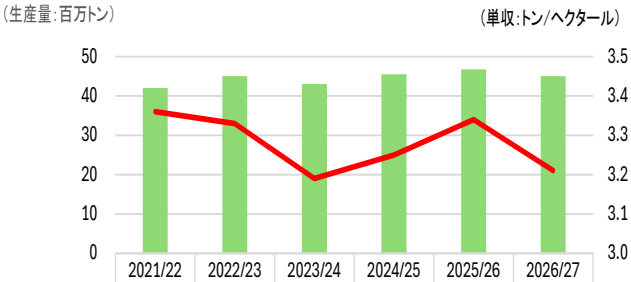
小麦のうち、春小麦は、主にプレーリー地方の各州で生産され、小麦生産量の約 96％を占める。各州政府によれば、9月末時点の収穫進捗率は、サスカチュワン州、アルバータ州、マニトバ州で収穫初期の湿潤な天候により遅れが生じ、平年を下回っていたものの、最近の温暖で乾燥した天候により、収穫は大幅に進展した。今シーズンは、土壌水分が十分であり、生育状況は平年並みから平年を上回る水準となった。冬小麦は、主にオンタリオ州で生産され、小麦生産量の約4％を占める。東部地域の広範囲が深刻な干ばつに見舞われた前年度と比べ、本年度は地域によりばらつきがあったものの、全体として恵まれた降水量となり単収見通しは平年をわずかに上回ると見込まれている。

2　インドネシア：2026/27 年度のパーム油の生産量は乾燥により下方修正

USDA によれば、2026/27 年度のインドネシアのパーム油生産量は、前月予測から5％下方修正され、史上最高の前年度から4％減となるものの、過去5年平均から1％増の 4,500 万トンとなり史上3番目となる見込み（**図2**）。これは、収穫面積が前月予測から変更なく、前年度同、過去5年平均から4％増の 1,400 万ヘクタールとなるものの、単収が前月予測から5％下方修正され、前年度から4％減、過去5年平均から3％減の 3.21 トン/ヘクタールとなることによる（**図2**）。

7月以降、長期の乾燥状態が生産地域の大部分、特にスマトラ島東部及び南部並びにカリマンタン州に影響を及ぼしている。パーム油は、果実が最適な単収となるために十分な降雨と土壌水分が必要で、月間降雨量が 150～200mm、あるいは年間降雨量が 2,400mmに満たない場合、生育に悪影響を与える。乾燥状態が長期化すると、雄花が著しく増加する一方、雌花の発育は低下し、この不均衡が効果的な受粉を妨げ、単収を大幅に減少させる。インドネシアパーム油協会なども粗パーム油生産量が前年度から最大4％減少すると予測している。

図2：インドネシアのパーム油生産量及び単収の推移



	2021/22	2022/23	2023/24	2024/25	2025/26	2026/27
生産量	42.0	45.0	43.0	45.5	46.7	45.0
単収	3.36	3.33	3.19	3.25	3.34	3.21

出典：UDSA「PS&D」（2026.10.9）をもとに農林水産省で作成

Ⅱ　2026 年 10 月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、9月末、240ドル/トン台後半で推移。10月に入り、黒海での輸出混乱等を受け250ドル/トン台後半まで上昇したものの、とうもろこし価格の下落等を受け下落し、10月中旬現在、240ドル/トン台前半で推移。

とうもろこしは、9月末、190ドル/トン台後半で推移。10月に入り、米国の作柄低下、低調な収穫進捗等を受け200ドル/トンまで上昇したものの、米国農務省需給報告で米国の生産量が上方修正されたこと、米国の収穫進展等を受け下落し、10月中旬現在、180ドル/トン台後半で推移。

コメは、9月末、480ドル/トン台で推移。10月に入り、エルニーニョ現象による干ばつリスクを懸念したアジアの主要輸入国の需要維持等を受け、10月中旬現在、490ドル/トン台半ばで推移。

大豆は、9月末、470 ドル/トン台半ばで推移。10 月に入り、米国の低調な収穫進捗等を受け 470 ドル/トン台後半まで上昇したものの、米国の収穫進展、中国の低調な買付け等を受け下落し、10 月中旬現在、460 ドル/トン台半ばで推移。

(注:小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場の期近終値で 10 月 16 日まで。コメはタイ国家貿易取引委員会公表価格で 10 月 14 日まで。)

Ⅲ　2026/27 年度の穀物需給(予測)のポイント

10 月の USDA の需給報告によれば、2026/27 年度の世界の穀物全体の生産量は、前年度から、小麦、とうもろこし、コメは減少し、穀物全体でも減少となり、前年度から 2.5%減の 29.44 億トン。

消費量は、前年度から、小麦、とうもろこし、コメは増加し、穀物全体でも増加となり、前年度から 0.3%増の 29.81 億トンと、消費量が生産量を上回る見込み。

貿易量は、前年度から、コメは増加、小麦、とうもろこしは減少し、穀物全体では減少となり、前年度から 4.9%減の 5.24 億トン。

期末在庫量は、前年度から 4.4%減の 7.88 億トン。期末在庫率も前年度を 1.3 ポイント下回り 26.4%(P17 資料2参照)。

(注:数値は 10 月の USDA「PS&D」による)

Ⅳ　2026/27 年度の油糧種子需給(予測)のポイント

10 月の USDA の需給報告によれば、2026/27 年度の油糧種子全体の生産量は、前年度を上回り 7.22 億トンとなる見込み。

消費量も前年度を上回り 7.19 億トンとなり、前年度に引き続き、生産量が消費量を上回る見込み。

期末在庫量は、前年度を上回り 1.46 億トンとなるものの、期末在庫率は前年度を下回り 20.3%となる見込み。

(注:数値は 10 月の USDA「PS&D」による)

Ⅴ　今月の注目情報: 黒海における新たな穀物輸出の混乱

2026年7月、ロシア・ウクライナ情勢の混乱は、ここ3年間安定が続いていた黒海における海運で再燃し、穀物の収穫期直前に港湾の稼働はほぼ停止状態となった。それ以降、攻撃により世界でも有数の穀物輸送の要衝が封鎖され、世界の穀物取引量の17%に相当する輸出が妨げられている。

そのような状況を受け、10月１日、農業市場情報システム（AMIS）事務局及び国際食糧政策研究所（IFPRI）は共催で『穀物貿易が阻害されたとき：黒海における混乱と世界市場への影響』と題するウェビナー※を開催した。当該ウェビナーの内容と黒海における状況が穀物（主に小麦）に与える影響について公表、報道情報をまとめた。

なお、ウェビナーは、以下リンクより視聴可能（10月27日時点）。

※　https://www.ifpri.org/event/when-grain-trade-is-obstructed-black-sea-disruptions-and-global-market-impacts/

1　黒海からの輸出の混乱

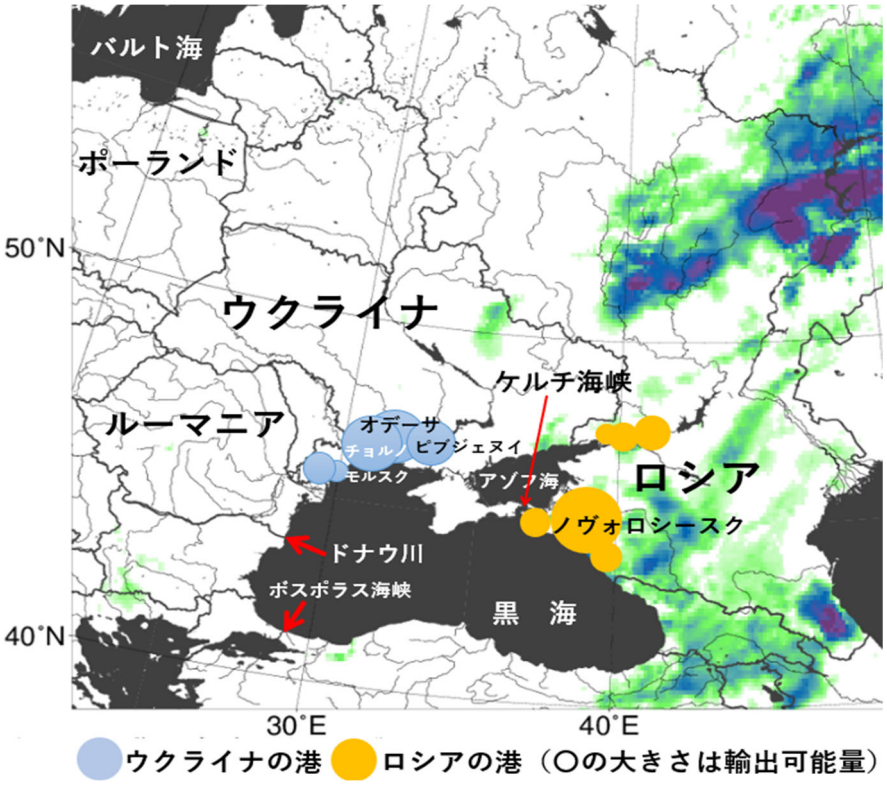
（1）　紛争激化

現地報道（2026.7.26）によれば、オデーサ港沖でトルコ企業が用船するギニアビサウ船籍の貨物船「Golden Leo 号」が沈没した。同船は7月 19 日にウクライナ産とうもろこしを積み出港したところ、ロシア軍の巡航ミサイル攻撃により大破し、航行不能となっていた。同日以降、ウクライナからの黒海の海上ルートによる輸送は事実上の停止状態となっている。

米国シンクタンク Council of Foreign Relations の記事（2026.9.24）によれば、ウクライナの穀物及び油糧種子の 90%は、オデーサ、チョルノモルスク、ピブジェヌイの3港を経由し輸出されている。また、ロシアの穀物・油糧種子の海上輸出の内、同程度の割合がアゾフ海、黒海を経由している（**図1**）。

黒海の要衝（チョークポイント）が「武器」として利用される事態は、最悪のタイミングで発生した。非常に強いエルニーニョの影響を受け、今シーズンの南半球の収穫量は減少と予測され、また干ばつにより、2026/27 年度の米国産小麦の収穫量は 1970 年以来の低水準に落ち込む見込み。さらに春にホルムズ海峡が封鎖されたことで、北半球の春作物の作付期に肥料価格が急騰した。小麦価格も一時1ブッシェル当たり8ドル近くまで跳ね上がり、3年半ぶりの高値を記録し、さらに上昇する可能性もある。

図1 黒海におけるロシアとウクライナの主要穀物港



出典：JASMAI データをもとに農林水産省で作成

ロシアとウクライナの小麦生産量は、世界の小麦生産量の約 14%を占めている。両国とも生産量の多くを輸出しており、世界貿易において極めて大きな比重を占めている。最新のデータによれば、世界最大の小麦輸出国であるロシアは世界の小麦輸出量の約 20%を、ウクライナは約6%を占める(**品目別需給編1小麦参照**)。

ウクライナインフラ省によると、7月だけでオデーサ大都市圏の港湾及び水路に対するロシアの攻撃は124 件に上り、少なくとも 20 人の港湾労働者と船員が死亡し、その他数百人が負傷した。

最近のウクライナ黒海沿岸港湾に対するロシアの攻撃は、ロシアの長距離攻撃能力が質・量ともに飛躍的に向上したことを如実に示している。ウクライナ側は、弾道ミサイル迎撃システムの不足に加え、防空網のひっ迫により、「バンデロール」と呼ばれる新型のジェット推進式巡航ミサイルの攻撃に苦戦している。

AMIS 及び IFPRI 共催ウェビナーでの国際穀物理事会(IGC)の発表において、今回の黒海における輸出の混乱が世界の小麦市場に与える重要な焦点として、以下が挙げられた。

- 2026 年7月中旬以降、港湾インフラや商船に対する攻撃激化を受け、黒海及びアゾフ海のウクライナ及びロシアの港からの海上輸送はほぼ停止された。
- 代替ルートでは、上記の海上輸送されていた貨物量の最大で半分しか対応できないと推定されている。
- ロシア及びウクライナにおける国内小麦価格の下落と物流費用の上昇により、農家の利益率低下の懸念が高まっており、2027/28 年度の作付面積が減少する可能性がある。
- 季節的な供給量の増加と輸出先が限定されていることで、貯蔵能力不足についても懸念が高まっている。
- 継続的な外交努力にも関わらず、これまで持続的な海上停戦は確立されていない。

(2) 世界の小麦市場

国際穀物理事会(IGC)の発表によれば、小麦の輸出価格は、本年7月中旬以降の黒海情勢の緊迫化以降、上昇しているものの、上昇幅は比較的小さく、9月上旬に3年ぶりの高値を記録したが、2022年5月のピーク時に比べ、かなり低い水準に留まっている。(**図2**)。

図2 米国、ロシア、ウクライナの小麦輸出価格(FOB)の推移



出典:IGC のデータをもとに農林水産省で作成

IGC によれば、2026/27 年度の初期（7-8月）における小麦の輸出量は前年同期を下回っているが、産地により状況はまちまちである。需要は黒海地域からカナダ、EU へとシフトしている（**図3**）。

2026/27 年度の小麦の生産量は、前年度に比べ3%減となるものの、過去2番目の高水準を記録している。重要なのは、主要輸出国と、輸入国間で大きな変化（主要輸出国の減産、輸入国の増産）が起こっていることである（**図4**）。

2026/27 年度の主要輸入国の小麦購入量は、作柄の改善により頭打ちとなる見通しで、黒海地域の供給混乱を背景に、一部の国では国内産への依存度が高まると予測されている（**図5**）。

ここ数ヶ月、エネルギー価格の高騰や黒海での供給混乱が、国際小麦価格を下支えしている。しかし、輸入国における国内の供給が改善し、運賃も高止まりしていることを受け、輸入業者は購入を先送りしたり、購入量を減らしたりしていることに加え、黒海情勢の緩和への期待が依然として残っていることから、全体的な国際小麦価格の上昇は限定的となっている。これまでのところ、黒海産からの需要のシフトは限定的である。混乱が続けば、カナダ、EU 及び南半球の産地から調達する輸入業者が恩恵を受けると見込まれている。輸入地域によって反応は様々になると予測され、在庫の取り崩し（中東及びアジア、サブサハラ・アフリカ）や需要の抑制・代替などが見込まれている（**図5**）。現在も続く供給の混乱を受け、純輸入国全体で国内生産の拡大と自給率の向上に向けた取組みが更に強化される見込みである。

図3　小麦の7－8月の輸出状況

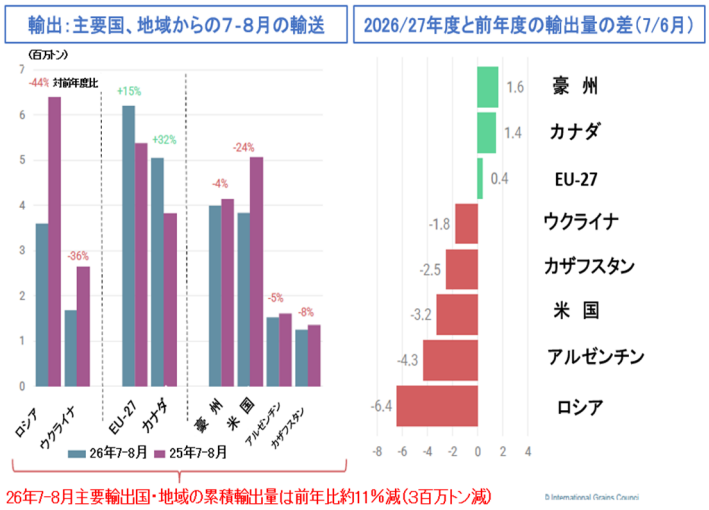


図4　小麦の各国・地域の生産量

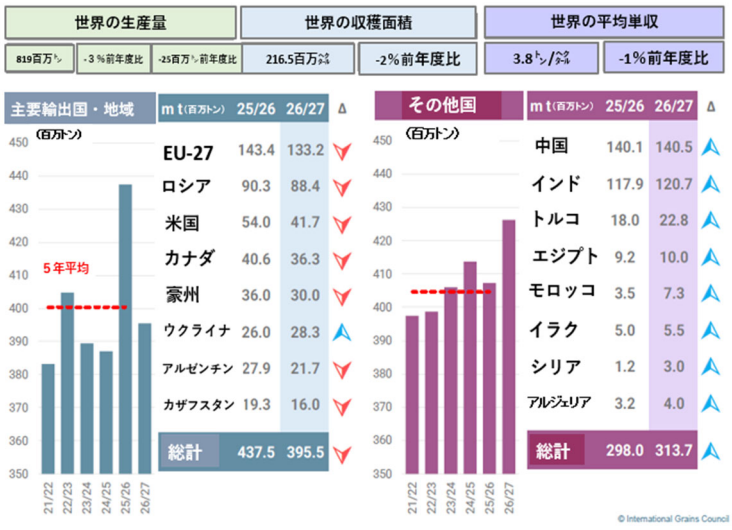
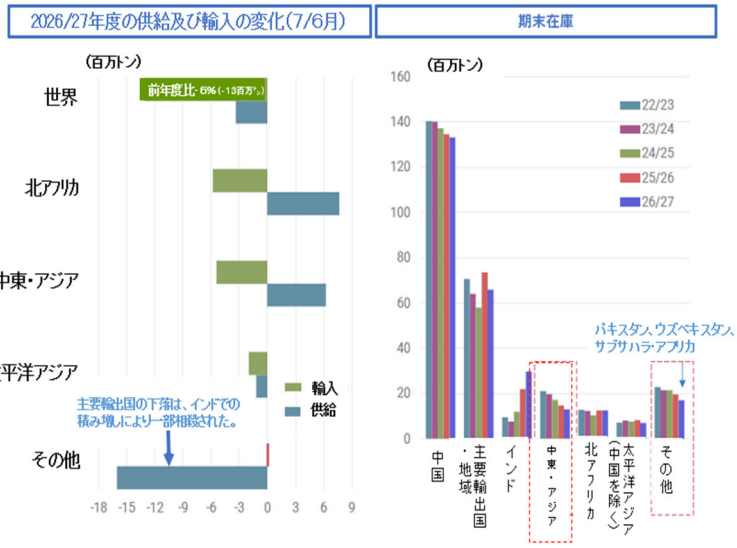


図5　2026/27 年度の供給及び輸入の変化及び期末在庫量



出典：AMIS ウェビナー資料（情報源：IGC）

（3） ウクライナの動向

ウェビナーにおけるウクライナ穀物協会（UGA）の報告によれば、2026年のウクライナ産穀物及び油糧種子の生産量は、前年（80,099 千トン）と比べ 10.2%増の 88,284 千トンと予測され、過去4年と比べても記録的な生産を達成している（**図6**）。しかしながら、現在の最大の障害は、ロジスティック、輸送にある。

ウクライナは、穀物の約 90%をオデーサ港から輸出していた。7月中旬以降、ロシアの攻撃により、この輸送ルートが停止された。そのため、代替ルートの検討が行われ、鉄道輸送能力を拡大させ、EU への輸出を行おうとしている。しかしながら、各国との調整に技術的かつ政治的にも苦労している。9月8日には、ポーランドで特別制限が発せられ、ポーランドの特別ターミナルを利用することが出来なくなった。そのため、ウクライナから輸出した穀物を一時保管できなくなり、鉄道から鉄道という形態をとる必要があり、輸送がかなり困難となっている。

図6 ウクライナの穀物及び油糧種子の輸出量及び生産量

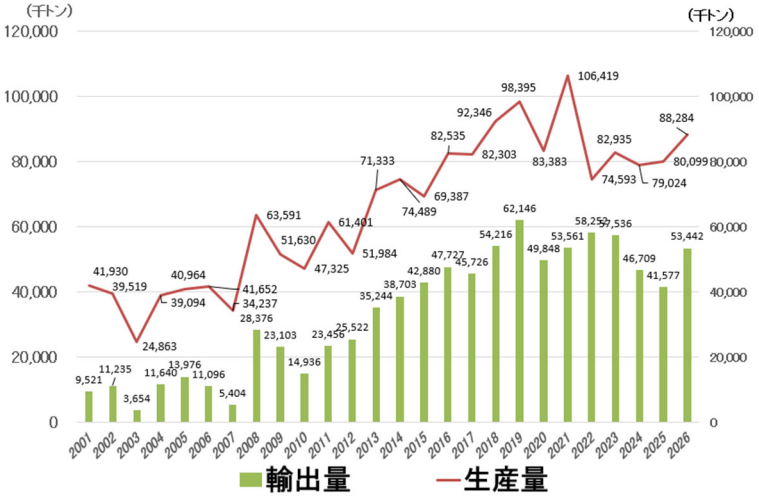


図7 ウクライナの穀物及び油糧種子の輸出方法予測

(単位:千トン)	7月	8月	9月	10月	11月	12月	2026/27年度	割合
陸上	58,760	64,672	79,868	85,000	90,000	95,000	473,300	3.3%
鉄道	322,372	635,041	871,583	900,000	1,000,000	1,100,000	4,828,996	33.7%
海上輸送	2,497,336	716,356	1,145,750	1,350,000	1,400,000	1,470,000	8,579,443	59.9%
ドナウ川沿岸の港	105,164	564,230	992,207	1,200,000	1,250,000	1,300,000	5,411,601	37.8%
オデッサ港	2,389,071	152,126	153,545	150,000	150,000	150,000	3,144,740	22.0%
その他	3,102	0	0	0			3,102	0.0%
フェリー	10,155	67,980	76,690	95,000	95,000	95,000	439,825	3.1%
総計	2,888,624	1,484,049	2,173,891	2,430,000	2,585,000	2,760,000	14,321,564	100.0%

出典：AMIS ウェビナー資料（情報源：ウクライナ穀物協会（UGA））

同時に、ウクライナは、スロバキア、ハンガリー、ルーマニアと調整し、輸出能力の拡大を図っているが、主要な代替コリドー（要路）としたいのは、ドナウ川の利用である（**図1**）。9月には、ドナウ川から、約 100 万トンの穀物を輸出している（**図7**）。

（4） ロシアの動向

現地報道によれば、ロシアでは、7月 10 日頃からアゾフ海経由での穀物輸出がドローン攻撃により停止し、黒海でも国内最大の穀物輸出港であるノヴォロシースクで8月 13 日までに全穀物ターミナルで輸出が停止した。再開の時期は不明で、ノヴォロシースクの3つの穀物ターミナルの1つであるノヴォロシースク穀物製品コンビナートでは、操業再開には1～4ヶ月かかる可能性があるとの意見があった（**図1**）。

ルスアグロトランス分析センターによれば、ロシア産小麦の約半分、年間 4,400～4,500 万トンが輸出されているが、2026 年8月の小麦輸出量は、前年同月比で約 60%減の 180 万トンに落ち込み、2010 年来の低水準になる見込み。前年はロシア産穀物輸出の 80～90%が黒海・アゾフ海経由だったため、他の港への切り替えは難しい。例えば、ノヴォロシースクのターミナルは前年、月 350 万トンを扱ったのに対し、北西部（バルト海）のウスチ・ルガ、ヴィソツクなどの港は月 10～20 万トンに過ぎなかった。

輸出減少は、物流だけでなく輸入国側の問題も加わっている。エジプトとトルコは自国の在庫と収穫量増加を背景に、ロシア産穀物の買付けを減らしている。イラン向け小麦輸出も事実上停止している。

その一方、世界市場では黒海からの供給減少を受けて価格が上昇しており、8月 24 日時点の豪州産小麦の輸出価格は 291 ドル/トンと7月初めから 9.4%上昇した。

ロシア穀物同盟の速報値によれば、9月のロシアの穀物輸出量は、前年同月と比べ4分の1の約 170 万トンで、その内小麦は前年同月と比べ4分の1の 136 万トン、大麦は 22 万トン、とうもろこしは同 12%減の 10 万トンだった。小麦の主な輸出先は、エジプト(22 万トン)、ケニア(16 万トン)、サウジアラビア(13 万トン)、リビア(10 万トン)、イラン(9万トン)、とうもろこしは、イラン(10 万トン)とアフガニスタン(0.5 万トン)だった。

この状況が長期化すれば、2027 年の作付面積にも影響する可能性がある。

現地調査会社によれば、2026 年秋の作付けは燃料費や物流費の上昇により、生産コストが前年に比べ約 20%高くなる見通しで、小麦の収益性も低下しているため、農家に作付面積を増やす経済的な動機が乏しくなっている。

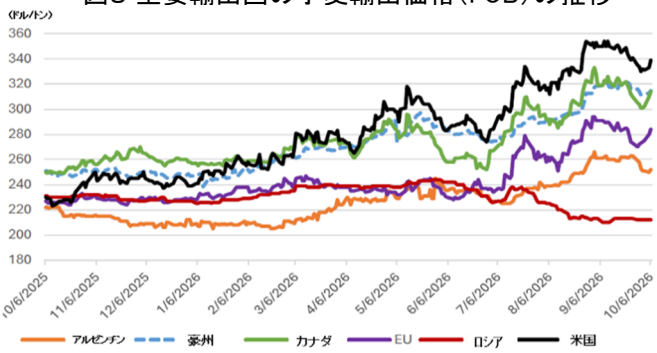
(5) 小麦の輸出価格

USDA「Grain: World Markets and Trade」(2026.9.11)によれば、8月 12 日の米国農務省食料需給報告(WASDE)から9月 11 日までの間、ロシアを除く主要輸出国において、小麦の輸出価格は急騰が続いた。ロシアでは収穫により供給量が増加し、輸出ルートも制約があり、小麦価格は 14 ドル/トン下落し 210 ドル/トンとなった。世界最大の小麦輸出国が黒海ルート経由での輸送に困難を抱える中、ロシアやウクライナに比べ市場へのアクセスが容易なその他の供給国の輸出価格は、概ね上昇した。

アルゼンチンの輸出価格は 23 ドル/トン上昇し、319 ドル/トンとなったが、依然として2番目に競争力のある水準を維持している。EU の輸出価格は 28 ドル/トン急騰し、290 ドル/トンとなった。これは、小麦の収穫量が大幅に減少しているにも関わらず、黒海沿岸の輸出国が供給するいくつかの市場にとって EU が最も近い産地であることから、輸入国からの需要が高まると見込まれたためであった。豪州の輸出価格は、生育が進むにつれ 31 ドル/トン上昇し、319 ドル/トン、米国の輸出価格も 33 ドル/トン上昇し、354 ドル/トンとなった。

同「Grain: World Markets and Trade」(2026.10.9)によれば、9月 11 日の WASDE 公表以降、ロシアを除く全ての主要輸出国において、小麦の輸出価格は下落した。ロシアの黒海産製粉用小麦価格は2ドル/トン上昇したが、輸送上の制約により実質的な上昇とはいい難く、輸出はバルト海沿岸の港湾を経由する傾向が強まっている。米国の輸出価格は、輸出需要の低迷により 11 ドル/トン下落した。EU では生産量の減少にも関わらず、黒海産輸出国の価格下落が重くのしかかかり、価格は7ドル/トン下落した。カナダの価格は、収穫が終盤に差し掛かり供給圧力が強まったことから、5ドル/トン下落した。天候の改善により単収への懸念が和らいだことから、アルゼンチン9ドル/トン、豪州も小幅(4ドル/トン)に下落した(**図8**)。

図8 主要輸出国の小麦輸出価格(FOB)の推移



アルゼンチン	豪州	カナダ	EU	ロシア	米国
$252	$315	$314	$284	$212	$339

出典:USDA「Grain: World Markets and Trade」(2026.10.9)

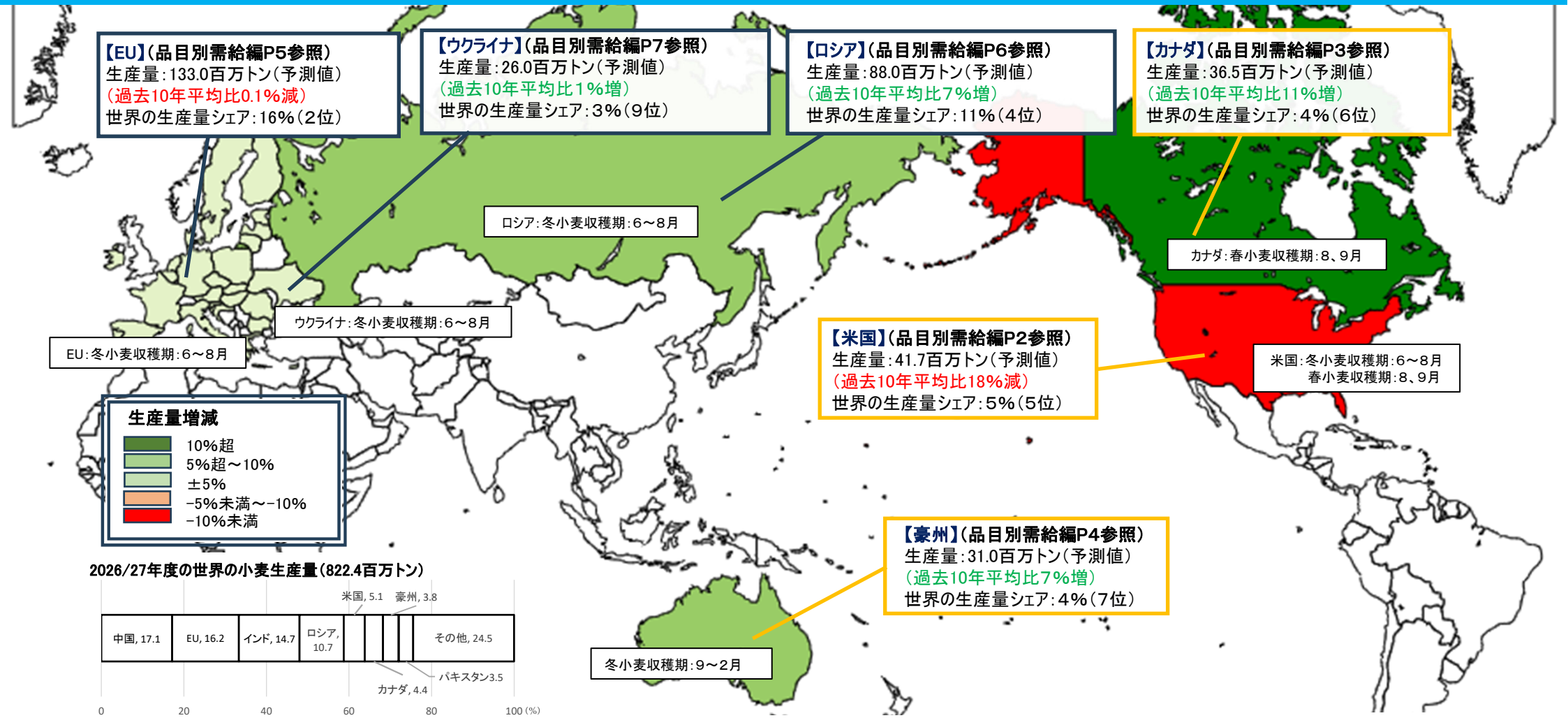
2 今後の動向

USDAの10月のWASDE報告によれば、2026/27年度の世界の小麦の輸出量は前月予測から更に減少し、最大の輸出国であるロシアの減少幅が最も大きく、300万トン減の4,000万トンとなり、5年ぶりの低水準となる見込み。2026/27年度（2026年7月～2027年6月）の第1四半期において、ロシアの小麦輸出量は前年同期比で急減したが、その一要因として、継続する紛争や黒海沿岸の港湾における貿易の混乱が挙げられ、中東及び北アフリカ向け輸出は急減した。港湾データによれば、エジプト向けロシア産貨物の出荷量は前年同期比で50％近く、トルコ向けは90％近く減少した。これらの地域の主要な輸入国の内、数カ国では2026/27年度の小麦生産が好条件の下で進み、豊作となったため、第1四半期の輸入需要が減少した。トルコ（2,300万トン）及びエジプト（1,000万トン）両国で過去最高の収穫量となる見込み。また、繰越在庫が活用され、短期的な輸入需要を更に緩和している。エジプトは2025/26年度に過去最高の輸入量を記録し、特に年度末の数ヶ月間の大規模な買入れを行った。トルコ穀物委員会は、最近、保有在庫の内550万トンを市場に放出すると発表した。サハラ以南のアフリカやアジアで価格に敏感な輸入国も、ロシアの輸出減に対応している。世界的な小麦価格の高騰を受け、バングラデシュとナイジェリアは小麦の代替に目を向け、輸入量を削減している。ナイジェリアは、黒海産小麦の輸出量減少を補うため、EU産小麦の輸入を増やしており、一方、バングラデシュはカナダ産小麦への依存度を高めるとともに、小麦の消費量を減らし、コメ等のより手頃な価格の国内産主食への切り替えが進んでいる。価格競争力のある供給国であるアルゼンチンは、アジア（特にインドネシアとタイ）への輸出量を増やしており、11月の収穫後には豊富な供給が見込まれている。小麦価格の高騰とロシアからの供給制約を受けて、世界各国は需要を満たすため、今後も供給元の多様化を続ける可能性が高まっている。

また、2026/27年度（2026年4月～2027年3月）のインドの小麦輸出量は、前年比で4倍以上増の200万トンに達すると予測されている。ロシアやウクライナからの輸出が港湾閉鎖により制約され、代替輸出国の価格高騰が続く中、現在、インドには近隣の価格に敏感な市場に供給する好機が訪れており、既にバングラデシュやネパールへの輸出を拡大し、またアラブ首長国連邦やインドネシアといった従来市場への出荷拡大も期待されている。

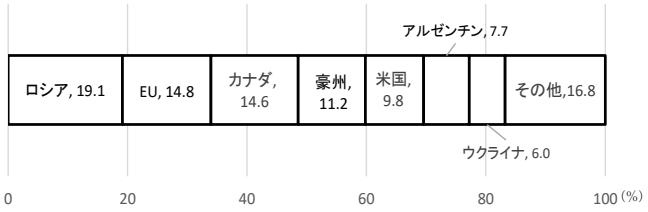
このように、ロシア、ウクライナの紛争が新たな局面に入り、両国の黒海の主要港が閉鎖するという状況の中、小麦市場は、インドのようなこれまで主要輸出国ではなかった国の小麦輸出の増加、輸入国における小麦の国内自給増加等の対応が見られ、ロシア、ウクライナ間における外交による和平交渉が進まない中、今後の世界の小麦需給の動向については、よりグローバルな動きが高まる可能性が示唆されており、今後の動向を含め注視していきたい。

資料1－1　小麦の主要輸出国の生産量（過去10年平均との増減比較）　2026/27年度（10月版）

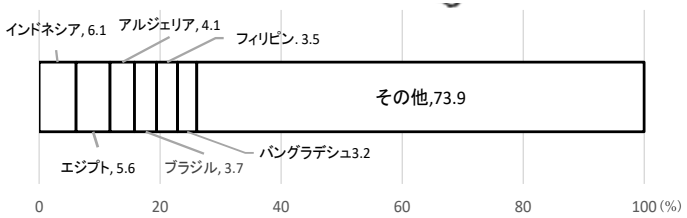


2026/27年度の世界の小麦生産量（822.4百万トン）

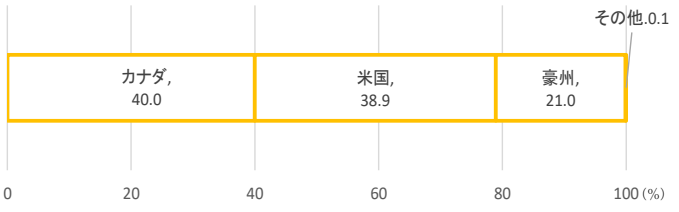
2026/27年度の世界の小麦輸出量（209.0百万トン）



2026/27年度の世界の小麦輸入量（204.8百万トン）



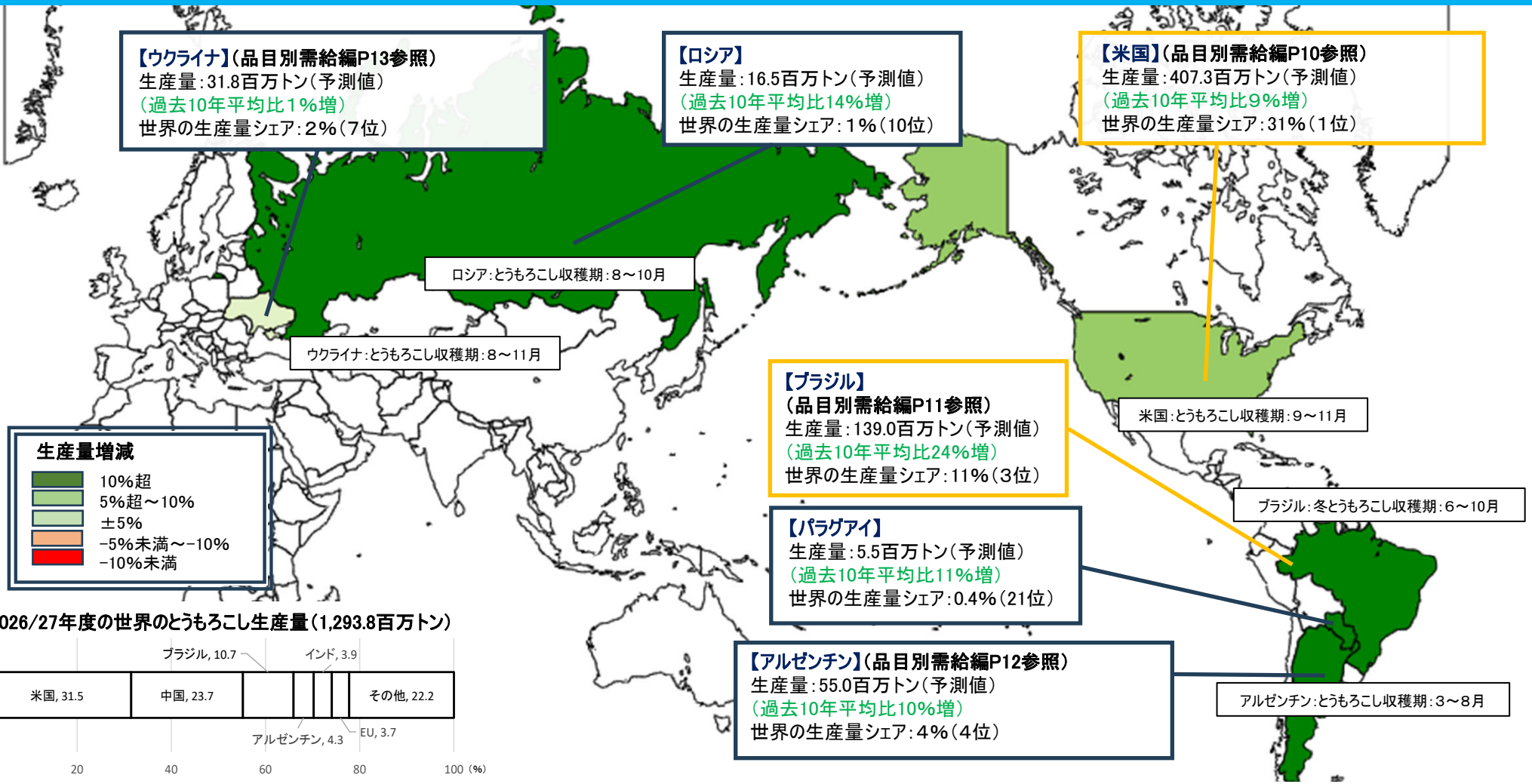
2025年の日本の小麦輸入量（5.3百万トン）



○ 2025年度の日本の小麦輸入量は565万トンであり、日本の小麦国内消費仕向量（659万トン、うち食用は518万トン）の85.8%を占める。
○ 輸入小麦の1人1日当たり供給熱量は260kcalと、1人1日当たり総供給熱量（2,237kcal）の11.6%を占める(2025年度）。

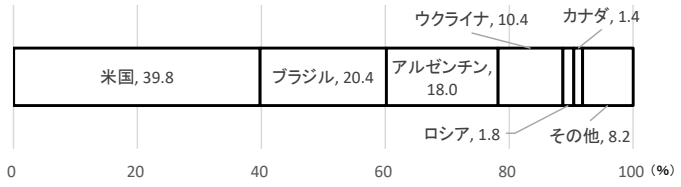
出典：USDA「PS&D」（2026.10）、財務省「貿易統計」（2025年輸入量）、農林水産省「令和7年度食料需給表（概算値）」（破線枠内）、AMIS「Supply and demand balances manual」（収穫期）をもとに農林水産省で作成。

資料1－2　とうもろこしの主要輸出国の生産量（過去10年平均との増減比較）　2026/27年度（10月版）

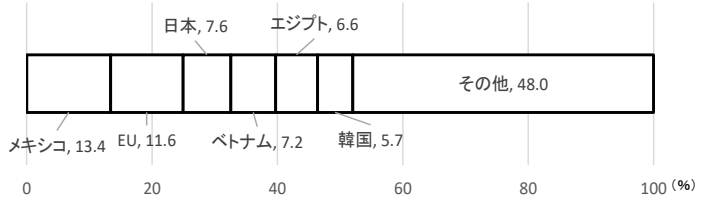


2026/27年度の世界のとうもろこし生産量（1,293.8百万トン）

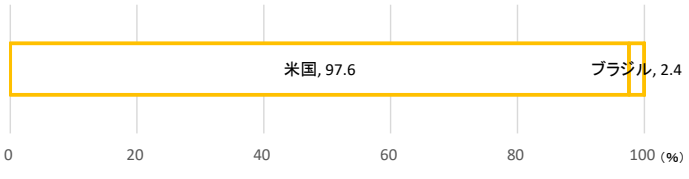
2026/27年度の世界のとうもろこし輸出量（210.7百万トン）



2026/27年度の世界のとうもろこし輸入量（203.4百万トン）



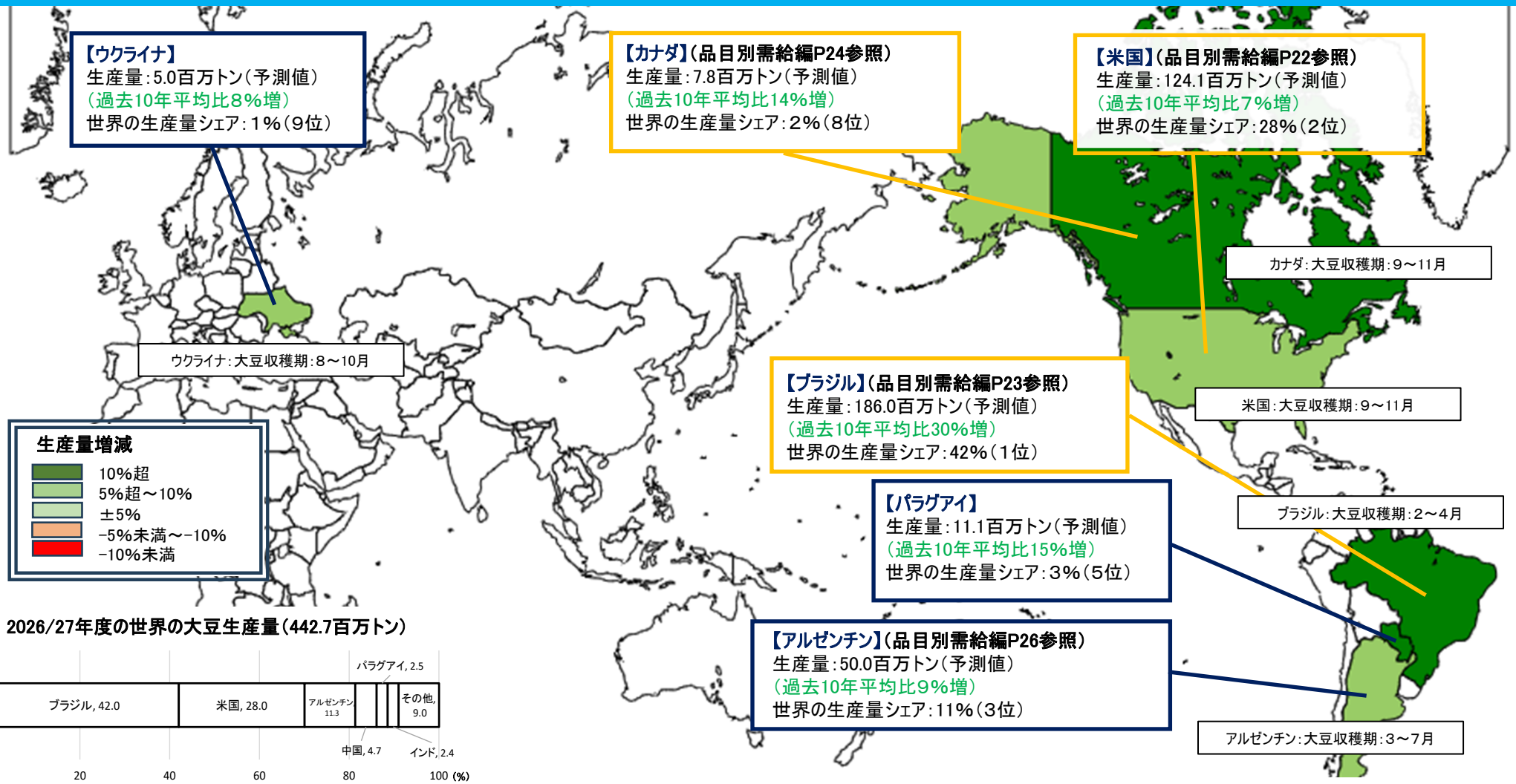
2025年の日本のとうもろこし輸入量（15.6百万トン）



○ 2025年度の日本のとうもろこし輸入量は1,581万トンと、日本のとうもろこし国内消費仕向量（1,551万トン、うち飼料用は1,234万トン）のほぼ全量を占める。

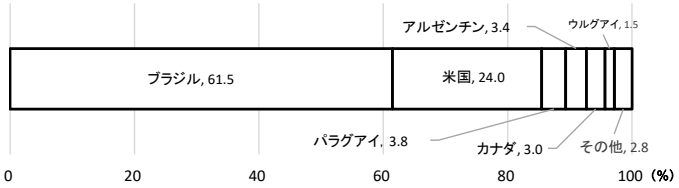
出典：USDA「PS&D」（2026.10）、財務省「貿易統計」（2025年輸入量）、農林水産省「令和7年度食料需給表（概算値）」（破線枠内）、AMIS「Supply and demand balances manual」（収穫期）をもとに農林水産省で作成。

資料1－3　大豆の主要輸出国の生産量（過去10年平均との増減比較）　2026/27年度（10月版）

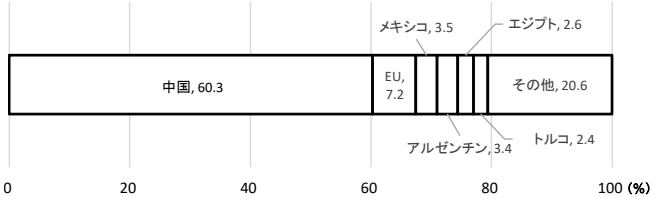


2026/27年度の世界の大豆生産量（442.7百万トン）

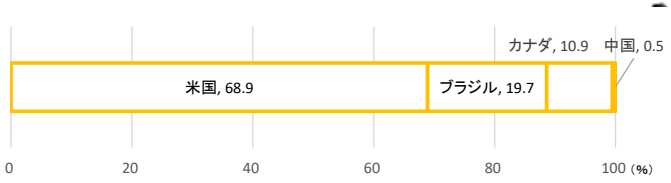
2026/27年度の世界の大豆輸出量（192.0百万トン）



2026/27年度の世界の大豆輸入量（190.8百万トン）



2025年の日本の大豆輸入量（3.3百万トン）



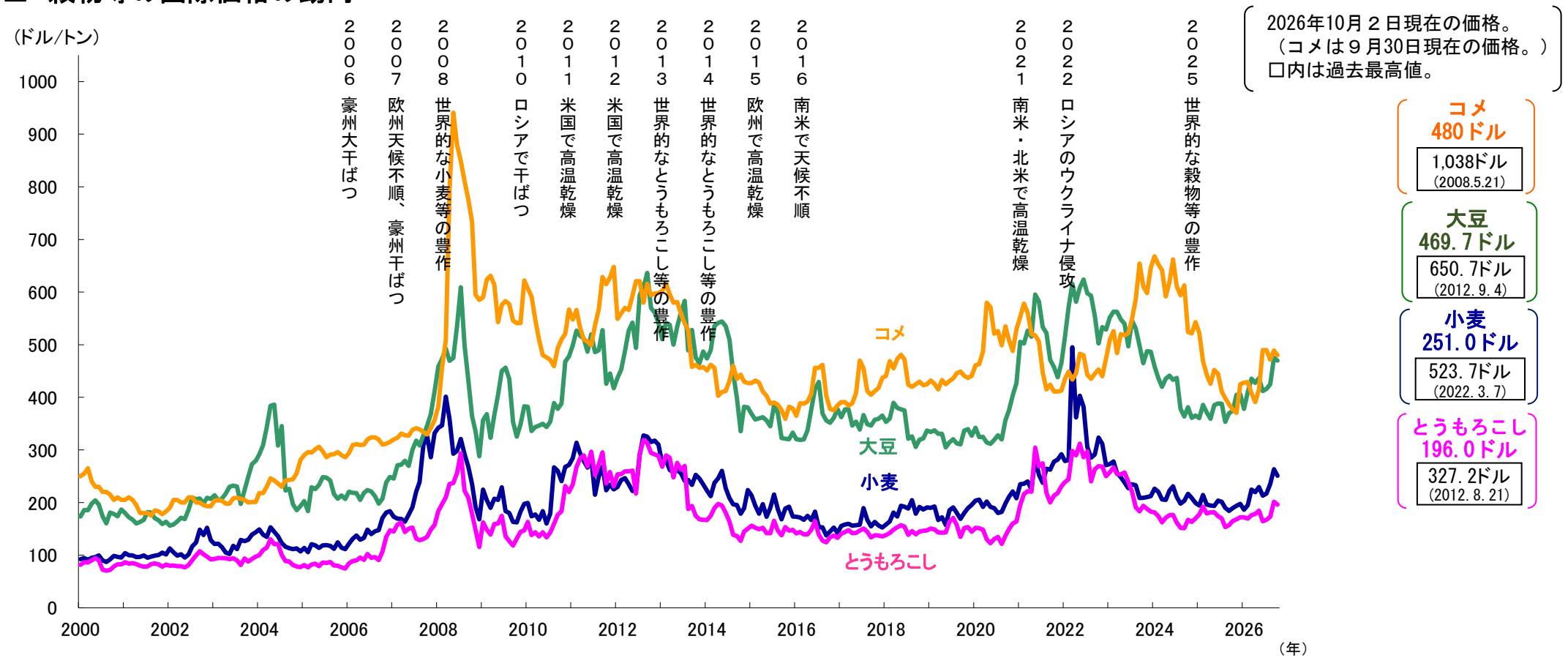
○ 2025年度の日本の大豆輸入量は337万トンであり、日本の大豆国内消費仕向量（382万トン、うち大豆油などの加工用は275万トン、食用は90万トン）の88.3%を占める。
○ 輸入大豆の1人1日当たり供給熱量は60kcalと、1人1日当たり総供給熱量（2,237kcal）の2.7%を占める（2025年度）。

出典：USDA「PS&D」（2026.10）、財務省「貿易統計」（2025年輸入量）、農林水産省「令和7年度食料需給表（概算値）」（破線枠内）、AMIS「Supply and demand balances manual」（収穫期）をもとに農林水産省で作成。

資料１－４　穀物等の国際価格の動向（ドル/トン）

○　穀物等価格は、とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から下落。2020年後半から南米の乾燥、中国の輸入需要の増加、2021年の北米の北部の高温乾燥、2022年のロシアのウクライナ侵攻等により上昇も、侵攻前の水準まで下落。
　とうもろこし、大豆は、ウクライナ侵攻時に高騰も、ブラジル等の豊作から侵攻前の水準まで下落。とうもろこしは、2026年７月以降、ウクライナ情勢悪化等を受け上昇傾向。大豆は、中東情勢の緊迫化、中国の買付け等を受け上昇傾向。
　小麦は、2022年、ウクライナ侵攻により史上最高値を更新も、ウクライナからの臨時回廊等による輸出再開などもあり侵攻前の水準まで下落。その後、2026/27年度米国産小麦の減産、ウクライナ情勢悪化等を受け上昇傾向。
　コメは、2022年９月以降、インドの輸出規制強化、インドネシアの需要増等から上昇も、2024年以降、インドの輸出規制解除等を受け下落。2026年５月以降、中東情勢の影響に加え、エルニーニョ現象の影響による次期作の見通しの不確実性を受け大きく上昇。

□　穀物等の国際価格の動向



注１：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第１金曜日の期近終値の価格（セツルメント）である。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第１水曜日のタイうるち精米100%２等のＦＯＢ価格である。なお、今月のコメは９月30日現在の価格。

注２：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料１－５　サプライチェーン等に関する状況

○黒海及びアゾフ海での攻撃激化により穀物等の輸出が減少。（2026年10月20日時点）

生産国の情報	チョークポイント情報
○米国 ①USDA「Grain Exports Dashboard」によれば、９月のメキシコ湾から日本向け穀物の海上運賃は、前月72.94ドル/トンから上昇し76.38ドル/トン（２月54.19ドル/トン 、前年同月57.13ドル/トン）。太平洋岸北西部（PNW）から日本向けは、前月36.75ドル/トンから上昇し37.31ドル/トン（２月30.50ドル/トン、前年同月29.63ドル/トン）。 ②USDA「Transportation Updates and Regulatory News」によれば、10月１日、BNSF鉄道（BNSF）、ユニオン・パシフィック鉄道（UP）は、2026/27市場年度のとうもろこしの鉄道運賃を改定。 BNSFは、太平洋岸北西部（PNW）の輸出ターミナル向けの運賃を全ての出発地で１車両当たり200ドル引き上げ。また、テキサス州ヘレフォードと米国メキシコ国境間の１車両当たり200ドルの運賃差を廃止。 UPは、全ての出発地からの運賃を１車両当たり225ドル引き上げ。 運賃改定に加え、荷主は１マイル当たり平均0.59ドルの燃料サーチャージが課され、９月から11セント上昇。 ③USDA「Transportation Updates and Regulatory News」によれば、９月21日までの１週間の米国のディーゼル燃料の平均価格は1ガロン当たり6.529ドルと史上最高を記録。７月初旬から2ドル近くの上昇。米国中西部の同週の価格は、平均で1ガロン当たり6.68ドルで前年同期に比べ294.9セント上昇。 10月５日までの1週間の米国のディーゼル燃料の平均価格は1ガロン当たり6.20ドル。過去最高となった９月21までの１週間の6.53ドルから33セント下落したものの、前年同期に比べ2.49ドル上昇。 ディーゼル燃料は、収穫作業に使用される多くの機械のほか、トラック、鉄道、はしけの燃料として広く利用。 ○カナダ ①Quorum Corporation「Grain Monitoring Program Report for: August 2026」によれば、８月のカナダ西部の鉄道による穀物輸送量は、７月の505万トンと比べ2.0%増、前年同月（320万トン）と比べ58.6%増の515万トン。2026/27年度（2026年８月～2027年７月）の好調なスタートとなった。８月の港湾出荷量は、７月の378万トンと比べ8.7%増、前年同月と比べ100.6%増の411万トン。一方で８月の船舶の港での待機日数は、好調なスタートにより７月の7.2日から7.4日にわずかに増加し、前年同月に比べ68.2%増となった。	○パナマ運河 ①９月のパナマ運河通航数は、979隻で１日平均32.63隻と前月33.19隻から減少。なお、パナマックス閘門において、10～11月に複数の保守点検が予定されている。 ②パナマ運河のガトゥン湖の水位は、10月15日現在、85.7フィートで同月過去５年平均（85.5フィート）を上回る。 ③パナマ運河庁（2026.9.28）によれば、10月15日以降の予約日を対象にパナマ運河の１日当たりの通航数を33隻（ネオパナマックス閘門10隻、パナマックス閘門23隻）に引き上げ（通常は１日当たり36～40隻）。 また、ネオパナマックス閘門を通航する船舶の最大許容喫水について、９月２日から48.0フィートが適用されていたが、９月28日から追って通知があるまで49.0フィートに引き上げ。なお、大部分の穀物輸送船舶が通航するパナマックス閘門については、喫水制限の予定はない。 ④USDA「Transportation Updates and Regulatory News」によれば、パナマ運河の通航制限によりメキシコ湾岸から中国へ輸出される米国産大豆は喜望峰を経由。USDAのFederal Grain Inspection Serviceによれば、９月４～24日にかけ、ミシシッピ州メキシコ湾岸ターミナルで輸出検査を受けた中国向け船舶は24隻（大豆1.6百万トン）で全て喜望峰を経由。一方、同期間の日本向け７隻のうち６隻がパナマ運河経由、喜望峰経由は１隻のみ。

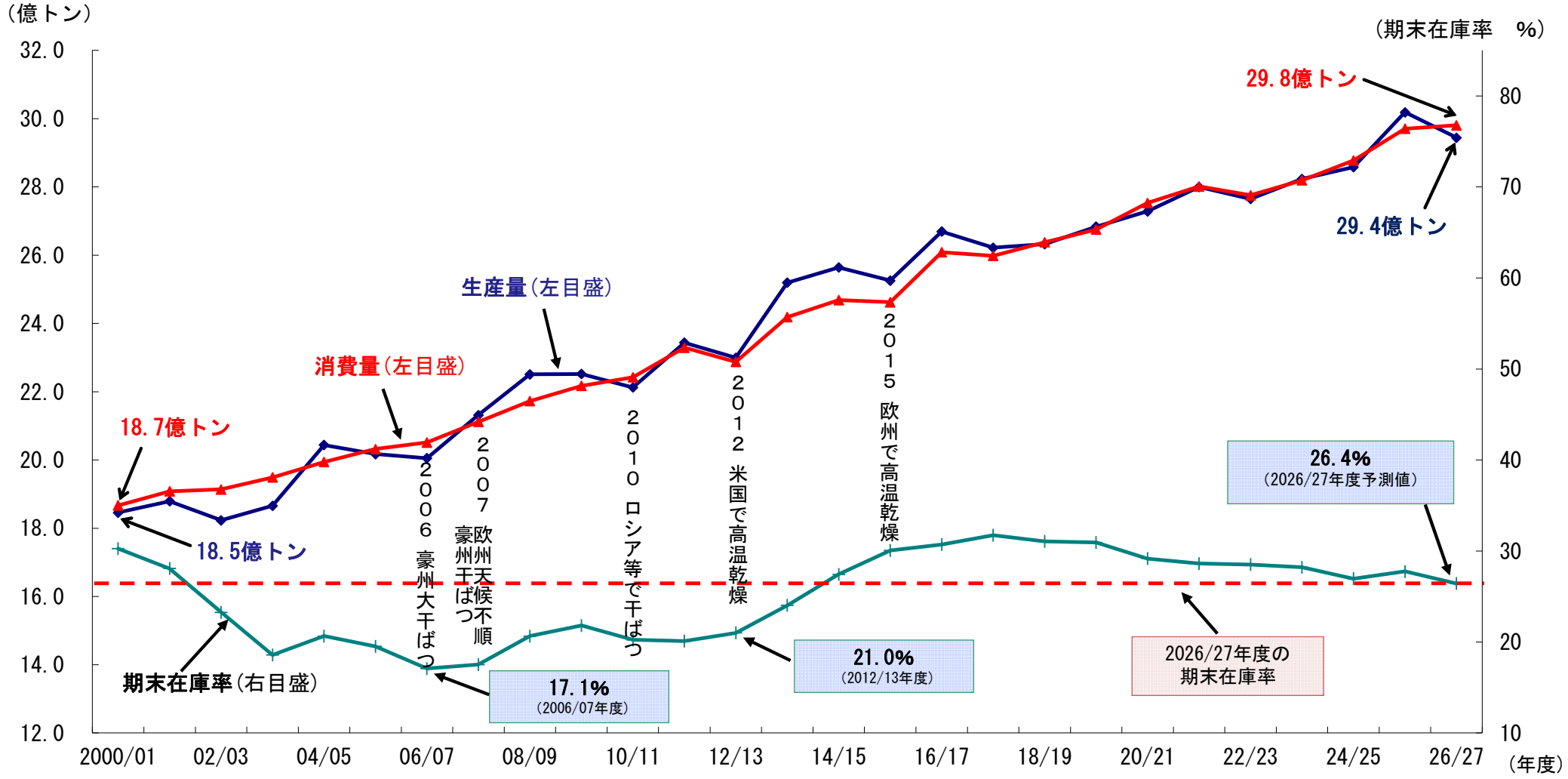
資料１－５　サプライチェーン等に関する状況

生産国の情報	チョークポイント情報
②同「Grain Monitoring Program Weekly Performance Update」（2026.10.13）によれば、2026/27年度第９週（2026年９月28日～10月４日）のカナダ西部港湾ターミナルの在庫は1.59百万トンに増加し、能力の82%が利用。なお、バンクーバーの空きは限られている。 2026/27年度第９週の西海岸の荷下ろしは、9,879両（バンクーバー8,548両、プリンス・ルパート1,331両）で、4週平均と比べ21%増、前年同期と比べ６%増。 2026/27年度第９週現在、年初からのカナダ西部港湾ターミナルエレベーターからの出荷量は、前年同期と比べ16%増、過去３年平均と比べ７%増。 2026/27年度第10週のバンクーバーにおける船舶待機数は30隻（直近１年平均24隻）。プリンス・ルパートにおける船舶待機数は３隻（同３隻）。 〇インド AMIS「Market Monitor No. 141」によれば、８月24日、インド外国貿易部は、通知第34号（2026-27年）及び第35号により、小麦、小麦粉及びその他の小麦を原料とする製品の輸出禁止を解除。 〇ブラジル AMIS「Market Monitor No. 141」によれば、７月14日、ブラジルの国家エネルギー政策評議会（CNPE）は、ガソリンに混合するエタノールの比率を８月１日から180日間に限り、従来の30%から32%に引き上げることを承認。	〇黒海及びアゾフ海 報道（10月）によれば、ウクライナ、ロシア双方の黒海港湾からの輸出が困難な状態となっているが、依然としてオデーサの港湾施設等へのドローンによる攻撃が続いている。また、幹線道路を走行中のトラックやトレーラー、民間船舶への攻撃も発生している。

資料２　穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

○ 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2026/27年度は、2000/01年度に比べ1.6倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
○ 2026/27年度の期末在庫率は、消費量が生産量を上回り、前年度より減少し、26.4%。過去の価格高騰年の2012/13年度(21.0%)を上回る見込み。

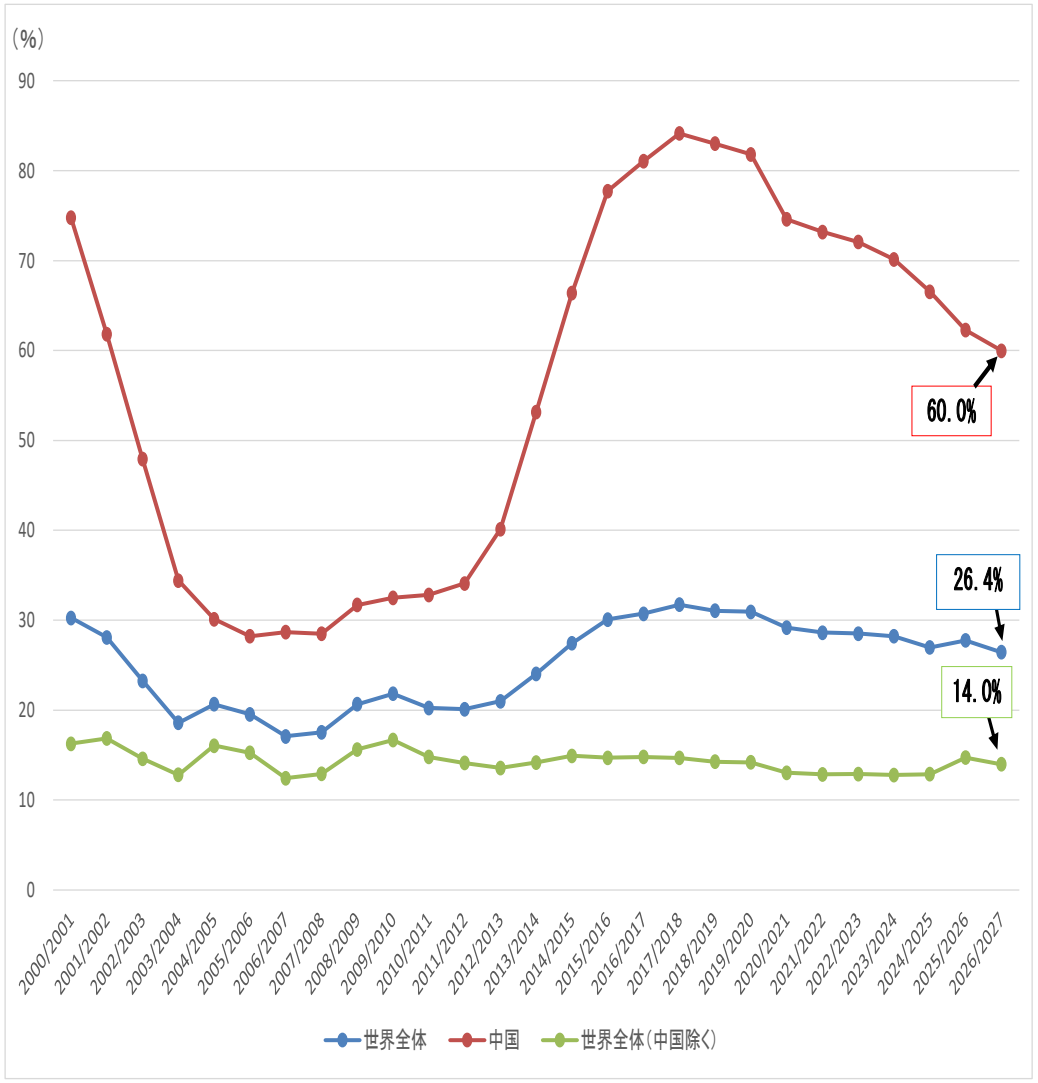
□　穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移



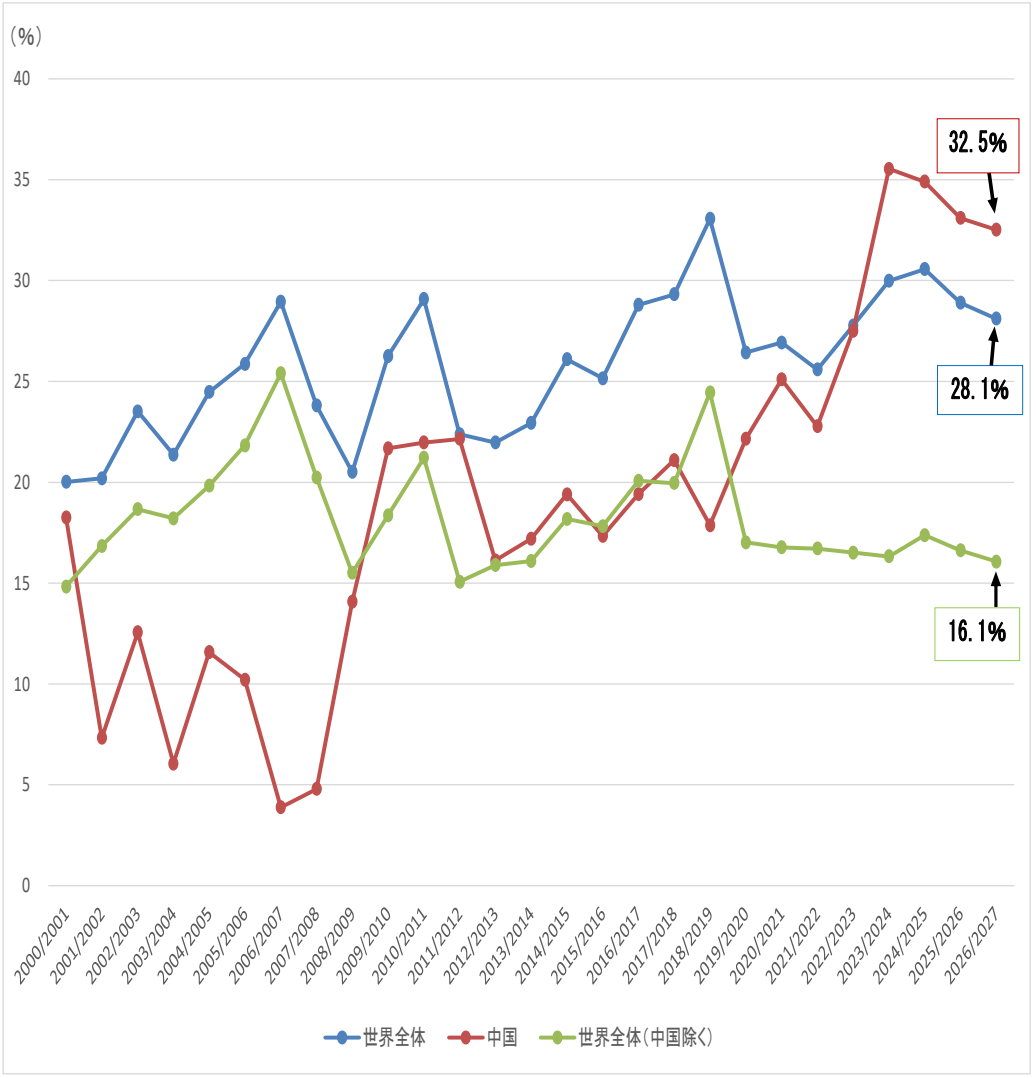
資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(October 2026)、「PS&D」
（注）なお、「PS&D」 については、最新の公表データを使用している。

資料３－１　穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、大豆）

○ 穀物全体の期末在庫率の推移



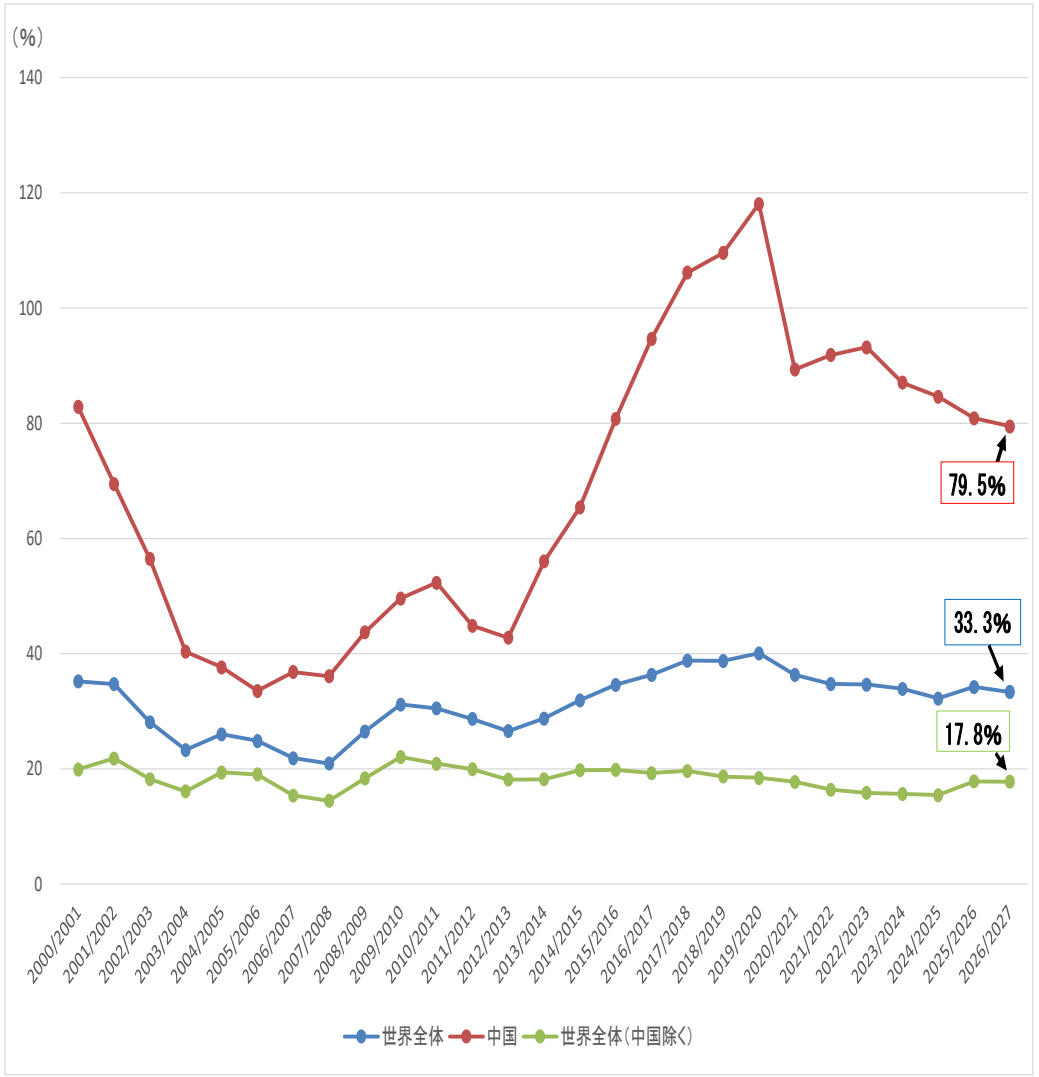
○ 大豆の期末在庫率の推移



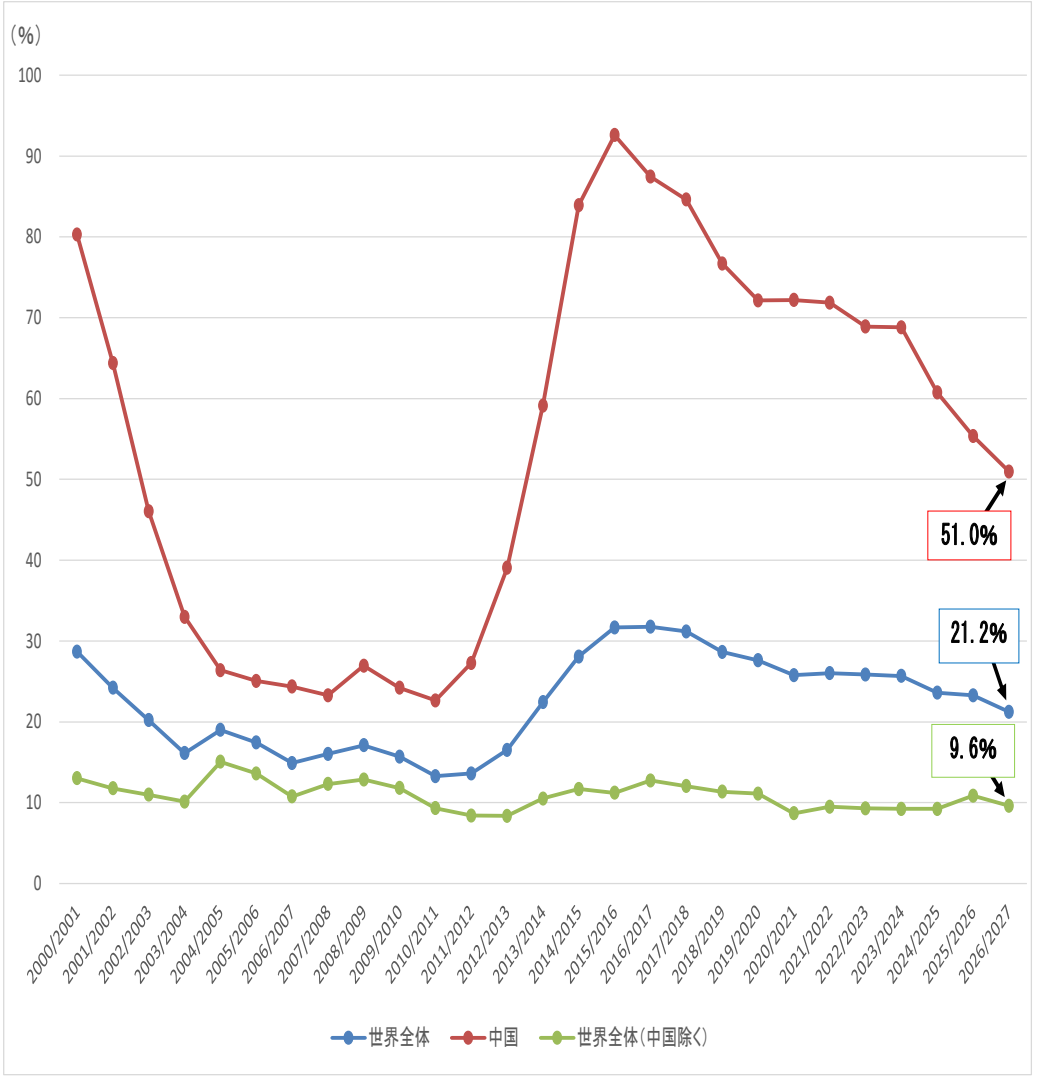
資料：米国農務省「PS&D」（October 9, 2026）
注：　1)穀物はとうもろこし、小麦、コメ等（大豆除く）。
　　2)世界の期末在庫率(%)＝期末在庫量／（消費量＋輸出量－輸入量）×100　※ただし大豆については、世界の期末在庫率(%)＝期末在庫量／消費量×100
　　3)中国の期末在庫率(%)＝中国の期末在庫量／(中国の消費量＋中国の輸出量）×100
　　4)中国除く期末在庫率(%)＝中国除く期末在庫量／(中国除く消費量＋中国除く輸出量）×100

資料３－２　穀物等の期末在庫率の推移（小麦、とうもろこし）

○ 小麦の期末在庫率の推移



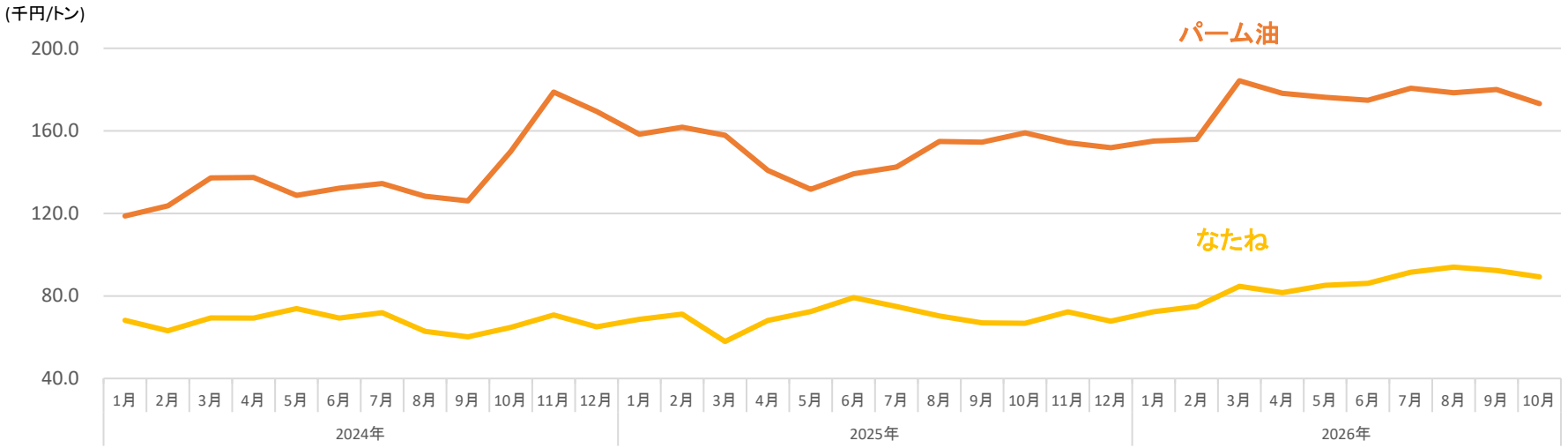
○ とうもろこしの期末在庫率の推移

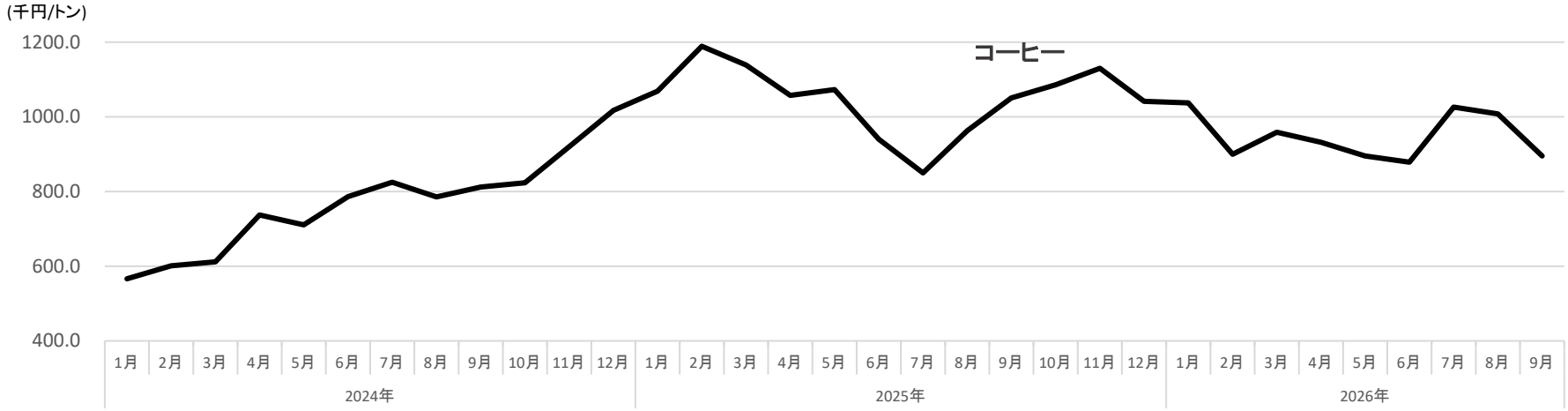


資料：米国農務省「PS&D」(October 9, 2026)
注：　1)小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。
　　2)世界の期末在庫率(%)＝期末在庫量／（消費量＋輸出量－輸入量）×100
　　3)中国の期末在庫率(%)＝中国の期末在庫量／(中国の消費量＋中国の輸出量）×100
　　4)中国除く期末在庫率(%)＝中国除く期末在庫量／(中国除く消費量＋中国除く輸出量）×100

資料４－１　加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の動向

○　パーム油の直近の動きとして、中東情勢の影響による原油価格相場の高騰等から上昇している。10月の月央値は173.2千円/トンとなり、前月の月央値を下回ったが、依然として高い水準で推移している。
○　なたねの直近の動きとして、中東情勢の影響による原油価格相場の高騰等から上昇している。10月の月央値は89.3千円/トンとなり、前月の月央値を下回ったが、依然として高い水準で推移している。
○　コーヒーについては、2025年11月以降、供給見通しの改善を背景に下落傾向で推移している。2026年８月は、スーパーエルニーニョ発生への懸念から下げ幅が抑えられる場面もあったものの、ブラジルの記録的な豊作による供給増加を背景に下落。





□内は2024年1月以降の最高値。

パーム油
173.2千円/トン
184.3千円/トン
（2026.3）

なたね
89.3千円/トン
94.0千円/トン
（2026.8）

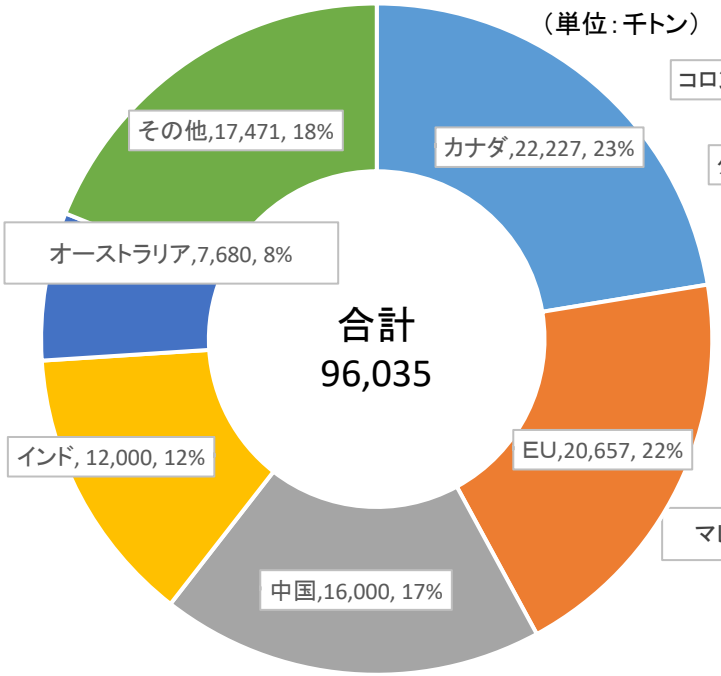
コーヒー
895.6千円/トン
1188.8千円/トン
（2025.2）

※　なたねの国際価格についてはカナダウィニペグなたね市場の先物価格（期近物）の月央値を、パーム油の国際価格についてはマレーシアパーム油市場の先物価格（期近物）の月央値を使用し、為替レートから円に換算して算出。コーヒーの国際価格については国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均を用い、為替レートから円に換算して算出。

資料４－２　加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の生産量及び輸入先

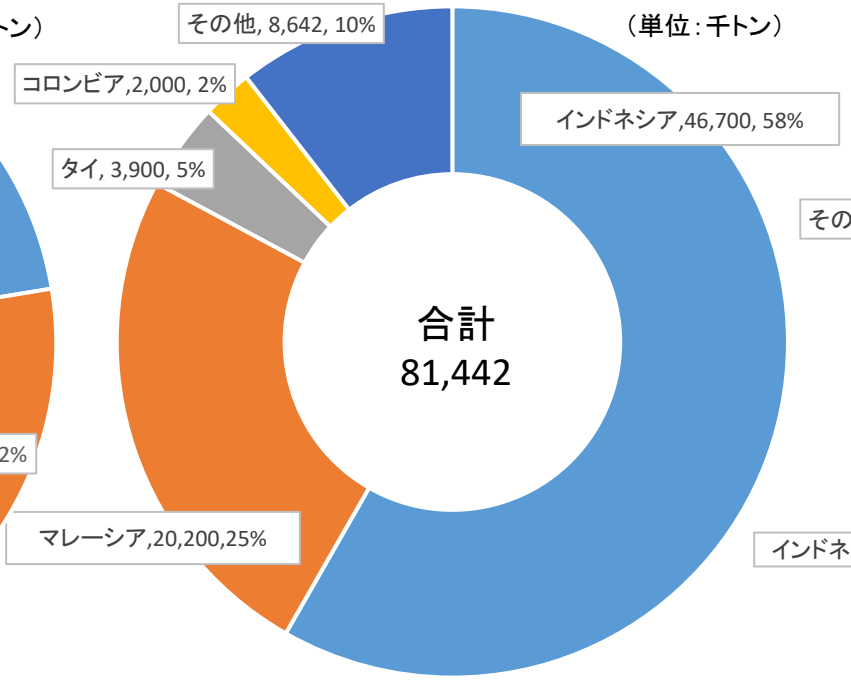
○主要生産国の生産状況

なたね生産量（2025/26）



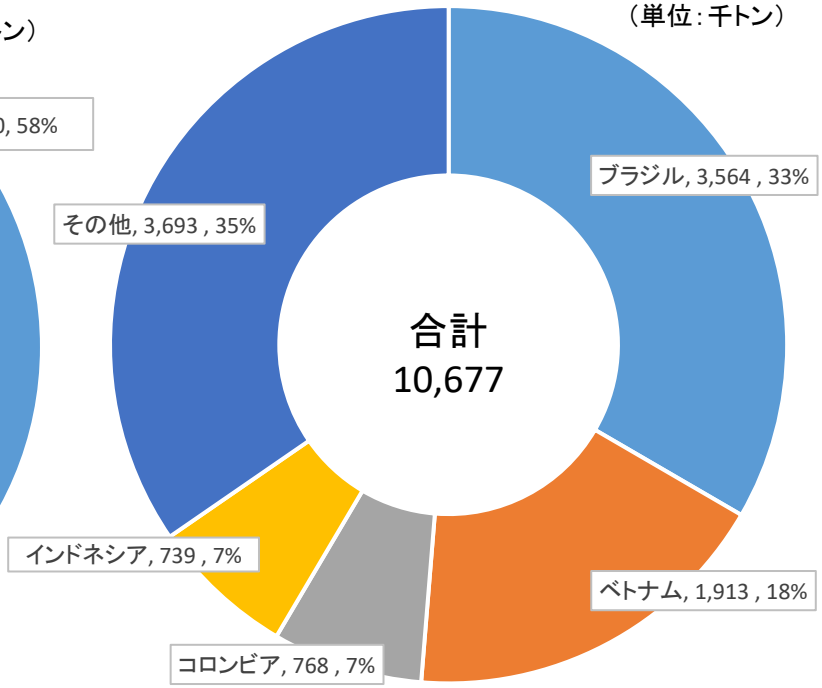
※米国農務省（PS＆D）
2026年10月時点

パーム油生産量（2025/26）



※米国農務省（PS＆D）
2026年10月時点

コーヒー生産量（2025/26）



※国際コーヒー機関（ICO）統計資料
2026年９月時点

○我が国の主な輸入先の状況（単位：千トン（2025年））

なたね	輸入量	割合
カナダ	1,722	80.1%
オーストラリア	429	19.9%
その他	0	0.0%
合計	2,151	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1205）

パーム油	輸入量	割合
マレーシア	568	87.6%
インドネシア	79	12.2%
その他	1	0.2%
合計	648	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1511）

コーヒー	輸入量	割合
ブラジル	147	40.9%
ベトナム	90	25.1%
コロンビア	38	10.6%
その他	84	23.4%
合計	359	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：0901.11～0901.12）

資料４－３　加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移①

①なたね

単位（千円/トン）

	2024年												2025年												2026年											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
なたね	68.2	63.1	69.4	69.3	73.9	69.4	71.9	62.8	60.2	64.8	70.8	65.1	68.7	71.2	58.0	68.2	72.4	79.2	74.9	70.4	67.0	66.7	72.3	67.8	72,4	74.9	84.7	81.7	85.2	86.2	91.5	94.0	92.4	89.3		
前月比	99.5	92.5	109.9	99.9	106.6	93.8	103.7	87.3	126.1	107.7	109.3	91.9	105.7	103.7	81.4	117.6	106.3	109.4	94.6	93.9	95.2	99.6	108.4	93.7	106.8	103.5	113.0	96.4	104.4	101.1	106.2	102.7	98.3	96.6		
前年同月比	84.6	76.6	95.4	90.8	100.1	91.4	83.5	73.5	812.1	81.5	89.0	94.9	100.7	112.9	83.5	98.3	98.0	114.2	104.2	112.1	111.4	103.0	102.1	104.3	105.4	105.2	146.1	119.8	117.6	108.7	122.1	133.5	137.8	133.8		

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ
注1　カナダウィニペグなたね定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

②パーム油

単位（千円/トン）

	2024年												2025年												2026年											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
パーム油	118.7	123.7	137.2	137.4	128.7	132.2	134.4	128.3	126.1	150.1	178.8	169.4	158.4	161.8	157.8	140.9	131.7	139.2	142.5	154.8	154.5	159.0	154.2	151.8	155.1	155.9	184.3	178.1	176.3	174.8	180.6	178.4	180.0	173.2		
前月比	106.4	104.2	110.9	100.2	93.7	102.7	101.7	95.4	98.2	119.1	119.1	94.7	93.5	102.2	97.6	89.2	93.5	105.7	102.3	108.7	99.8	102.9	97.0	98.4	102.1	100.5	118.2	96.7	98.9	99.2	103.3	98.8	100.9	96.2		
前年同月比	104.4	103.2	113.7	122.6	112.2	124.1	114.0	107.1	109.5	127.3	141.8	151.8	133.4	130.8	115.0	102.5	102.3	105.3	106.0	120.7	122.6	106.0	86.2	89.6	97.9	96.4	116.7	126.5	133.8	125.6	126.8	115.2	116.5	108.9		

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ
注1　マレーシアパーム油定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

資料４－４　加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移②

③コーヒー

単位（千円/トン）

	2024年												2025年												2026年											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
コーヒー	566.3	601.1	611.7	737.0	710.8	786.3	825.0	785.5	812.1	823.4	920.3	1017.3	1068.8	1188.8	1138.7	1057.4	1072.9	940.6	850.2	963.0	1050.9	1085.8	1129.9	1041.6	1037.4	900.1	958.9	932.2	895.4	878.9	1026.2	1008.0	895.6			
前月比	102.9	106.2	101.8	120.5	96.5	110.6	104.9	95.2	103.4	101.4	111.8	110.5	105.1	111.2	95.8	92.9	101.5	87.7	90.4	113.3	109.1	103.3	104.1	92.2	99.6	86.8	106.5	97.2	96.1	98.2	116.8	98.2	88.8			
前年同月比	127.4	116.4	122.4	140.1	135.1	148.6	169.9	157.7	163.3	164.6	170.9	184.9	188.8	197.8	186.2	143.5	150.9	119.6	103.1	122.6	129.4	131.9	122.8	102.4	97.1	75.7	84.2	88.2	83.5	93.4	120.7	104.7	85.2			

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ
注1　国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均から算出
　2　ICO複合指標価格は、米国、ドイツ、フランスの3大市場の現物の成約価格を収集しICOの定める方法で4品種ごとの加重平均値を算出したもの。

資料5　食品小売価格の動向

○　令和8年9月の国内の主な加工食品の消費者物価指数は101.5～117.2（前年同月比は 0.8%～19.0%）の範囲内。

消費者物価指数（総務省）

	R5 (2023)	R6 (2024)	R7 (2025)	直近6か月						
品目	年平均	年平均	年平均	R8 4月	5月	6月	7月	8月	9月	上昇率（前年同月比）
食パン	93.6	96.2	100.0	99.1	99.0	99.2	103.1	104.3	104.7	4.8%
即席めん	100.2	102.5	100.0	102.5	103.4	103.4	103.5	103.5	101.5	1.7%
豆腐	94.4	97.4	100.0	101.6	101.7	102.5	106.5	107.5	107.6	7.3%
食用油（キャノーラ油）	107.4	99.5	100.0	104.7	105.0	107.0	112.4	111.1	117.2	19.0%
みそ	90.5	95.1	100.0	109.1	108.3	108.5	109.4	109.4	109.5	10.2%
マヨネーズ	96.0	98.3	100.0	104.0	104.5	104.3	104.1	104.3	104.7	2.7%
チーズ	94.2	95.6	100.0	105.7	98.6	102.8	102.4	105.2	104.6	0.8%
バター	83.2	91.8	100.0	106.7	107.5	107.9	107.3	105.8	109.4	3.1%
生鮮食品を除く食料	90.0	93.4	100.0	102.7	102.9	103.2	103.6	103.5	103.9	2.9%

資料：総務省「消費者物価指数」
注：令和7年の平均値を100とした指数で表記。

【参考】食品価格動向調査（農林水産省）

	R5 (2023)	R6 (2024)	R7 (2025)	直近7か月								
品目	年平均	年平均	年平均	R8 4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	上昇率（前月比）	上昇率（前年同月比）
食パン	92.2	94.8	100.0	99.6	100.6	99.1	102.9	104.8	105.2	104.1	−1.0%	4.5%
即席めん	100.5	101.6	100.0	104.5	105.5	105.5	106.6	105.0	104.0	103.4	−0.6%	2.6%
豆腐	94.8	97.6	100.0	101.5	101.2	101.9	106.6	108.4	108.8	109.2	0.4%	8.3%
食用油（キャノーラ油）	112.2	102.7	100.0	103.1	101.7	103.5	107.3	109.5	111.5	112.9	1.3%	11.5%
みそ	92.1	95.3	100.0	111.5	111.1	111.9	112.0	112.9	114.0	113.9	−0.1%	5.8%
マヨネーズ	98.1	99.0	100.0	105.9	106.6	105.9	106.6	106.4	106.6	105.9	−0.7%	1.1%
チーズ	94.6	94.9	100.0	105.1	98.5	102.5	104.0	104.4	104.8	104.4	−0.4%	0.8%
バター	82.2	90.7	100.0	106.1	106.4	106.2	105.9	105.2	108.6	109.1	0.5%	2.5%

資料：農林水産省「食品価格動向調査」
注1：令和7年の平均値を100とした指数で表記。
注2：調査は原則、各都道府県10店舗で実施。

資料６　海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

〇独立行政法人農畜産業振興機構（ALIC）は毎月25日頃に海外の畜産物の需給動向を『月報 畜産の情報』（https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_000168.html）で公表
〇2026年11月号（10月26日に公表）の各品目の主な動きは以下の通り

◆牛肉
(米国)26年8月の牛肉卸売価格は前年同月をやや下回る
(豪州)豪州牛肉輸出は高水準も、乾燥や米国の新たな措置が下振れリスクに
(ウルグアイ)26年の牛肉輸出量はと畜頭数減に伴い減少

◆豚肉
(メキシコ)26年の豚肉生産量は堅調に推移、27年も増加見込み
(EU)6月の豚と畜頭数は前年同月からかなりの程度増加

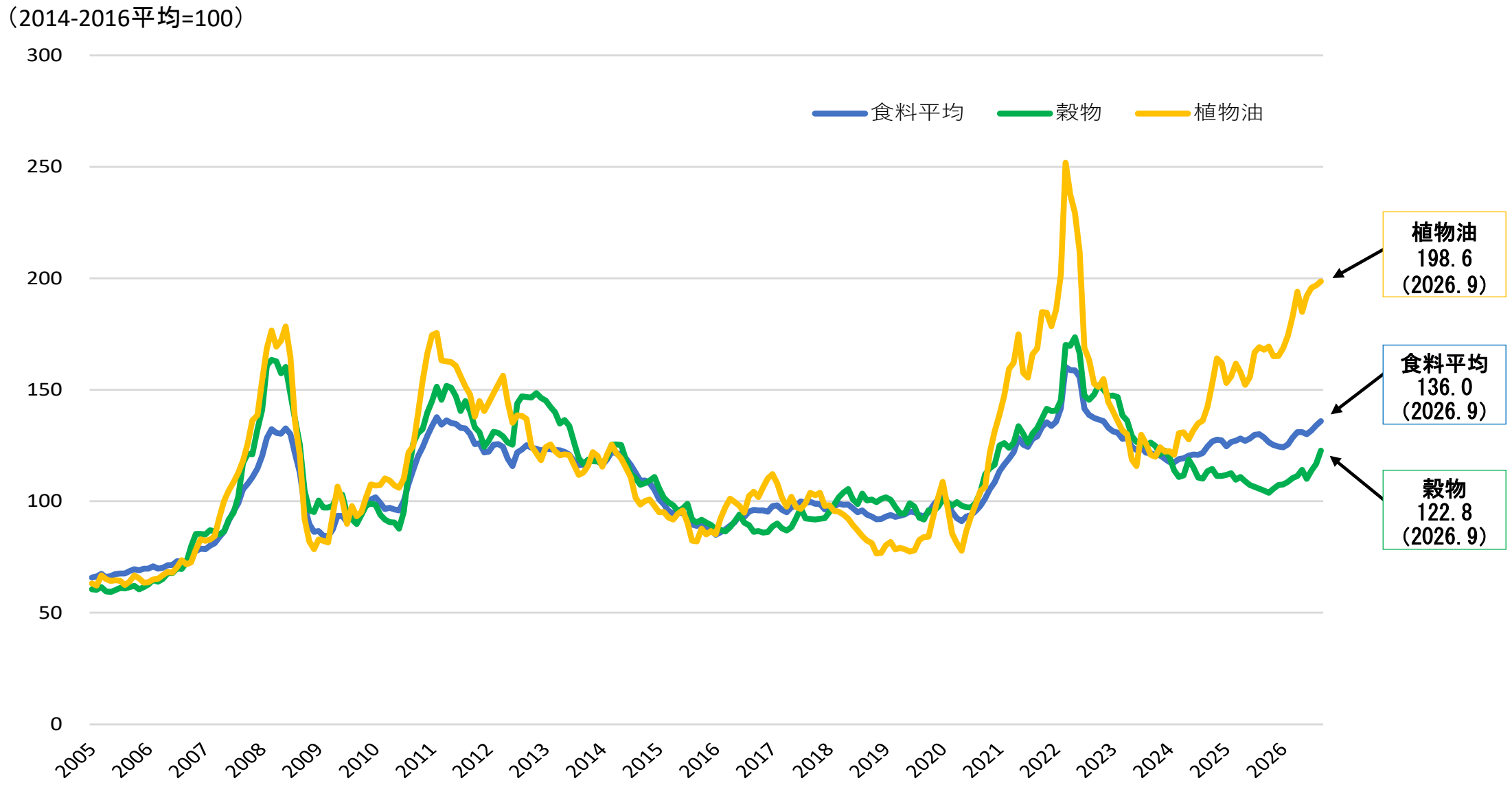
◆鶏肉
(タイ)26年1～7月の鶏肉生産量は前年同期並み、中国向け不振で鶏肉輸出量は減少

◆牛乳・乳製品
(米国)26年8月の生乳生産量は増加、同月のバター・チーズ卸売価格は下落基調で推移
(EU)26年8月の生乳取引価格、乳製品価格はいずれも堅調に推移
(NZ)26/27年度の生産者支払乳価は引き上げへ
(中国)生乳価格はわずかに上昇、主要乳製品輸入量は6品目で減少

◆飼料穀物
(世界・トウモロコシ)26/27年度の期末在庫は、前月から引き続き下方修正
(世界・大豆)大豆消費量の上方修正などから期末在庫は下方修正
(米国)米国は生産量の減少などから、期末在庫は前年度に比べ大幅に減少
(ブラジル)25/26年度のトウモロコシおよび大豆生産量は過去最大の見込み
(中国)トウモロコシおよび大豆の価格動向

資料７　FAO食料価格指数

○FAO（国連食糧農業機関）が公表した９月の食料価格指数は、肉類及び乳製品の価格指数が下落したものの、穀物、植物油、砂糖の価格指数が上昇したことにより、８月の134.0から1.5%（2.0ポイント）上昇し136.0。



資料：FAO「Food Price Index」（2026.9）より作成
注：穀物はとうもろこし、小麦、コメ等、植物油は大豆油、菜種油、ひまわり油、パーム油等

【今月のコラム】

ロシア／ウクライナ農業に見る静かな変容――養蜂編

農林水産政策研究所　後藤正憲

前回に引き続き、当コラムではロシアとウクライナの農業の中でも、普段はあまり注目されることの少ないマイナーな話題を取り上げて紹介します。今回は養蜂に焦点を当ててみたいと思います。

両国では昔から養蜂が盛んに行われてきました。特にウクライナは、現在では世界有数のハチミツ輸出国となっています。2014 年に EU との連合協定が締結され、2016 年に深く包括的な自由貿易協定が暫定適用されたことなどを契機に、輸出が急速に拡大しました。輸出先の大半は EU 諸国で、ウクライナから輸出される農産物の中でも、ハチミツは主要な品目の一つとなっています。

ハチミツはもともと農産物の中でも異質の存在で、植物性とも動物性とも区別しがたいものですが、それ以外にも、ウクライナから輸出される農産物の中ではユニークな特徴を持っています。一般的にウクライナやロシアの農業では、アグロホールディングと呼ばれる産業型の農業企業が発達しており、特に農産物の輸出に関しては、大型の企業が大半を担っています。しかしハチミツに関しては、圧倒的に養蜂家が個人で営んでいることが多く、ほとんどの養蜂が副業や家族経営として行われています。多くの人にとって養蜂は、生業というよりむしろ趣味で、ミツバチをまるでペットのように飼っているとも言われます。養蜂を始めるのに大きな投資は必要なく、高度な専門知識や技術を必要とするものでもありません。廃棄物もほとんど出ず、大きな労力も要しません。軌道に乗れば一定の収穫があり、現金化もしやすいとあって、趣味を兼ねて年金の足しにする人もあれば、手広く多くの群れを飼育して営んでいる人もいます。

このように、ウクライナやロシアで今も養蜂が愛されている背景には、いったい何があるのでしょうか。そのことを探るために、両国の歴史を駆け足でたどってみましょう。

時代は紀元前5世紀頃にさかのぼります。黒海の北側から東側にかけて、現在のウクライナと南ロシアに当たる地域で暮らしていたスキタイ人は、ミツバチの巣からとれるハチミツや蜜蝋(ワックス)を利用し、古代ギリシアとの交易品としても広く用いていました。このことは、ヘロドトスの記録に残されています。その後、この地域ではスラヴ系やテュルク系、モンゴル系の国々が興亡を繰り返しますが、いずれにおいてもハチミツと蜜蝋は、貴重な財として扱われました。ステップや森で捕獲される獣の毛皮とともに、ハチミツと蜜蝋は野生の産物として重宝されたのです。統治者は住民たちに、毛皮とならんでハチミツや蜜蝋を貢税として納めさせ、集めた財を外部世界との交易に用いました。

ミツバチの巣からとれる産物に、どうしてそこまで価値が置かれていたかというと、当時はその必要性の度合いが、今よりずっと高かったからです。まずハチミツは、ただ甘味料としてだけでなく、お酒の原料として利用されていました。ハチミツ酒(ミード)は、ウォッカのような蒸留酒が普及する

以前には、饗宴には欠かせない飲み物でした。蜜蝋の方はというと、これはミツバチの巣を精製して取り出されるものですが、非鉄金属の加工(ロストワックス)に使われました。繊細な細工の装飾品などの鋳造では、その鋳型を作るのに蜜蝋が利用されたのです。さらに、灯りをともす蝋燭の材料としても蜜蝋が利用されていました。正教会の教会では、今でも蜜蝋から作った蝋燭が使われています。こうして見ると、数々の文明の一端は、まさにミツバチの恩恵にあずかっていたと言っても過言ではありません。

このように、ミツバチの巣からとれる産物は、現在よりもずっと価値の高いものでしたが、当初は野生のミツバチの巣から採集する方法に限られていました。ミツバチは森の中の木の洞に巣を作ることが多いため、人々は立木の幹をくりぬいて、人工的に作った洞にミツバチを誘って巣を作らせ、ハチミツや蜜蝋を集めていました。そうして作られた木の洞は、大きな富の源泉となったため、富裕な権力者の相続財産リストの一つに挙げられるほどでした。やがて、単に利便性の問題から、森の中ではなく住居のそばに中身をくりぬいた丸太が置かれるようになります。こうして、養蜂らしい姿が生まれていきました。その後、丸太は木箱に置き換わり、19 世紀にはフレーム式の養蜂箱が考案され、普及していきます。

ソ連時代に入っても、養蜂は盛んに行われました。ソ連国内のミツバチは 1,000 万群を数え、人口一人当たりの蜂群としては世界で最も多いほどでした。集団農場(コルホーズ)や国営農場(ソフホーズ)では、全国の半数を超える農場で独自の養蜂施設を構え、主に作物の受粉促進を目的として養蜂が行われていました。しかし、国内で行われる養蜂の大半は、農場で働く人たちそれぞれの自宅で行われていたようです。ソ連崩壊後は、各家庭で行われる割合がさらに増して、ほぼ全体を占めるまでになりました。養蜂は産業的な大量生産になじまず、細く広く、人々のプライベートな領域に浸透していったのです。

冒頭で述べたように、近年ウクライナでは、ハチミツの輸出が拡大しています。それと同時に、新しい問題も生まれてきました。これまで主にプライベートな領域で得られるハチミツは、個人間の交渉や仲買人を通した非公式なルートで取引されることが多かったのですが、EU などの市場では産地からのトレーサビリティに基づいて、品質や安全性を示す情報提示が求められます。生産者も商品を扱う輸出業者も、行政による管理のもとに登録を行って、定期的に衛生検査を受けなければなりません。そうした基準を満たすために、個々の養蜂家が協同組合を組織して、問題に対処しようとする動きが見られます。

もう一つの問題は、ミツバチが群れごと消失する「蜂群崩壊症候群(CCD)」と呼ばれる事態が生じていることです。ミツバチの消失は、昨今では世界的な現象として問題になっていますが、その決定的な原因はまだ特定されていません。死骸も残さず、巣箱を飛び立ったミツバチが突然姿を消すこともあることから、ウイルス性の病気やダニの影響によって、ミツバチが方向感覚を失っていることも疑われています。しかし、最も蓋然性の高い原因として、農薬の影響が考えられます。近年ウクライナやロシアでは、油糧作物の菜種の作付面積が拡大しており、農薬の散布をめぐって、隣接する養蜂家とトラブルになるケースが増えています。長い年月を通じて脈々と培われてきた養蜂を、今後いかに継続していくかが、両国の農業では問われています。

（品目別需給編）

Ⅰ　穀物

１　小麦

（1）国際的な小麦需給の概要（詳細は右表を参照）

＜USDA の見通し＞　　2026/27 年度

生産量　　**前年度比** ⇩　**前月比** ⇩

・カナダ、トルコ等で上方修正されたものの、EU等で下方修正され、前月から下方修正された。

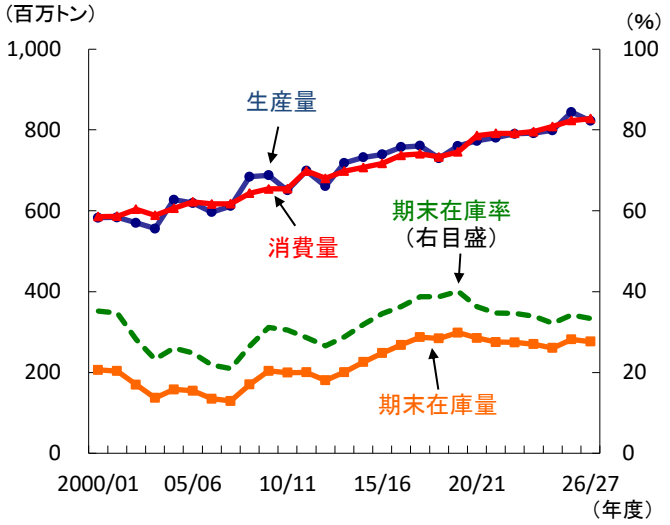
消費量　　**前年度比** ⇧　**前月比** ⇧

・バングラデシュ等で下方修正されたものの、中国、EU等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

輸出量　　**前年度比** ⇩　**前月比** ⇩

・カナダ、アルゼンチン等で上方修正されたものの、ロシア等で下方修正され、前月から下方修正された。

期末在庫量　　**前年度比** ⇩　**前月比** ⇩



資料:USDA「PS&D」(2026.10.9)をもとに農林水産省にて作成

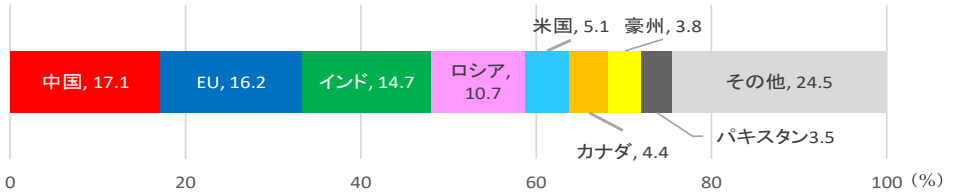
◎世界の小麦需給

（単位：百万トン）

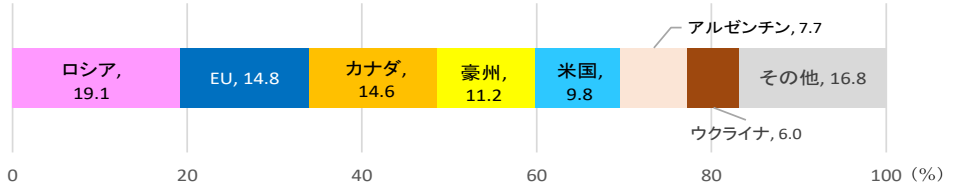
年　度	2024/25	2025/26（見込み）	2026/27 予測値	2026/27 前月予測からの変更	2026/27 対前年度増減率(%)
生　産　量	799.1	844.1	822.4	▲ 0.04	▲ 2.6
消　費　量	808.4	822.9	827.9	1.2	0.6
うち飼料用	157.3	168.7	166.9	2.2	▲ 1.0
輸　出　量	210.9	226.9	209.0	▲ 2.8	▲ 7.9
輸　入　量	201.8	221.6	204.8	▲ 2.7	▲ 7.6
期末在庫量	260.4	281.6	276.0	▲ 0.3	▲ 2.0
期末在庫率	32.2%	34.2%	33.3%	▲ 0.1	▲ 0.9

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(9 October 2026)

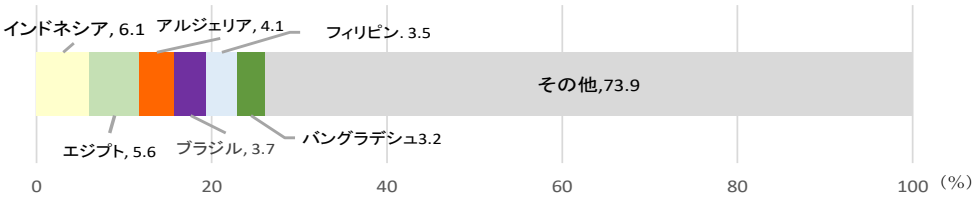
○　2026/27年度　世界の小麦の生産量(822.4百万トン)



○　2026/27年度　世界の小麦の輸出量(209.0百万トン)



○　2026/27年度　世界の小麦の輸入量(204.8百万トン)



（2）国別の小麦の需給動向

＜ 米国 ＞ 2026/27 年度の生産量は前年度から 22.9%減少する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2026/27 年度の生産量は、単収の引上げを受け前月予測から 0.1 百万トン上方修正されたものの、収穫面積及び単収が大きく減少することから前年度から 22.9%減、過去5年平均（49.4 百万トン）から 15.4%減の 41.7 百万トンとなり 1970/71 年度（36.8 百万トン）以来の低水準となる見込み。同「Wheat Outlook」（2026.8.14）によれば、2026/27 年度の生産量の減少は、長期的な作付面積の減少とグレートプレーンズ諸州の干ばつによる Hard Red Winter（HRW）の生産減が主な要因であり、他の全ての銘柄も前年度から減少が見込まれている。同「Wheat Outlook」（2026.10.14）によれば、2026/27 年度の銘柄別の生産量は、HRW は前年度から 42.2%減の 12.7 百万トンと 1957/58 年度（11.7 百万トン）以来の低水準、Hard Red Spring（HRS）は同 9.4%減の 11.3 百万トン、Soft Red Winter は同 16.8%減の 8.0 百万トン、White 小麦は同 2.9%増の 8.0 百万トン、Durum（デュラム小麦）は同 24.4%減の 1.8 百万トンとなる見込み（**図**）。

同「Crop Progress」（2026.10.13）によれば、10 月 11 日現在、2027/28 年度の冬小麦の作付進捗率は 51%と過去5年平均 58%を下回っている。同「Wheat Outlook」（2026.10.14）によれば、2027/28 年度の冬小麦の作付けは、HRW は、干ばつによりカンザス州、オクラホマ州等で平年に比べ遅れている。一方、モンタナ州は平年並みに進んでいる。SRW は、主要生産州のオハイオ州で湿潤な天候や大豆の収穫遅れにより平年に比べ大幅に遅れている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2026/27 年度の輸出量は、HRW 及び HRS の出荷・販売量の減少を受け前月予測から 0.7 百万トン下方修正され、前年度から 17.4%減、過去5年平均（21.8 百万トン）から 6.2%減の 20.4 百万トンとなる見込み。同「Wheat Outlook」（2026.10.14）によれば、2026/27 年度の輸出量は、1971/72 年度（16.3 百万トン）以降では 2023/24 年度（19.2 百万トン）に次ぐ低水準となる見込み。特に HRW の輸出の伸び悩みは顕著で収穫面積の減少と干ばつの影響により供給が逼迫し、カナダ、豪州、アルゼンチン等の競合国と比べ競争力を欠き、過去2番目に少ない輸出となる見込み。HRS の輸出量も4年ぶりの低水準となる見込み。

同「Global Agricultural Trade System」よれば、2026/27 年度のうち 2026 年6～8月の輸出量は、前年同期（671.8 万トン）に比べ 22.9%減の 517.7 万トン。輸出先国別には、メキシコ 106.9 万トン（20.6%）、フィリピン 72.0 万トン（13.9%）、日本 58.6 万トン（11.3%）の順となっている（**表**）。USDA によれば、2026/27 年度の期末在庫量は、輸出量の引下げ等を受け前月予測から 0.6 百万トン上方修正されたものの、前年度から 19.6%減の 20.1 百万トンとなる見込み。

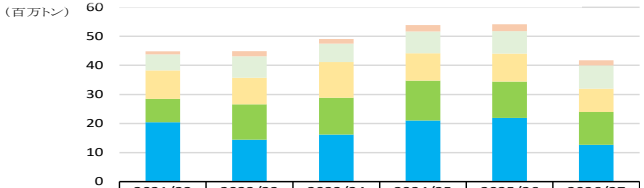
小麦－米国（冬小麦が全体の7割、春小麦は3割）

（単位：百万トン）

年度	2024/25	2025/26（見込み）	2026/27（26年6月～27年5月） 予測値	前月予測からの変更	対前年度増減率（%）
生産量	53.9	54.1	41.7	0.1	▲ 22.9
消費量	31.1	31.1	30.2	0.3	▲ 2.8
うち飼料用	3.0	3.4	2.5	0.3	▲ 27.5
輸出量	22.6	24.7	20.4	▲ 0.7	▲ 17.4
輸入量	4.1	3.4	4.0	0.1	16.2
期末在庫量	23.3	25.0	20.1	0.6	▲ 19.6
期末在庫率	43.4%	44.9%	39.8%	1.6	▲ 5.1
（参考）					
収穫面積（百万ha）	15.63	15.11	12.91	▲ 0.06	▲ 14.6
単収（t/ha）	3.44	3.58	3.23	0.02	▲ 9.8

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、「World Agricultural Production」(9 October 2026)

図 米国の銘柄別生産量の推移



	2021/22	2022/23	2023/24	2024/25	2025/26	2026/27
Durum	1.0	1.7	1.6	2.2	2.3	1.8
White	5.5	7.4	6.4	7.5	7.7	8.0
Soft Red Winter	9.8	9.1	12.2	9.4	9.6	8.0
Hard Red Spring	8.1	12.2	12.7	13.7	12.5	11.3
Hard Red Winter	20.4	14.5	16.2	21.0	21.9	12.7

資料：USDA「Wheat Data」(2026.10.14)をもとに農林水産省で作成

表 米国の小麦の輸出先国と輸出量

2025/26年度（2025年6月～2026年5月） 国名	輸出量（万トン）	シェア（%）	2025/26年度（2025年6～8月） 国名	輸出量（万トン）	シェア（%）	2026/27年度（2026年6～8月） 国名	輸出量（万トン）	シェア（%）
メキシコ	441.0	18.2	メキシコ	109.3	16.3	メキシコ	106.9	20.6
フィリピン	254.3	10.5	フィリピン	70.3	10.5	フィリピン	72.0	13.9
日本	210.1	8.7	ナイジェリア	57.0	8.5	日本	58.6	11.3
韓国	187.5	7.8	日本	48.3	7.2	韓国	48.0	9.3
ナイジェリア	165.2	6.8	韓国	43.0	6.4	台湾	33.8	6.5
その他	1,159.3	48.0	その他	343.9	51.2	その他	198.4	38.3
計	2,417.5	100.0	計	671.8	100.0	計	517.7	100.0

資料：USDA「Global Agricultural Trade System」をもとに農林水産省で作成

＜ カナダ ＞ 2026/27 年度の生産量は前年度から 10.9%減少する見込み（AAFC）

【生育・生産状況】カナダ農務農産食品省（AAFC）「Outlook for Principal Field Crops」（2026.9.25）によれば、2026/27 年度の生産量は、収穫面積の引下げを受け8月予測から 0.1 百万トン下方修正され、史上最高の前年度から 10.9%減となるものの、過去5年平均（33.4 百万トン）から 8.0%増の 36.1 百万トンとなる見込み。種類別には、普通小麦は、8月予測から 0.3 百万トン下方修正され、史上最高の前年度（33.3 百万トン）から 10.7%減となるものの、過去5年平均（28.1 百万トン）から 5.7%増の 29.7 百万トンとなる見込み。普通小麦のうち春小麦は前年度から 10.9%減の 26.5 百万トン、冬小麦は同 9.3%減の 3.3 百万トンとなる見込み。デュラム小麦は、8月予測から 0.1 百万トン上方修正され、前年度（7.3 百万トン）から 12.2%減となるものの、過去5年平均（5.4 百万トン）から 19.9%増の 6.4 百万トンとなる見込み（**図**）。

普通小麦の収穫は、カナダ東部ではほぼ終了している一方、プレーリー地方の一部、特にサスカチュワン州とアルバータ州で降雨により遅れている。AAFC9月レポート作成時点で、春小麦の収穫進捗率は、サスカチュワン州 17%、アルバータ州 14%に対し、マニトバ州は約 70%が収穫済み。

デュラム小麦の収穫は、広範囲にわたる降雨の影響で平年より遅れている。9月第1週時点、サスカチュワン州の収穫進捗率は、前年同期 65%を下回る 46%で、1等の格付けは 23%と過去 10 年平均を下回っている。アルバータ州の収穫進捗率は、前年同期 57%を下回る 39%であるものの、品質は良好で 72%が1等に格付けされている。

【貿易情報・その他】AAFC によれば、2026/27 年度の輸出量は、8月予測から 0.1 百万トン上方修正されたものの、前年度から 4.1%減の 28.5 百万トンとなる見込み。種類別には、普通小麦は8月予測からの変更はなく、前年度から 1.7%減の 23.5 百万トン。デュラム小麦は8月予測から 0.1 百万トン上方修正されたものの、前年度から 13.6%減の 5.1 百万トン。

カナダ穀物委員会（CGC）によれば、2026/27 年度のうち 2026 年8月の輸出量は、前年同月（146.0 万トン）に比べ 73.5%増の 253.3 万トン。種類別には、普通小麦は前年同月（132.5 万トン）に比べ 63.6%増の 216.8 万トンで、輸出先国別には、日本 22.4 万トン（10.3%）、バングラデシュ 18.5 万トン（8.5%）、中国 18.3 万トン（8.4%）の順。デュラム小麦は前年同月（13.5 万トン）に比べ 170.5%増の 36.5 万トンで、輸出先国別には、モロッコ 17.3 万トン（47.4%）、イタリア 10.8 万トン（29.6%）、ベネズエラ 3.3 万トン（9.0%）の順（**表**）。

AAFC によれば、2026/27 年度の期末在庫量は、期首在庫量の引上げを受け8月予測から 0.3 百万トン上方修正されたものの、前年度から 12.8%減の 5.8 百万トンとなる見込み。

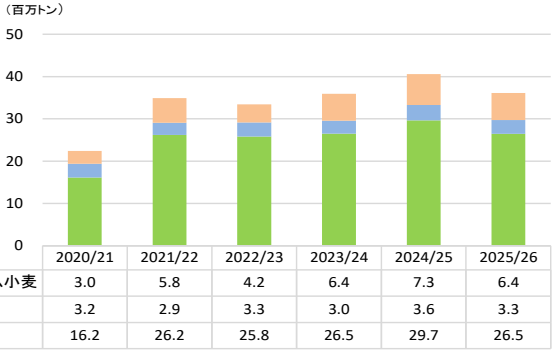
小麦－カナダ（春小麦を主に栽培）

（単位：百万トン）

年度	2024/25	2025/26（見込み）		2026/27（26年8月～27年7月） 予測値		前月予測からの変更		対前年度増減率（%）	
生産量	35.9	40.6	(40.6)	36.5	(36.1)	0.5	(▲0.1)	▲10.0	(▲10.9)
消費量	8.3	9.0	(8.6)	8.6	(8.6)	-	(0.2)	▲4.8	(▲0.5)
うち飼料用	3.1	3.6	(3.8)	3.2	(4.1)	-	(0.2)	▲11.8	(6.7)
輸出量	29.4	29.8	(29.7)	30.5	(28.5)	0.5	(0.1)	2.4	(▲4.1)
輸入量	0.6	0.6	(0.2)	0.7	(0.1)	-	(-)	4.8	(▲39.7)
期末在庫量	4.2	6.7	(6.7)	4.8	(5.8)	-	(0.3)	▲28.6	(▲12.8)
期末在庫率	11.3%	17.2%	(17.4%)	12.2%	(15.6%)	▲0.2	(0.7)	▲5.0	(▲1.7)
（参考）									
収穫面積（百万ha）	10.65	10.62	(10.62)	10.10	(10.02)	-	(▲0.09)	▲4.9	(▲5.6)
単収（t/ha）	3.37	3.82	(3.82)	3.61	(3.60)	0.05	(0.11)	▲5.5	(▲5.8)

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、「World Agricultural Production」(9 October 2026)
AAFC「Outlook For Principal Field Crops」(25 September 2026) ※（ ）書き。

図 カナダの小麦の種類別生産量の推移



資料：AAFC「Outlook for Principal Field Crops」(2026.9.25)をもとに農林水産省で作成

表 カナダの小麦の輸出先国と輸出量

	2025/26年度（2025年8月～2026年7月） 国名	輸出量（万トン）	シェア（%）	2025/26年度（2025年8月） 国名	輸出量（万トン）	シェア（%）	2026/27年度（2026年8月） 国名	輸出量（万トン）	シェア（%）
普通小麦	インドネシア	265.4	11.5	スペイン	16.7	12.6	日本	22.4	10.3
	中国	256.3	11.1	日本	14.6	11.0	バングラデシュ	18.5	8.5
	日本	206.3	9.0	インドネシア	13.8	10.4	中国	18.3	8.4
	バングラデシュ	168.5	7.3	米国	13.3	10.0	ペルー	17.7	8.2
	ペルー	128.0	5.6	エクアドル	12.0	9.0	米国	17.4	8.0
	その他	1,280.8	55.6	その他	62.2	47.0	その他	122.5	56.5
	小計	2,305.3	100.0	小計	132.5	100.0	小計	216.8	100.0
デュラム小麦	アルジェリア	160.9	28.9	イタリア	5.2	38.6	モロッコ	17.3	47.4
	モロッコ	106.5	19.2	日本	3.4	25.4	イタリア	10.8	29.6
	イタリア	99.5	17.9	アラブ首長国連邦	2.3	17.4	ベネズエラ	3.3	9.0
	米国	31.7	5.7	ナイジェリア	1.2	9.0	スペイン	2.2	6.1
	日本	23.3	4.2	グアテマラ	1.0	7.3	日本	1.9	5.1
	その他	134.4	24.2	その他	0.3	2.3	その他	1.0	2.7
	小計	556.3	100.0	小計	13.5	100.0	小計	36.5	100.0
	小麦計	2,861.6		小麦計	146.0		小麦計	253.3	

資料：CGC のデータをもとに農林水産省で作成

＜ 豪州 ＞ 2026/27 年度の輸出量は前年度から 6.7%減少する見込み（ABARES）

【生育・生産状況】豪州農業資源経済科学局（ABARES）「Australian Crop Report」（2026.9.1）によれば、2026/27 年度の生産量は、南部の作付地域の大部分で適時の降雨に恵まれ作柄が改善し、収穫面積及び単収が引上げられたことを受け前回（6月）予測から 3.1 百万トン上方修正されたものの、史上3番目の生産量となった前年度から 17.0%減、過去5年平均（34.6 百万トン）から 13.6%減の 29.9 百万トンとなる見込み（**図**）。

州別の生産量は、ウエスタンオーストラリア州（WA）は前年度から 25.4%減の 10.0 百万トン、ニューサウスウェールズ州（NSW）は同 31.3%減の 7.7 百万トン、クイーンズランド州（QLD）は同 47.6%減の 1.2 百万トンとなる一方、サウスオーストラリア州（SA）は同 26.6%増の 6.0 百万トン、ビクトリア州（VIC）は同 15.2%増の 4.9 百万トン。WA 州、SA 州、VIC 州及び NSW 州南部のほとんどの冬作物は、理想的な時期に平年を上回る土壌水分条件の下で作付けが行われた。SA 州及び VIC 州では、5月から7月にかけ平年を上回る降雨量と、穏やかな気温により平年を大幅に上回る単収となる見込み。WA 州及び NSW 州南部・中部では概ね良好な状況が続いている。しかし、WA 州では、7月の降雨量が平年を下回り、作物にストレスを与えていることから現在の単収見通しを実現するには8、9月の降雨が極めて重要となる。NSW 州北部及び QLD 州の大部分では、5月に平年を上回る降雨があったものの、その後の降雨が限られたことから単収は平年を下回る見込み。

西豪州穀物産業協会（GIWA）「Crop Report」（2026.10.16）によれば、WA 州の 2026/27 年度の小麦の生産量は、最近の穏やかな気温により収穫見通しが向上し、前月予測から 86 万トン上方修正され 1,089 万トンとなる見込み。

【貿易情報・その他】ABARES によれば、2026/27 年度の輸出量は、生産量の引上げ等を受け前回予測から 1.7 百万トン上方修正されたものの、前年度から 6.7%減、過去5年平均（25.0 百万トン）から 16.0%減の 21.0 百万トンとなる見込み（**図**）。

同「Trade dashboard」によれば、2025/26 年度のうち 2025 年 10 月～2026 年8月の輸出量は、前年同期（2,172.0 万トン）に比べ 4.0%減の 2,085.9 万トン。輸出先国別には、フィリピン 413.3 万トン（19.8%）、インドネシア 392.3 万トン（18.8%）、イエメン 173.5 万トン（8.3%）の順（**表**）。

ABARES によれば、2026/27 年度の期末在庫量は、生産量の引上げ等を受け前回予測から 2.8 百万トン上方修正されたものの、前年度から 13.2%減の 5.3 百万トンとなる見込み。

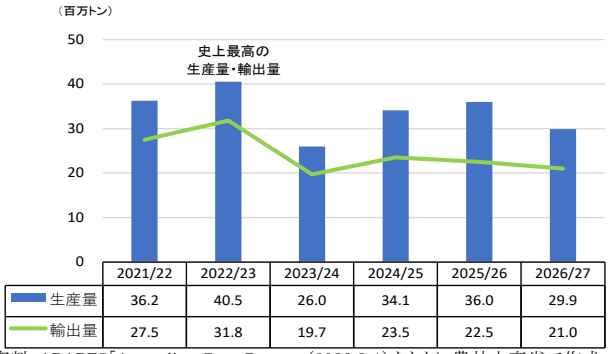
小麦－豪州（冬小麦を主に栽培）

（単位：百万トン）

年度	2024/25	2025/26（見込み）	2026/27（26年10月～27年9月） 予測値	前月（前回）予測からの変更	対前年度増減率（%）
生産量	34.1	36.0 (36.0)	31.0 (29.9)	- (3.1)	▲13.9 (▲17.0)
消費量	9.1	10.6 (10.5)	9.2 (9.7)	- (0.8)	▲13.7 (▲7.1)
うち飼料用	5.6	7.0 …	5.5 …	- …	▲21.4 …
輸出量	23.7	23.3 (22.5)	23.5 (21.0)	- (1.7)	1.1 (▲6.7)
輸入量	0.2	0.2 …	0.2 …	- …	4.3 …
期末在庫量	4.0	6.4 (6.1)	4.9 (5.3)	0.8 (2.8)	▲22.3 (▲13.2)
期末在庫率	12.2%	18.8% (18.4%)	15.1% (17.2%)	2.3 (8.4)	▲3.7 (▲1.3)
（参考）					
収穫面積（百万ha）	13.06	12.41 (12.41)	11.00 (11.05)	- (0.13)	▲11.4 (▲11.0)
単収（t/ha）	2.61	2.90 (2.90)	2.82 (2.70)	- (0.26)	▲2.8 (▲6.7)

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、「World Agricultural Production」（9 October 2026）
ABARES「Australian Crop Report」（1 September 2026）※（ ）書き。

図 豪州の小麦の生産量・輸出量の推移



	2021/22	2022/23	2023/24	2024/25	2025/26	2026/27
生産量	36.2	40.5	26.0	34.1	36.0	29.9
輸出量	27.5	31.8	19.7	23.5	22.5	21.0

資料：ABARES「Australian Crop Report」（2026.9.1）をもとに農林水産省で作成

表 豪州の小麦の輸出先国と輸出量

2024/25年度（2024年10月～2025年9月） 国名	輸出量（万トン）	シェア（%）	2024/25年度（2024年10月～2025年8月） 国名	輸出量（万トン）	シェア（%）	2025/26年度（2025年10月～2026年8月） 国名	輸出量（万トン）	シェア（%）
インドネシア	449.6	19.0	インドネシア	406.8	18.7	フィリピン	413.3	19.8
フィリピン	352.7	14.9	フィリピン	321.2	14.8	インドネシア	392.3	18.8
タイ	170.9	7.2	タイ	163.8	7.5	イエメン	173.5	8.3
ベトナム	157.4	6.7	韓国	140.9	6.5	タイ	121.9	5.8
韓国	146.5	6.2	ベトナム	140.8	6.5	ベトナム	111.6	5.4
その他	1,084.2	45.9	その他	998.5	46.0	その他	873.3	41.9
計	2,361.3	100.0	計	2,172.0	100.0	計	2,085.9	100.0

資料：ABARES「Trade dashboard」をもとに農林水産省で作成

＜ EU27 ＞ 2026/27 年度の生産量は前年度から 8.0%減少する見込み（EC）

【生育・生産状況】欧州委員会（EC）「EU Cereals Balance Sheets」（2026.9.29）によれば、2026/27 年度の生産量は、単収の引上げを受け前月予測から 0.3 百万トン上方修正されたものの、生育に好ましい気象条件により増産となった前年度から 8.0%減、過去5年平均（133.0 百万トン）から 0.8%減の 131.9 百万トンとなる見込み。種類別には、普通小麦は、前月予測からドイツ等で引下げられたものの、ルーマニア等の引上げを受けわずかに上方修正され、前年度から 8.2%減、過去5年平均（125.3 百万トン）から 0.8%減の 124.2 百万トンとなる見込み。デュラム小麦は、前月予測からイタリア等の引上げを受け 0.3 百万トン上方修正されたものの、前年度から 4.3%減、過去5年平均（7.7 百万トン）から 0.3%減の 7.7 百万トンとなる見込み（**図**）。

同「JRC MARS Bulletin – Crop monitoring in Europe」（2026.7.27）によれば、熱波により 2026/27 年度冬作物の登熟が短縮され収穫が早まった。熱波は、西欧州の冬・夏作物に悪影響を及ぼし、西欧州及び中央欧州の一部では継続的な水不足が熱波の影響を悪化させた。

USDA「Grain and Feed Quarterly」（2026.7.30）によれば、2026/27 年度の生産量は、本年5月以降の猛暑により、フランス、ドイツ、ポーランド、スペイン等で減少が見込まれている。特にフランスは猛暑の影響を強く受けており、収穫が平年に比べ約3週間も早く、保水力の低い土壌の小麦については容積重の低下など品質に悪影響を与えた。

【貿易情報・その他】EC によれば、2026/27 年度の消費量は、前月予測からわずかに上方修正され、前年度から 0.5%増の 113.0 百万トンとなる見込み。2026/27 年度の輸入量は、前月予測からわずかに下方修正され、前年度から 0.5%減の 6.6 百万トンとなる見込み。同「Cereals exports and imports」（2026.10.14）によれば、2026/27 年度のうち 2026 年7～8月の輸入量は、前年同期（131.2 万トン）に比べ 34.5%減の 86.0 万トン。種類別には、普通小麦が前年同期に比べ 46.7%減の 55.2 万トン。デュラム小麦が同 11.1%増の 30.8 万トン（**表**）。ロシアのウクライナ侵攻以降、ウクライナからの輸入が大きく増加していたが、関税割当制度の再開等により同国からの輸入は大きく減少している。2026/27 年度の輸出量は、前月予測からわずかに上方修正されたものの、前年度から 0.3%減の 30.0 百万トンとなる見込み（**図**）。同「Cereals exports and imports」（2026.10.14）によれば、2026/27 年度のうち 2026 年7～8月の輸出量は、前年同期（542.5 万トン）に比べ 18.4%増の 642.4 万トン。種類別には、普通小麦が前年同期に比べ 19.6%増の 634.3 万トン。デュラム小麦が同 33.4%減の 8.1 万トン（**表**）。

2026/27 年度の期末在庫量は、生産量の引上げ等を受け前月予測から 0.3 百万トン上方修正されたものの、前年度から 26.7%減の 12.0 百万トンとなる見込み。

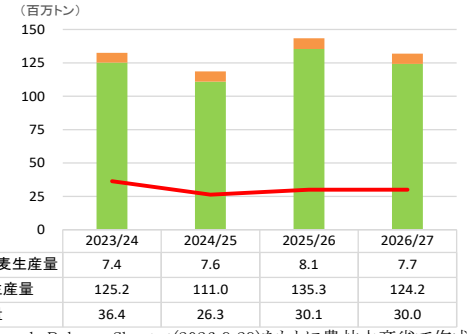
小麦－EU27（冬小麦を主に栽培）

（単位：百万トン）

年度	2024/25	2025/26（見込み）		2026/27（26年7月～27年6月） 予測値		前月予測からの変更		対前年度増減率（%）	
生産量	121.1	145.1	(143.4)	133.0	(131.9)	▲0.8	(0.3)	▲8.4	(▲8.0)
消費量	108.0	113.5	(112.5)	115.8	(113.0)	1.0	(0.002)	2.0	(0.5)
うち飼料用	44.5	50.0	(47.1)	52.0	(47.6)	1.0	(-)	4.0	(1.1)
輸出量	27.9	31.7	(30.1)	31.0	(30.0)	-	(0.003)	▲2.3	(▲0.3)
輸入量	10.7	7.3	(6.7)	6.5	(6.6)	-	(▲0.001)	▲10.7	(▲0.5)
期末在庫量	11.8	19.0	(16.4)	11.7	(12.0)	▲1.8	(0.3)	▲38.2	(▲26.7)
期末在庫率	8.7%	13.1%	(11.5%)	8.0%	(8.4%)	▲1.3	(0.2)	▲5.1	(▲3.1)
（参考）									
収穫面積（百万ha）	22.71	23.96	(23.70)	23.68	(23.22)	▲0.10	(▲0.05)	▲1.2	(▲2.0)
単収（t/ha）	5.33	6.06	(6.05)	5.62	(5.68)	▲0.01	(0.03)	▲7.3	(▲6.1)

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、「World Agricultural Production」(9 October 2026)
EC 「EU Cereals Balance Sheets」(29 September 2026) ※（ ）書き。

図 EU の小麦生産量・輸出量の推移



資料：EC「EU Cereals Balance Sheets」(2026.9.29)をもとに農林水産省で作成

表 EUの小麦の輸出量及び輸入量

○輸出量

	2025/26年度（2025年7月～2026年6月） 国名	輸出量（万トン）	シェア（%）	2026/27年度（2026年7～8月） 国名	輸出量（万トン）	シェア（%）
普通小麦	モロッコ	389.2	13.4	アルジェリア	69.4	10.9
	アルジェリア	279.1	9.6	サウジアラビア	67.6	10.7
	ナイジェリア	232.1	8.0	ナイジェリア	50.0	7.9
	その他	2,004.9	69.0	その他	447.3	70.5
	小計	2,905.3	100.0	小計	634.3	100.0
デュラム小麦	チュニジア	20.4	20.3	サウジアラビア	2.1	25.6
	サウジアラビア	20.3	20.2	チュニジア	1.3	15.9
	英国	9.1	9.1	英国	0.9	11.0
	その他	50.7	50.4	その他	3.8	47.6
	小計	100.5	100.0	小計	8.1	100.0
	小麦計	3,005.7		小麦計	642.4	

○輸入量

	2025/26年度（2025年7月～2026年6月） 国名	輸入量（万トン）	シェア（%）	2026/27年度（2026年7～8月） 国名	輸入量（万トン）	シェア（%）
普通小麦	カナダ	153.9	33.7	カナダ	16.6	30.0
	ウクライナ	102.7	22.5	モルドバ	12.2	22.2
	モルドバ	66.2	14.5	セルビア	10.2	18.4
	その他	134.4	29.4	その他	16.2	29.3
	小計	457.1	100.0	小計	55.2	100.0
デュラム小麦	カナダ	117.8	56.0	カナダ	11.9	38.7
	カザフスタン	44.1	21.0	豪州	8.6	28.1
	米国	24.0	11.4	米国	5.5	17.7
	その他	24.4	11.6	その他	4.8	15.6
	小計	210.2	100.0	小計	30.8	100.0
	小麦計	667.3		小麦計	86.0	

資料：EC「Cereals exports and imports」(2026.10.14)をもとに農林水産省で作成

＜ ロシア ＞ 2026/27 年度の輸出量は前年度から 16.7%減少する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2026/27 年度の生産量（クリミア地域分を含まず）は、前月予測からの変更はなく、収穫面積が減少することを受け前年度から 2.5%減となるものの、過去5年平均（86.1 百万トン）から 2.2%増の 88.0 百万トンと史上4番目の生産量となる見込み。種類別には、冬小麦は、前年度（63.0 百万トン）から 6.3%増の 67.0 百万トン。春小麦は、前年度（27.3 百万トン）から 23.1%減の 21.0 百万トンとなる見込み。

同「World Agricultural Production」（2026.7.10）によれば、2026/27 年度の冬小麦は、休眠明けから十分な降雨と適度な気温が維持され、主要な冬小麦生産地域で収穫見通しが向上した。一方、春小麦は、湿潤な春の気象条件により作付けが遅延した。

ロシア統計庁（2026.8.19）によれば、2026/27 年度の小麦の作付面積は、前年度から 4.6%減の 2,566 万ヘクタール。種類別には、冬小麦が前年度から 1.1%増の 1,598.6 万ヘクタールとなる一方、春小麦が同 12.8%減の 967.5 万ヘクタール。

現地情報会社によれば、10 月９日現在、2026/27 年度の収穫面積は 2,512 万ヘクタールで収穫予定面積の 97%が収穫されており、収穫量は 8,987 万トンとなっている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2026/27 年度の輸出量は、黒海及びアゾフ海での混乱を受け前月予測から 3.0 百万トン下方修正され、前年度から 16.7%減、過去5年平均（45.9 百万トン）から 12.9%減の 40.0 百万トンとなる見込み（**図**）。

現地情報会社によれば、2026/27 年度のうち 2026 年7～9月の輸出量は、前年同期（1,080.2 万トン）に比べ 41.1%減の 636.6 万トン。輸出先国別には、エジプト 111.4 万トン（17.5%）、アゼルバイジャン 46.2 万トン（7.3%）、カザフスタン 42.6 万トン（6.7%）の順（**表**）。9月の輸出量は、前年に比べ 48%減の 241 万トンとなった。黒海及びアゾフ海におけるウクライナのドローン攻撃等により平年に比べ輸出量は大きく減少している。黒海港湾からの輸出が大きく減少している一方、バルト海経由での輸出については、月の輸出量としては過去最大であったとみられる。

報道によれば、ロシアはバルト海からの輸出のほか、カスピ海経由や中国経由の輸出ルートについて模索しているとみられるが、コストや輸送能力等の問題から輸出量の大幅な増加は難しいとみられる。

USDA によれば、2026/27 年度の期末在庫量は、輸出の停滞を受け前月予測から 3.0 百万トン上方修正され、前年度から 59.2%増の 19.1 百万トンとなり史上最高となる見込み（**図**）。

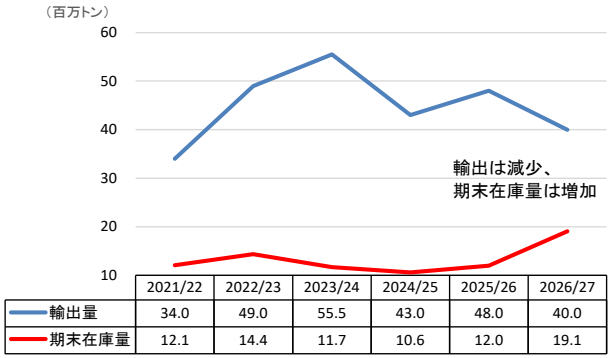
小麦ーロシア（主産地の欧州部で冬小麦、シベリアで春小麦を栽培）

（単位：百万トン）

年度	2024/25	2025/26（見込み）	2026/27（26年7月～27年6月） 予測値、（ ）はIGC		前月予測からの変更	対前年度増減率（%）
生産量	81.6	90.3	88.0	(88.4)	－	▲ 2.5
消費量	40.0	41.2	41.2	(41.8)	－	－
うち飼料用	17.0	18.0	18.0	(18.0)	－	－
輸出量	43.0	48.0	40.0	(39.4)	▲ 3.0	▲ 16.7
輸入量	0.3	0.3	0.3	(0.2)	－	－
期末在庫量	10.6	12.0	19.1	(18.5)	3.0	59.2
期末在庫率	12.8%	13.4%	23.5%	(22.8%)	4.4	10.1
（参考）						
収穫面積（百万ha）	27.80	26.30	25.10	(24.48)	－	▲ 4.6
単収（t/ha）	2.94	3.43	3.51	(3.61)	－	2.3

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、「World Agricultural Production」(9 October 2026)
IGC「Grain Market Report」(15 October 2026)

図 ロシアの小麦の輸出量・期末在庫量の推移



	2021/22	2022/23	2023/24	2024/25	2025/26	2026/27
輸出量	34.0	49.0	55.5	43.0	48.0	40.0
期末在庫量	12.1	14.4	11.7	10.6	12.0	19.1

資料：USDA「PS&D」(2026.10.9)をもとに農林水産省で作成

表 ロシアの小麦の輸出先国と輸出量

2025/26年度（2025年7月～2026年6月） 国名	輸出量（万トン）	シェア（%）	2025/26年度（2025年7～9月） 国名	輸出量（万トン）	シェア（%）	2026/27年度（2026年7～9月） 国名	輸出量（万トン）	シェア（%）
エジプト	890.3	19.5	エジプト	206.1	19.1	エジプト	111.4	17.5
トルコ	669.4	14.7	トルコ	130.4	12.1	アゼルバイジャン	46.2	7.3
スーダン	229.4	5.0	リビア	62.0	5.7	カザフスタン	42.6	6.7
ケニア	209.3	4.6	イスラエル	55.0	5.1	ナイジェリア	37.3	5.9
イスラエル	207.8	4.5	サウジアラビア	54.3	5.0	ケニア	35.0	5.5
その他	2,361.6	51.7	その他	572.4	53.0	その他	364.1	57.2
合計	4,567.8	100.0	合計	1,080.2	100.0	合計	636.6	100.0

資料：現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成

＜ ウクライナ ＞ 2026/27 年度の期末在庫量は前年度から 205.0%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2026/27年度の生産量（クリミア地域分を含む）は、前月予測からの変更はなく、前年度から7.9%増、過去5年平均（25.0百万トン）から4.0%増の26.0百万トンとなる見込み。同「World Agricultural Production」（2026.9.11）によれば、2026/27年度の小麦について、収穫面積は前月予測からの変更はないものの、単収は4.73トン/ヘクタールと、8月予測から2%増、前年度から11%増となり、史上最高となる見込み。

ウクライナ農業政策食料省によれば、10月５日現在、2026/27年度の小麦の収穫面積は512万ヘクタールで、収穫量は2,601万トンとなっており、収穫は終了しているとみられる。また、10月６日現在、2027/28年度の冬小麦の作付進捗率は50%となっている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2026/27年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、黒海での混乱を受け前年度から11.3%減、過去5年平均（16.9百万トン）から25.9%減の12.5百万トンとなる見込み（**図**）。

EUは、ウクライナ産品の輸入に関し、「深化した包括的自由貿易協定（DCFTA）」に基づき、関税割当制度等の適用を再開。小麦及びメスリン等の年間輸入割当数量は130万トン、小麦粉等は同3万トンで、農業団体「ウクライナ・アグリビジネスクラブ」によれば、6月１日時点で輸入割当数量130万トンは全て消化されており、2026年末までEUへの小麦及びメスリン等の輸出については関税が課される。報道によれば、ウクライナはEUに対し、前述の輸入割当数量の拡大を求めているものの、EU側は拡大の予定はないとしている。

報道（10月）によれば、ウクライナ、ロシア双方の黒海からの輸出が困難な状態となっているが、依然としてオデーサの港湾施設等へのドローンによる攻撃が続いている。また、幹線道路を走行中のトラックやトレーラー、民間船舶への攻撃も発生している。

現地情報会社によれば、2026/27年度のうち2026年7～9月の輸出量は、前年同期（471.9万トン）に比べ41.3%減の277.1万トン。輸出先国別には、アルジェリア56.2万トン（20.3%）、エジプト35.2万トン（12.7%）、インドネシア35.0万トン（12.6%）の順（**表**）。9月の輸出量は、ロシアの攻撃による黒海沿岸港からの輸出が大きく減少しており、8月と比べれば大きく増加したものの、平年に比べれば減少で過去5年では最も少ない輸出量となった。輸出先国別には、アジア等の遠方への輸出が困難となり、上位5か国は全て地中海に面した国となっている。

USDAによれば、2026/27年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、輸出の停滞等を受け前年度から205.0%増の6.1百万トンとロシア侵攻2021/22年度（6.3百万トン）以来の高水準となる見込み（**図**）。

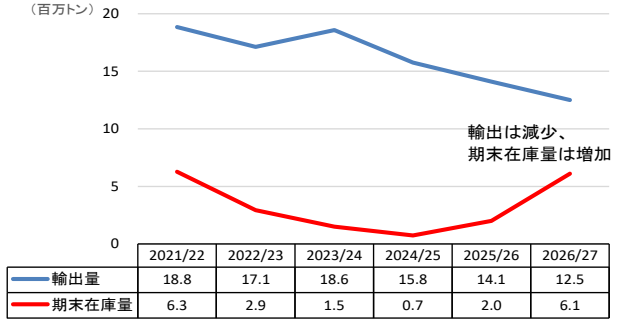
小麦ーウクライナ（主に冬小麦を栽培）

（単位：百万トン）

年度	2024/25	2025/26（見込み）	2026/27（26年7月～27年6月） 予測値、（ ）はIGC		前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	23.4	24.1	26.0	(28.3)	－	7.9
消費量	8.5	8.8	9.5	(11.0)	－	8.0
うち飼料用	3.6	3.8	4.5	(3.5)	－	18.4
輸出量	15.8	14.1	12.5	(12.8)	－	▲ 11.3
輸入量	0.1	0.1	0.1	(0.1)	－	25.0
期末在庫量	0.7	2.0	6.1	(6.3)	－	205.0
期末在庫率	3.0%	8.7%	27.7%	(26.6%)	－	19.0
（参考）						
収穫面積（百万ha）	5.20	5.65	5.50	(6.40)	－	▲ 2.7
単収（t/ha）	4.50	4.27	4.73	(4.42)	－	10.8

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、「World Agricultural Production」(9 October 2026)
IGC「Grain Market Report」(15 October 2026)

図　ウクライナの小麦の輸出量・期末在庫量の推移



	2021/22	2022/23	2023/24	2024/25	2025/26	2026/27
輸出量	18.8	17.1	18.6	15.8	14.1	12.5
期末在庫量	6.3	2.9	1.5	0.7	2.0	6.1

資料：USDA「PS&D」(2026.10.9)をもとに農林水産省で作成

表　ウクライナの小麦の輸出先国と輸出量

2025/26年度（2025年7月～2026年6月）			2025/26年度（2025年7～9月）			2026/27年度（2026年7～9月）		
国名	輸出量（万トン）	シェア（%）	国名	輸出量（万トン）	シェア（%）	国名	輸出量（万トン）	シェア（%）
エジプト	385.5	27.6	エジプト	139.8	29.6	アルジェリア	56.2	20.3
アルジェリア	278.4	19.9	インドネシア	94.6	20.0	エジプト	35.2	12.7
インドネシア	206.8	14.8	アルジェリア	44.3	9.4	インドネシア	35.0	12.6
イエメン	104.8	7.5	ベトナム	44.2	9.4	バングラデシュ	30.2	10.9
スペイン	67.8	4.9	スペイン	24.3	5.2	スペイン	20.6	7.4
その他	355.0	25.4	その他	124.8	26.4	その他	99.8	36.0
合計	1,398.4	100.0	合計	471.9	100.0	合計	277.1	100.0

資料：APK-Inform Agency のデータをもとに農林水産省で作成

＜ 中国 ＞ 2026/27年度の生産量は史上最高となる見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2026/27 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 0.7%増、過去5年平均(138.3 百万トン)から 2.0%増の 141.0 百万トンとなり、史上最高となる見込み。

中国国家統計局(2026.7.10)によれば、2026/27 年度の夏季産小麦の作付面積は、前年度から 0.3%減(6.7 万ヘクタール減)の 23.01 百万ヘクタール。単収は、前年度から 0.9%増(0.05 トン/ヘクタール増)の 6.04 トン/ヘクタール。生産量は、前年度から 0.6%増(0.78 百万トン増)の 139.0 百万トン。

中国中央気象台「全国農業気象週報」(2026.10.12)によれば、10 月4～10 日の期間、2027/28 年度の冬小麦は作付期から出芽期を迎えている。主産地の大部分で適度な土壌水分に恵まれ、適期作付けに有利となった。一方で、陝西省北西部、山西省西部、河北省西部では、高温・少雨により土壌水分が減少し、表層土壌で軽度の水分不足がみられた。全体としては、作付作業は概ね順調に進んでいる。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2026/27 年度の消費量は、飼料用消費の引上げを受け前月予測から 1.0 百万トン上方修正されたものの、前年度から 0.7%減、過去5年平均(149.9 百万トン)から 0.6%減の 149.0 百万トンとなる見込み。

2026/27 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 9.9%増となるものの、過去5年平均(9.2 百万トン)から 34.9%減の 6.0 百万トンとなる見込み。

2026 年5月 14 日の米中首脳会談後、ホワイトハウスは、5月 17 日付のファクトシートで中国が 2026 年から 2028 年の各年に少なくとも 170 億ドルの米国農産物を購入すると発表。なお、具体的な品目は公表されていない。中国商務部「米中経済貿易協議の暫定的な成果解説」(2026.5.21)によれば、米中双方が農産物の貿易拡大に向けて努力していく考えが示された。

米国及び中国は、2026 年9月 20～23 日にかけ経済貿易協議を行い、中国商務部は、9月 28 日、関税引下げの枠組みの合意内容を発表した。関税引下げの対象となる米国産輸入品リストには小麦が含まれており、現状10%の相互関税について引下げが議論される。

中国海関統計によれば、2026/27 年度のうち 2026 年7～8月の輸入量は、前年同期(64.1 万トン)に比べ 31.4%減の 43.9 万トン。輸入先国別には、カナダ 30.8 万トン(70.2%)、豪州 6.8 万トン(15.4%)、ロシア 4.2 万トン(9.5%)の順(**表**)。USDA によれば、2026/27 年度の期末在庫量は、消費量の引上げを受け前月予測から 1.0 百万トン下方修正され、前年度から 2.5%減の 119.2 百万トンとなる見込み。

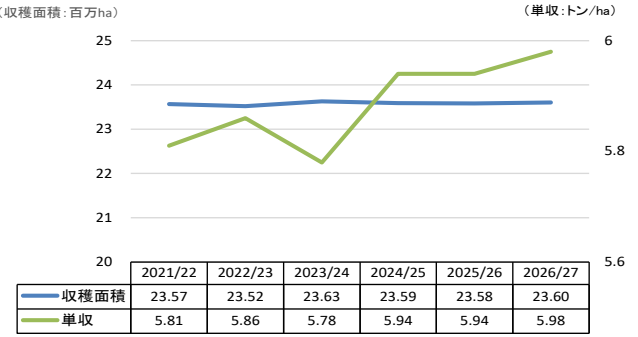
小麦－中国(冬小麦を主に栽培)

(単位:百万トン)

年度	2024/25	2025/26 (見込み)	2026/27(26年7月～27年6月) 予測値、( )はIGC		前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	140.1	140.1	141.0	(140.5)	-	0.7
消費量	150.0	150.0	149.0	(146.9)	1.0	▲ 0.7
うち飼料用	33.0	33.0	32.0	(28.0)	1.0	▲ 3.0
輸出量	1.0	1.1	1.0	(1.3)	-	▲ 9.1
輸入量	4.2	5.5	6.0	(6.3)	-	9.9
期末在庫量	127.8	122.2	119.2	(133.3)	▲ 1.0	▲ 2.5
期末在庫率	84.6%	80.9%	79.5%	(89.9%)	▲ 1.2	▲ 1.4
(参考)						
収穫面積(百万ha)	23.59	23.58	23.60	(23.59)	-	0.1
単収(t/ha)	5.94	5.94	5.97	(5.96)	-	0.5

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、「World Agricultural Production」(9 October 2026)
IGC「Grain Market Report」(15 October 2026)

図 中国の小麦の収穫面積・単収の推移



資料:USDA「PS&D」(2026.10.9)をもとに農林水産省で作成

表 中国の小麦の輸入先国と輸入量

2025/26年度(2025年7月～2026年6月) 国名	輸入量(万トン)	シェア(%)	2025/26年度(2025年7～8月) 国名	輸入量(万トン)	シェア(%)	2026/27年度(2026年7～8月) 国名	輸入量(万トン)	シェア(%)
カナダ	291.0	57.0	カナダ	49.3	77.0	カナダ	30.8	70.2
豪州	125.8	24.6	豪州	12.6	19.6	豪州	6.8	15.4
アルゼンチン	35.0	6.8	カザフスタン	0.8	1.2	ロシア	4.2	9.5
米国	33.6	6.6	日本	0.6	1.0	カザフスタン	1.7	4.0
ロシア	13.8	2.7	ロシア	0.4	0.7	フランス	0.3	0.7
その他	11.6	2.3	その他	0.34	0.53	その他	0.08	0.2
合計	510.9	100.0	合計	64.1	100.0	合計	43.9	100.0

資料:中国海関統計をもとに農林水産省で作成

2 とうもろこし

(1)国際的なとうもろこし需給の概要(詳細は右表を参照)

＜USDA の見通し＞　2026/27 年度

生産量　　**前年度比** ⇩ **前月比** ⇧

・EU、フィリピン等で下方修正されたものの、米国で上方修正され、前月から上方修正された。

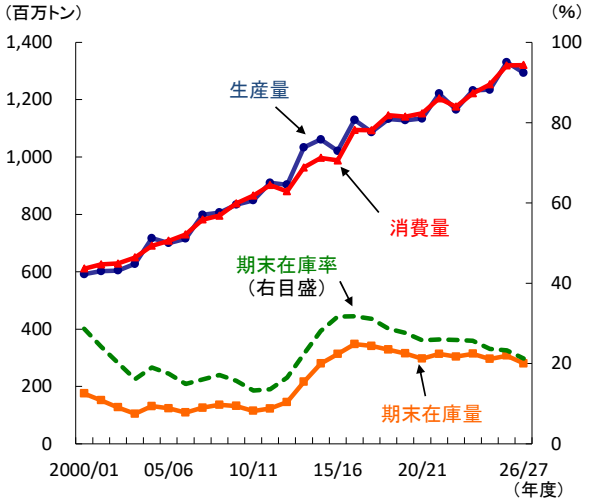
消費量　　**前年度比** ⇧ **前月比** ⇧

・EU、ベトナム、メキシコ等で下方修正されたものの、米国、エジプト等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

輸出量　　**前年度比** ⇩ **前月比** ⇧

・米国で上方修正され、前月から上方修正された。

期末在庫量　**前年度比** ⇩ **前月比** ⇧



資料:USDA「PS&D」(2026.10.9)をもとに農林水産省で作成

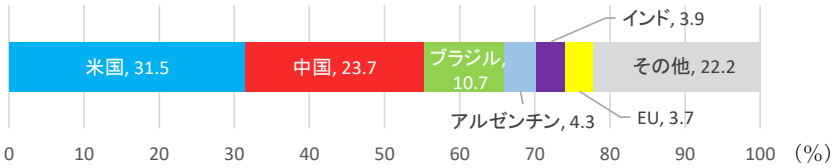
◎世界のとうもろこし需給

(単位:百万トン)

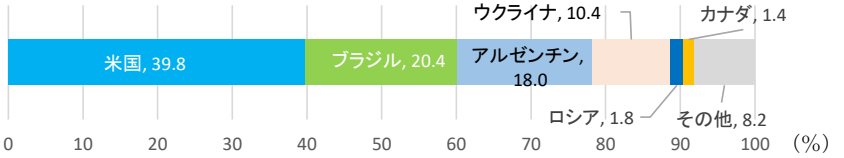
年　度	2024/25	2025/26 (見込み)	2026/27 予測値	2026/27 前月予測からの変更	2026/27 対前年度増減率(%)
生　産　量	1,235.0	1,330.6	1,293.8	2.8	▲ 2.8
消　費　量	1,253.2	1,319.1	1,320.5	0.2	0.1
うち飼料用	785.8	824.3	826.3	▲ 1.1	0.2
輸　出　量	187.6	216.0	210.7	0.6	▲ 2.4
輸　入　量	186.6	198.4	203.4	0.3	2.5
期末在庫量	295.6	307.2	280.4	8.3	▲ 8.7
期末在庫率	23.6%	23.3%	21.2%	0.6	▲ 2.0

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(9 October 2026)

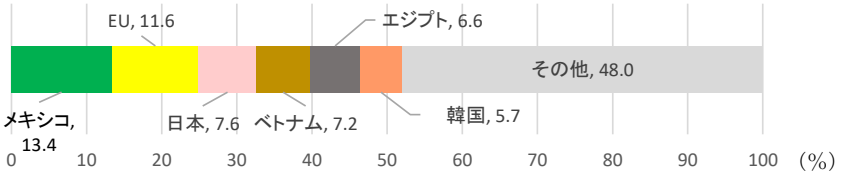
○ 2026/27 年度　世界のとうもろこしの生産量 (1,293.8 百万トン)



○ 2026/27 年度　世界のとうもろこしの輸出量 (210.7 百万トン)



○ 2026/27 年度　世界のとうもろこしの輸入量 (203.4 百万トン)



（2）国別のとうもろこしの需給動向

＜ 米国 ＞ 2026/27 年度の生産量は、前年度から 5.5%減少する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2026/27 年度の生産量は、単収の引上げを受け前月予測から 6.0 百万トン上方修正されたものの、収穫面積及び単収の減少を受け前年度から 5.5%減、過去5年平均（385.4 百万トン）からは 5.7%増の 407.3 百万トンと史上2番目の見込み。

同「Crop Production」（2026.10.9）によれば、コーンベルト西部の一部地域では、9月の豪雨により収穫作業が停滞し、品質に対する懸念も生じた。しかし、10 月1日時点の状況に基づく予測では、アーカンソー州、アイオワ州、ケンタッキー州、ミシシッピ州、オハイオ州、テネシー州において、過去最高の単収が予測されている。

同「Crop Progress」（2026.10.13）によれば、10 月 11 日現在の収穫進捗率は 33%と、過去5年平均（39%）を下回っている。また、作柄評価は「良～優良」の割合が 56%となっている。

【需要状況】USDA によれば、2026/27 年度の消費量は、前月予測から 2.5 百万トン上方修正されたものの、飼料用消費の減少等を受け前年度から 0.1%減の 330.3 百万トンとなる見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2026/27 年度の輸出量は、前月予測から 0.6 百万トン上方修正されたものの、他の輸出国との競争等を受け前年度から 3.8%減の 83.8 百万トンとなる見込み。

同「Federal Grain Inspection Services Yearly Export Grain Totals」によれば、2026/27 年度のうち 2026 年9月の輸出量は、前年同月（652.0 万トン）に比べ 7.8%増の 702.8 万トン。輸出先国別には、メキシコ 225.3 万トン（32.1%）、日本 147.3 万トン（21.0%）、韓国 97.2 万トン（13.8%）の順となっている（**表**）。

同「Grain: World Markets and Trade」（2026.10.9）によれば、10 月6日現在の輸出価格は、米国は、旧穀在庫の大幅な上方修正を受け前月から 14 ドル/トン下落し 239 ドル/トン、アルゼンチンは、潤沢な国内供給による価格押し下げ圧力があったものの、引き続き競争力のある価格が旺盛な輸出需要を支え、前月から1ドル/トン下落し 219 ドル/トン、ブラジルは、2期作の収穫に伴う季節的な価格押し下げ圧力を受け前月から8ドル/トン下落し 231 ドル/トンとなっている（**図**）。

USDA によれば、2026/27 年度の期末在庫量は、期首在庫量及び生産量の引上げを受け前月予測から 7.2 百万トン上方修正されたものの、生産量の減少等を受け前年度から 11.7%減、過去5年平均（41.4 百万トン）からは 13.5%増の 47.0 百万トンとなる見込み。期末在庫率は前年度から 1.4 ポイント減の 11.3%となる見込み。

とうもろこし－米国

（4～5月に作付けされ、9～11 月に収穫される。）

（単位：百万トン）

年度	2024/25	2025/26（見込み）	2026/27（26年9月～27年8月） 予測値	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	378.3	430.9	407.3	6.0	▲ 5.5
消費量	311.2	330.8	330.3	2.5	▲ 0.1
うち飼料用	138.1	155.4	152.4	1.3	▲ 1.9
ｴﾀﾉｰﾙ用等	138.1	140.9	143.5	1.3	1.9
輸出量	73.0	87.1	83.8	0.6	▲ 3.8
輸入量	0.6	0.8	0.6	－	▲ 20.0
期末在庫量	39.4	53.2	47.0	7.2	▲ 11.7
期末在庫率	10.3%	12.7%	11.3%	1.7	▲ 1.4
（参考）					
収穫面積（百万ha）	33.61	36.81	35.82	－	▲ 2.7
単収（t/ha）	11.26	11.71	11.37	0.16	▲ 2.9

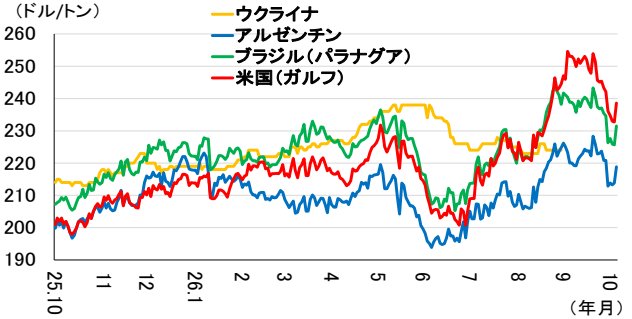
資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、「World Agricultural Production」(9 October 2026)

表 米国のとうもろこしの輸出先国と輸出量

2025/26年度（2025年９月～2026年８月） 国名	輸出量（万トン）	シェア（%）	2025/26年度（2025年９月） 国名	輸出量（万トン）	シェア（%）	2026/27年度（2026年９月） 国名	輸出量（万トン）	シェア（%）
メキシコ	2,471.7	29.1	メキシコ	230.1	35.3	メキシコ	225.3	32.1
日本	1,548.2	18.2	日本	124.4	19.1	日本	147.3	21.0
韓国	893.8	10.5	コロンビア	62.9	9.6	韓国	97.2	13.8
コロンビア	823.6	9.7	スペイン	51.2	7.9	コロンビア	80.3	11.4
スペイン	498.1	5.9	韓国	35.2	5.4	スペイン	22.9	3.3
その他	2,248.7	26.5	その他	148.1	22.7	その他	129.9	18.5
合計	8,484.1	100.0	合計	652.0	100.0	合計	702.8	100.0

資料：USDA「Federal Grain Inspection Services Yearly Export Grain Totals」をもとに農林水産省で作成

図 各国のとうもろこし輸出価格（FOB）の推移



資料：IGC のデータをもとに農林水産省で作成。なお、ウクライナの9月1日以降のデータは公表されていない。

＜ ブラジル ＞ 2026/27 年度の生産量は、前年度から 1.4%減少する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2026/27 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、単収の減少を受け前年度から 1.4%減となるものの、過去5年平均（129.8 百万トン）から 7.1%増の 139.0 百万トンとなる見込み。

ブラジル食料供給公社（CONAB）の月例報告（2026.10.15）によれば、2026/27 年度の生産量は、作付面積の増加を受け前年度から 2.4%増の 148.0 百万トンとなる見込み。作期別には、第1期作の生産量は、前年度から 8.9%増の 32.1 百万トンとなる見込み。これは、一部の州におけるエタノール需要の増加と、他作物と比較しとうもろこしの収益性が高いことにより、作付面積が増加することによる。9月末時点の作付進捗率は 30.8%と前年同期 29.1%をわずかに上回っている。第2期作の生産量は、前年度から 0.4%増の 113.3 百万トンとなる見込み。大豆収穫後にとうもろこしを生産する二毛作の拡大により、作付面積が 3.7%増加する。第3期作の生産量は、前年度から 18.6%増の 2.7 百万トンとなる見込み（**図**）。

【需要状況】USDA によれば、2026/27 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、エタノール用需要の増加を受け前年度から 1.5%増の 102.0 百万トンと史上最高の見込み。

同「Biofuels Annual」（2026.9.2）によれば、ブラジル政府は、8月1日、ガソリンへの無水エタノール混合率を 30%から 32%（E32）に引き上げた。これは、ガソリン輸入量と余剰エタノールの削減を目的とした一時的な措置で、期間は 180 日間。一度のみ 180 日間延長することが可能となっている。なお、2025 年のブラジルのエタノール生産量のうち約 76%がさとうきび由来、約 24%がとうもろこし由来であった。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2026/27 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、供給量の増加を受け前年度から 13.2%増の 43.0 百万トンとなる見込み。ブラジル貿易統計によれば、2025/26 年度のうち 2026 年3～9月の輸出量は、前年同期（1,829.2 万トン）に比べ 23.8%減の 1,393.3 万トン。輸出先国別には、エジプト 403.6 万トン（29.0%）、イラン 152.1 万トン（10.9%）、スペイン 94.5 万トン（6.8%）の順となっている（**表**）。

USDA によれば、2026/27 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、生産量の減少及び輸出量の増加を受け前年度から 28.4%減、過去5年平均（9.4 百万トン）からは 13.1%増の 10.6 百万トンとなる見込み。期末在庫率は前年度から 3.4 ポイント減の 7.3%となる見込み。

とうもろこし－ブラジル

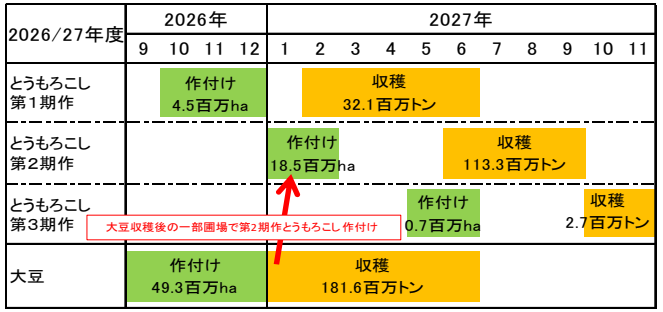
（第１期作は、10～12 月に作付けされ、2～6月に収穫される。第2期作は、大豆収穫後の１～2月に作付けされ、6～9月に収穫される。）

（単位：百万トン）

年度	2024/25	2025/26（見込み）	2026/27（27年3月～28年2月） 予測値	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	136.0	141.0 (144.5)	139.0 (148.0)	- (-)	▲1.4 (2.4)
消費量	92.5	100.5 (98.3)	102.0 (104.8)	- (-)	1.5 (6.6)
うち飼料用	65.0	67.0 …	65.0 …	- (-)	▲3.0 …
輸出量	42.0	38.0 (43.9)	43.0 (46.0)	- (-)	13.2 (4.8)
輸入量	1.8	1.7 (1.7)	1.8 (1.7)	- (-)	5.9 (-)
期末在庫量	10.6	14.8 (16.0)	10.6 (14.9)	- (-)	▲28.4 (▲6.9)
期末在庫率	7.9%	10.7% (11.3%)	7.3% (9.9%)	- (-)	▲3.4 (▲1.4)
（参考）					
収穫面積（百万ha）	22.30	22.80 (22.60)	23.20 (23.70)	- (-)	1.8 (4.9)
単収（t/ha）	6.10	6.18 (6.39)	5.99 (6.24)	- (-)	▲3.1 (▲2.3)

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 October 2026)
CONAB「Graos」(15 October 2026) ※( )書き。なお、CONABの収穫面積は作付面積である。

図 ブラジルのクロップカレンダー



資料：CONAB「Graos」(2026.10.15)等をもとに農林水産省で作成。
なお、作付け及び収穫の時期は目安である。

表 ブラジルのとうもろこしの輸出先国と輸出量

2024/25年度（2025年３月～2026年２月） 国名	輸出量（万トン）	シェア（%）	2024/25年度（2025年３～９月） 国名	輸出量（万トン）	シェア（%）	2025/26年度（2026年３～９月） 国名	輸出量（万トン）	シェア（%）
イラン	866.2	20.8	イラン	327.3	17.9	エジプト	403.6	29.0
エジプト	724.2	17.4	エジプト	288.4	15.8	イラン	152.1	10.9
ベトナム	527.6	12.7	ベトナム	176.3	9.6	スペイン	94.5	6.8
サウジアラビア	219.6	5.3	スペイン	122.8	6.7	ベトナム	89.4	6.4
中国	192.9	4.6	サウジアラビア	99.0	5.4	サウジアラビア	75.2	5.4
その他	1,634.1	39.2	その他	815.5	44.6	その他	578.6	41.5
合計	4,164.6	100.0	合計	1,829.2	100.0	合計	1,393.3	100.0

資料：ブラジル貿易統計のデータをもとに農林水産省で作成

＜ アルゼンチン ＞ 2026/27 年度の生産量は、前年度から 14.1%減少する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2026/27 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積及び単収の減少を受け前年度から 14.1%減となるものの、過去5年平均（50.7 百万トン）から 8.4%増の 55.0 百万トンとなる見込み。

同「World Agricultural Production」（2026.10.9）によれば、2025/26 年度の生産量は、前年度から 31%増の 64.0 百万トンと史上最高の見通し。2025/26 年度は、ヨコバイの被害を概ね回避できる早植えとうもろこしの作付面積が平年よりも増加した。ブエノスアイレス穀物取引所によれば、2025/26 年度は、2026 年1月から2月上旬にかけて、平年を下回る降水量となった。当該期間に重要な生育段階にあったのは遅植えとうもろこしの一部のみであり、早植えとうもろこしの大部分は既に重要な生育段階を過ぎており、遅植えとうもろこしの大部分は2月に降雨が回復してから収量形成における重要な段階を迎えた。なお、生育期間を通じての天候は、前述の乾燥を除き良好となった。一方で、過剰な降雨により収穫が遅れ、完了は9月末頃となった。

アルゼンチン農牧漁業庁（SAGyP）の週報（2026.10.8）によれば、2025/26 年度の収穫は終了し、10 月8日時点の 2026/27 年度の作付進捗率は 27%と、前年同期（23%）を上回り、主要生産州では、ブエノス・アイレス州 15%（前年同期 10%）、コルドバ州 31%（同 28%）、サンタフェ州 68%（同 64%）となっている。

【需要状況】USDA によれば、2026/27 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、飼料用消費の減少を受け前年度から 4.8%減の 17.7 百万トンとなる見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2026/27 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、生産量の減少を受け前年度から 15.6%減の 38.0 百万トンとなる見込み。

アルゼンチン国家統計局によれば、2025/26 年度のうち 2026 年3～8月の輸出量は、前年同期（1,957.1 万トン）に比べ 34.6%増の 2,633.5 万トン。輸出先国別には、ベトナム 464.4 万トン（17.6%）、ペルー256.2 万トン（9.7%）、エジプト 236.5 万トン（9.0%）の順となっている（**表**）。

USDA によれば、2026/27 年度の期末在庫量は、期首在庫量の引上げを受け前月予測から 1.0 百万トン上方修正されたものの、生産量の減少を受け前年度から 12.3%減、過去5年平均（4.1 百万トン）からは 22.2%増の 5.0 百万トンとなる見込み。期末在庫率は前年度から 0.02 ポイント増の 9.0%となる見込み。

とうもろこし－アルゼンチン

（早植えとうもろこしは、9月後半～12 月前半に作付けされ、遅植えとうもろこしは、12 月前半～翌年2月前半に作付けされる。3～8月に収穫される。）

（単位：百万トン）

年　度	2024/25	2025/26（見込み）	2026/27（27年3月～28年2月）		
			予測値、（ ）はIGC	前月予測からの変更	対前年度増減率（%）
生　産　量	49.0	64.0	55.0　(69.5)	－	▲ 14.1
消　費　量	17.1	18.6	17.7　(23.1)	－	▲ 4.8
うち飼料用	12.7	14.0	13.0　(17.5)	－	▲ 7.1
輸　出　量	29.1	45.0	38.0　(45.0)	－	▲ 15.6
輸　入　量	0.01	0.01	0.01　(0.001)	－	－
期末在庫量	5.3	5.7	5.0　(7.9)	1.0	▲ 12.3
期末在庫率	11.5%	9.0%	9.0%（11.6%）	1.8	0.02
（参考）					
収穫面積（百万ha）	6.83	8.20	7.90　(9.70)	－	▲ 3.7
単収（t/ha）	7.18	7.80	6.96　(7.16)	－	▲ 10.8

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 October 2026)
IGC「Grain Market Report」(15 October 2026)

写真　中西部サンルイス州の圃場



当圃場では、出芽後の初期生育段階にある（10 月 15 日撮影）。

撮影者：Rodrigo Becerra

表　アルゼンチンのとうもろこしの輸出先国と輸出量

2024/25年度（2025年３月～2026年２月）			2024/25年度（2025年３～８月）			2025/26年度（2026年３～８月）		
国名	輸出量（万トン）	シェア（%）	国名	輸出量（万トン）	シェア（%）	国名	輸出量（万トン）	シェア（%）
ベトナム	534.1	18.4	ベトナム	393.2	20.1	ベトナム	464.4	17.6
ペルー	462.8	15.9	ペルー	232.2	11.9	ペルー	256.2	9.7
マレーシア	309.5	10.6	アルジェリア	179.8	9.2	エジプト	236.5	9.0
アルジェリア	259.0	8.9	マレーシア	175.6	9.0	サウジアラビア	220.1	8.4
サウジアラビア	214.9	7.4	エジプト	155.9	8.0	アルジェリア	212.6	8.1
その他	1,125.7	38.7	その他	820.4	41.9	その他	1243.7	47.2
合計	2,905.9	100.0	合計	1,957.1	100.0	合計	2,633.5	100.0

資料：アルゼンチン国家統計局（INDEC）をもとに農林水産省で作成。なお、その他には秘匿「Confidential」の数量を含む。

＜ ウクライナ ＞ 2026/27 年度の生産量は、前年度から 2.9%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2026/27 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積及び単収の増加を受け前年度から 2.9%増となるものの、過去5年平均（31.9 百万トン）から 0.2%減の 31.8 百万トンとなる見込み。

農業市場情報システム（AMIS）「Market Monitor No.142」（2026.10.2）によれば、ウクライナでは収穫が始まり、西部では干ばつや高温の影響で単収が低くなると予測されている。

ウクライナ農業政策食料省によれば、10 月５日時点のとうもろこしの収穫進捗率は6％であり、前年同期（10%）を下回っている。現地情報会社によれば、作柄は概ね良好。

【需要状況】USDA によれば、2026/27 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、飼料用需要の増加等を受け前年度から 9.1%増の 7.2 百万トンとなる見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2026/27 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 1.1%減の 22.0 百万トンとなる見込み。

現地情報会社によれば、10 月から本格的な収穫・輸出シーズンが始まり、黒海沿岸諸港が機能不全の状態にある中、ウクライナは距離的に近いEU諸国やトルコへの輸出に注力せざるを得ないとみられる。また、ウクライナ農業政策食料省は、物流上の制約がある中、穀物より収益性が高い油糧作物の輸出を優先的に行うための施策を検討しており、この政策が実施されれば、とうもろこしの輸出機会はさらに減少するとみられる。

2025/26 年度の輸出量は、前年度（2,000.8 万トン）に比べ 11.1%増の 2,223.7 万トン。輸出先国別には、トルコ 685.7 万トン（30.8%）、イタリア 403.5 万トン（18.1%）、スペイン 202.0 万トン（9.1%）の順となっている（**表**）。

国内市場のとうもろこし価格は、黒海港湾からの輸出が困難となり国内在庫が積み上がる中、収穫シーズンが到来したことで、さらなる価格下落を見込んだ買い控え傾向も強まり、価格の下押し圧力が強まっている。

USDA によれば、2026/27 年度の期末在庫量は、期首在庫量の引上げを受け前月予測から 0.1 百万トン上方修正され、生産量の増加及び輸出量の減少を受け前年度から 89.4%増、過去5年平均（3.0 百万トン）から 83.1%増の 5.5 百万トンとなる見込み。期末在庫率は、前年度から 8.8 ポイント増の 18.9%となる見込み。

とうもろこし－ウクライナ

（4～5月に作付けされ、8～11 月に収穫される。）

（単位：百万トン）

年　度	2024/25	2025/26（見込み）	2026/27（26年10月～27年9月） 予測値、（ ）はIGC	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生　産　量	26.8	30.9	31.8 (32.9)	－	2.9
消　費　量	6.5	6.6	7.2 (6.9)	－	9.1
うち飼料用	5.3	5.1	5.5 (4.7)	－	7.8
輸　出　量	20.0	22.2	22.0 (22.0)	－	▲ 1.1
輸　入　量	0.02	0.02	0.01 (0.002)	－	▲ 50.0
期末在庫量	0.8	2.9	5.5 (7.0)	0.1	89.4
期末在庫率	3.2%	10.1%	18.9% (24.4%)	0.2	8.8
（参考）					
収穫面積（百万ha）	4.10	4.40	4.45 (4.60)	－	1.1
単収（t/ha）	6.54	7.02	7.15 (7.15)	－	1.9

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、「World Agricultural Production」(9 October 2026)
IGC「Grain Market Report」(15 October 2026)

写真　中央部ドニプロペトロウスク州の圃場



当圃場では、既に収穫は完了した。次期作に向け土づくりを行っている（10 月 12 日撮影）。

表　ウクライナのとうもろこしの輸出先国と輸出量

2024/25年度（2024年10月～2025年９月）			2025/26年度（2025年10月～2026年９月）		
国名	輸出量（万トン）	シェア（%）	国名	輸出量（万トン）	シェア（%）
トルコ	568.8	28.4	トルコ	685.7	30.8
イタリア	273.6	13.7	イタリア	403.5	18.1
スペイン	240.7	12.0	スペイン	202.0	9.1
オランダ	199.1	10.0	オランダ	183.6	8.3
エジプト	162.5	8.1	チュニジア	94.2	4.2
その他	556.2	27.8	その他	654.6	29.4
合計	2,000.8	100.0	合計	2,223.7	100.0

資料：APK-Inform Agency のデータをもとに農林水産省で作成

＜ 中国 ＞ 2026/27 年度の生産量は、前年度から 1.9%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2026/27 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積及び単収の増加を受け前年度から 1.9%増、過去5年平均（287.0 百万トン）から 7.0%増の 307.0 百万トンと史上最高の見込み。

中国中央気象台「全国農業気象週報」（2026.10.12）によれば、10 月4～10 日の期間、春とうもろこしは、乳熟期から成熟期の段階にあり、黒龍江省、吉林省、遼寧省の大部分では日照と気温が適切で、子実の乾燥と成熟後の収穫・乾燥作業に適していた。一方、4～5日には遼寧省南部、吉林省北東部、黒龍江省南東部で降雨の影響を受け収穫が一時的に妨げられた。また、黒龍江省中部では日照時間が平年より3～8割少なかった。夏とうもろこしも乳熟期から成熟期の段階にあり、山西省、河北省、山東省などでは高温と十分な日照により収穫・乾燥作業に適していた。一方、新疆ウイグル自治区北部では日照時間が平年より3～8割少なかった。

【需要状況】USDA によれば、2026/27 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 1.3%増の 324.0 百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2026/27 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 25.0%増の 5.0 百万トンとなる見込み。

中国海関統計によれば、2025/26 年度のうち 2025 年 10 月～2026 年8月の輸入量は、前年同期（176.6 万トン）に比べ 91.9%増の 338.9 万トン。輸入先国別には、ブラジル 192.9 万トン（56.9%）、アルゼンチン 62.3 万トン（18.4%）、ロシア 51.1 万トン（15.1%）の順となっている（**表**）。

米国及び中国は、2026 年9月 20～23 日にかけ経済貿易協議を行い、中国商務部は、9月 28 日、関税引下げの枠組みの合意内容を発表した。関税引下げの対象となる米国産輸入品リストにはとうもろこしが含まれており、現状 10%の相互関税について引下げが議論される。

とうもろこし－中国

（春とうもろこしは、2～4月に作付けされ、7～9月に収穫される。
夏とうもろこしは、4～6月に作付けされ、9～10 月に収穫される。）

（単位：百万トン）

年度	2024/25	2025/26（見込み）	2026/27（26年10月～27年9月）		
			予測値、（ ）はIGC	前月予測からの変更	対前年度増減率（%）
生産量	294.9	301.2	307.0 (306.0)	－	1.9
消費量	316.0	320.0	324.0 (314.4)	－	1.3
うち飼料用	234.0	238.0	242.0 (212.0)	－	1.7
輸出量	0.00	0.02	0.02 (0.0)	－	－
輸入量	1.8	4.0	5.0 (4.5)	－	25.0
期末在庫量	191.9	177.2	165.1 (173.4)	－	▲ 6.8
期末在庫率	60.7%	55.4%	51.0% (55.1%)	－	▲ 4.4
（参考）					
収穫面積（百万ha）	44.74	44.96	45.40 (45.13)	－	1.0
単収（t/ha）	6.59	6.70	6.76 (6.78)	－	0.9

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 October 2026)
IGC「Grain Market Report」(15 October 2026)

表 中国のとうもろこしの輸入先国と輸入量

2024/25 年度（2024年10月～2025年９月）			2024/25年度（2024年10月～2025年８月）			2025/26年度（2025年10月～2026年８月）		
国名	輸入量（万トン）	シェア（%）	国名	輸入量（万トン）	シェア（%）	国名	輸入量（万トン）	シェア（%）
ブラジル	72.4	39.7	ブラジル	72.4	41.0	ブラジル	192.9	56.9
ウクライナ	37.6	20.6	ウクライナ	37.6	21.3	アルゼンチン	62.3	18.4
ロシア	36.8	20.2	ロシア	33.5	19.0	ロシア	51.1	15.1
ミャンマー	22.8	12.5	ミャンマー	20.7	11.7	ミャンマー	22.0	6.5
ラオス	6.4	3.5	ラオス	6.2	3.5	ウクライナ	6.2	1.8
米国	3.9	2.1	米国	3.9	2.2	ラオス	4.3	1.3
その他	2.3	1.3	その他	2.3	1.3	その他	0.0	0.0
計	182.3	100.0	計	176.6	100.0	計	338.9	100.0

資料：中国海関統計をもとに農林水産省で作成

中国農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2026 年8月号」によれば、8月の国内価格は前月（2,440 元/トン）から下落し 2,400 元/トンとなった。流通段階の在庫は前年同期を上回り、市場の供給は十分であるものの、加工用及び飼料用需要に改善はみられず、国内価格は今後安定しつつやや弱含みで推移すると見込まれている。

USDA によれば、2026/27 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、消費量の増加を受け前年度から 6.8%減、過去5年平均（199.1 百万トン）から 17.1%減の 165.1 百万トンとなる見込み。期末在庫率は前年度から 4.4 ポイント減の 51.0%となる見込み。

3 コメ

（1）国際的なコメ需給の概要（詳細は右表を参照）

＜USDA の見通し＞　2026/27 年度

生産量　　**前年度比** ⇩　**前月比** ⇩

・コロンビアで上方修正されたものの、フィリピン、パキスタン、ロシア等で下方修正され、前月から下方修正された。

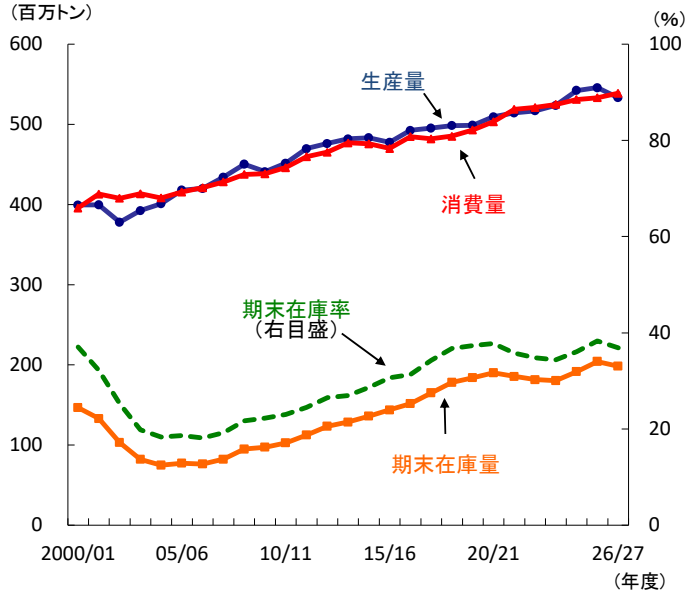
消費量　　**前年度比** ⇧　**前月比** ⇩

・バングラデシュ、フィリピン、カメルーン等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

輸出量　　**前年度比** ⇧　**前月比** ⇩

・インド、パキスタン、ロシア等で下方修正され、前月から下方修正された。

期末在庫量　　**前年度比** ⇩　**前月比** ⇧



資料：USDA「PS&D」(2026.10.9)をもとに農林水産省にて作成

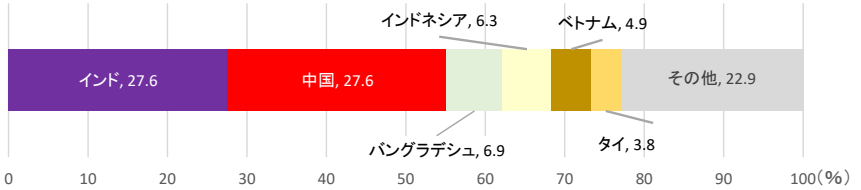
◎世界のコメ需給

（単位：百万精米トン）

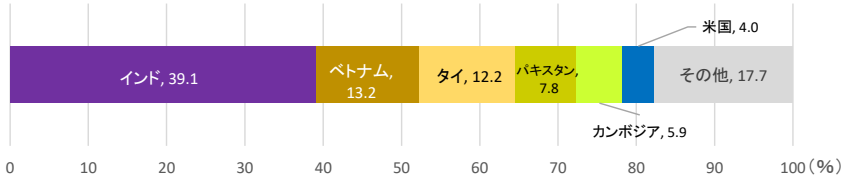
年　度	2024/25	2025/26（見込み）	2026/27		
			予測値	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生　産　量	542.2	545.7	533.1	▲ 0.8	▲ 2.3
消　費　量	530.9	533.1	538.8	▲ 0.8	1.1
輸　出　量	61.4	58.5	61.4	▲ 1.3	4.8
輸　入　量	58.0	55.9	58.8	▲ 1.1	5.0
期末在庫量	191.6	204.2	198.5	1.5	▲ 2.8
期末在庫率	36.1%	38.3%	36.8%	0.3	▲ 1.5

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(9 October 2026)

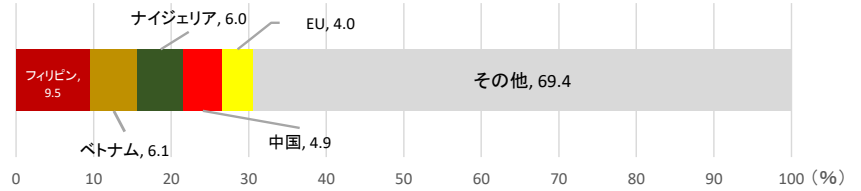
○　2026/27年度　世界のコメの生産量(533.1百万トン)



○　2026/27年度　世界のコメの輸出量(61.4百万トン)



○　2026/27年度　世界のコメの輸入量(58.8百万トン)



（2）国別のコメの需給動向

＜ タイ ＞ 2026/27 年度の輸出量は、前年度から 7.1%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2026/27 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積が前年度比 0.9%減及び単収が 1.1%減となることから、前年度から 1.9%減の 20.3 百万トンの見込み。

同「Grain and Feed Monthly」(2026.9.4)によれば、生産量の減少は、チャオプラヤ川流域の主要貯水池の水位低下や、エルニーニョ現象の影響を受け、乾季米の作付面積が減少することによる。乾季米の収穫面積は 2.07 百万ヘクタールから 1.93 百万ヘクタールへ縮小する一方、雨季米の収穫面積は 8.90 百万ヘクタール前後で推移すると予測されている。

タイ農業協同組合省農業経済局(2026.9)によれば、2026/27 年度の雨季米の作付面積は、前月予測からの変更はなく、前年度から 0.6%減の 9.73 百万ヘクタールと予測されている。同局は、コメの市場価格が低水準にあることから栽培面積を減らしたり、雨期中の作付回数を2回から1回に減らす農家があることを減少要因として挙げている。また中東紛争に起因した肥料価格の値上がりによる生産コストの上昇により、作付面積が予測を下回る可能性も示唆されている。中東紛争開始後の3～6月にかけて各種肥料の平均価格が上昇したが、7月以降は比較的安定したものの、8月の価格は前年同月比で6～26%上昇している。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2026/27 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 7.1%増の 7.5 百万トンの見込み。同「Grain and Feed Monthly」(2026.9.4)によれば、2025/26 年度の輸出量は、バーツ高やインド、ベトナム、パキスタンからの継続的な競争圧力により、低水準に留まっている。タイコメ輸出事業者協会及び商務省は、2026 年の輸出量を 2021 年以来の最低水準となる 7.0 百万トンと見込んでいる。

タイ関税局によれば、2025/26 年度の輸出量のうち 2026 年1～8月の輸出量は、前年同期(541.7 万トン)に比べ 17.3%減の 447.9 万トンで、輸出先国別には、南アフリカ 62.7 万トン(14.0%)、フィリピン 51.2 万トン(11.4%)、米国 48.1 万トン(10.7%)の順となっている(**表**)。

USDA によれば、2026/27 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、堅調な国内生産、輸出量の減少(2024/25 年度比)を受け、前年度から 1.3%増の 3.9 百万トンとなり、過去5年間で最高水準に達する見込み。同「Grain and Feed Monthly」(2026.10.1)によれば、タイ政府は、戦略的なコメの備蓄拡大を計画しており、タイ国内でコメ不足に陥るリスクはないとしている。

コメータイ

夏期の雨季作(5～10 月作付け、同年7月～翌年5月収穫)と冬期の乾季作(11 月～翌年4月作付け、翌年2～10 月収穫)で行われる。主にインディカ米を栽培。

(単位:百万精米トン)

年 度	2024/25	2025/26 (見込み)	2026/27(27年1月～27年12月) 予測値、()はIGC		前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生 産 量	20.8	20.7	20.3	(20.7)	－	▲ 1.9
消 費 量	12.5	12.7	12.8	(12.7)	－	0.8
輸 出 量	7.9	7.0	7.5	(7.1)	－	7.1
輸 入 量	0.1	0.1	0.1	(0.02)	－	－
期末在庫量	2.8	3.8	3.9	(3.8)	－	1.3
期末在庫率	13.5%	19.3%	19.0%	(19.2%)	－	▲ 0.3
(参考)						
収穫面積(百万ha)	11.08	11.00	10.90	(10.87)	－	▲ 0.9
単収(籾t/ha)	2.85	2.85	2.82	(1.85)	－	▲ 1.1

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 October 2026)
IGC「Grain Market Report」(15 October 2026)(単収は精米t/ha)

写真 収穫前のジャポニカ米圃場



田植え後110日目となり、生育は順調(タイ東北部ウドンタニ県で10月8日撮影)。

表 タイのコメの輸出先国と輸出量

2024/25年度(2025年1～12月) 国 名	輸出量(万トン)	シェア(%)	2024/25年度(2025年1～8月) 国 名	輸出量(万トン)	シェア(%)	2025/26年度(2026年1～8月) 国 名	輸出量(万トン)	シェア(%)
イラク	101.1	12.1	イラク	67.9	12.5	南アフリカ	62.7	14.0
南アフリカ	102.4	12.3	南アフリカ	65.6	12.1	フィリピン	51.2	11.4
米国	81.8	9.8	米国	54.3	10.0	米国	48.1	10.7
中国	65.5	7.9	中国	46.8	8.6	マレーシア	45.1	10.1
セネガル	34.1	4.1	セネガル	26.4	4.9	中国	19.2	4.3
マレーシア	30.0	3.6	日本	19.1	3.5	セネガル	17.8	4.0
その他	419.1	50.3	その他	261.6	48.3	その他	203.8	45.5
計	834.0	100.0	計	541.7	100.0	計	447.9	100.0

資料:タイ関税局「Electronic Service」をもとに農林水産省で作成

＜ 米国 ＞ 2026/27 年度の輸出量は、前年度から 3.1%減少する見込み

【生育・生産状況】USDA「Rice Outlook：October 2026」(2026.10.14)によれば、2026/27年度の生産量は、単収の引下げを受け、前月予測からわずか0.01百万トン下方修正され、前年度から23.6%減の5.0百万トンと33年ぶり(1993/94年度5.1百万トン)の低水準となる見込み。

同米国農業統計局(NASS)の10月の生産報告(2026.10.9)によれば、2026/27年度の収穫面積は、前月予測からの変更はなく、前年度から25.2%減の0.83百万ヘクタールと1972/73年度以来の低水準となる見込み。アーカンソー州の長粒種の収穫面積は、0.31百万ヘクタールと1977/78年度以来の低水準となる見込み。その他の主要長粒種生産州(ミシシッピ州、ミズーリ州、テキサス州、ルイジアナ州)でも、過去最低水準となっている。一方、主にカリフォルニア州で生産される中・短粒種の収穫面積は、約0.27百万ヘクタールと、前年に比べ1.4%増と予測されている。同「Crop Progress」(2026.10.13)によれば、10月11日現在、主要生産6州の収穫進捗率は92%と、過去5年平均(87%)を5ポイント上回っている。

【貿易情報・その他】USDA「Rice Outlook: October 2026」(2026.10.14)によれば、2026/27 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 16.2%増の 1.6 百万トンと史上最高の見込み。輸入する長粒種米は、現在、米国で栽培されていないアジア産の香り米(タイ産のジャスミン米やインド、パキスタン産のバスマティ米)が大部分を占めると見込まれている。2026/27 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 3.1%減の 2.5 百万トン の見込み。生産量の減少を受け、3年連続での減少となり、1985/86 年度以来の低水準となる見込み。同「Exports Sales Query System」によれば、2026/27 年度のうち 2026 年8～9月の輸出量は、前年同期(32.4 万トン)に比べ 24.1%増の 40.2 万トンで、輸出先国別には、コロンビア 7.2 万トン(17.8%)、メキシコ 6.1 万トン(15.2%)、日本 5.0 万トン(12.4%)の順(**表**)。種類別には、長粒種は輸出量 30.4 万トンで、輸出先国別には、コロンビア 7.1 万トン(国別シェア 23.5%)、メキシコ 5.6 万トン(同 18.5%)、イラク 4.4 万トン(同 14.5%)。中・短粒種は輸出量 9.8 万トンで、輸出先国別には、日本 5.0 万トン(50.8%)、韓国 2.4 万トン(24.0%)、ヨルダン 0.5 万トン(4.8%)。

同「Rice Outlook: October 2026」(2026.10.14)によれば、2026/27 年度の期末在庫量は、生産量の引下げを受け、前月予測からわずか 0.01 百万トン下方修正され、前年度から 31.7%減の 1.3 百万トンと2024/25 年度及び 2025/26 年度の水準から減少する見込み。

コメ－米国

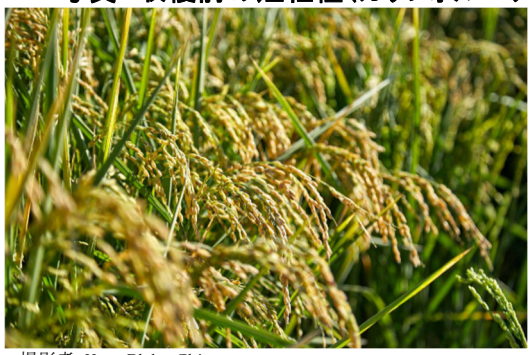
長粒種の生産量は7割、中・短粒種の生産量は3割を占め、長粒種の6割をアーカンソー州が、中・短粒種の7割をカリフォルニア州が占める。

(単位：百万精米トン)

年 度	2024/25	2025/26 (見込み)	2026/27(26年8月～27年7月) 予測値	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生 産 量	7.1	6.6	5.0	▲ 0.01	▲ 23.6
消 費 量	5.3	5.2	4.7	－	▲ 10.0
輸 出 量	2.9	2.6	2.5	－	▲ 3.1
輸 入 量	1.6	1.4	1.6	－	16.2
期末在庫量	1.7	1.9	1.3	▲ 0.01	▲ 31.7
期末在庫率	20.9%	23.9%	17.7%	▲ 0.1	▲ 6.2
(参考)					
収穫面積(百万ha)	1.16	1.11	0.83	－	▲ 25.2
単収(籾t/ha)	8.69	8.45	8.60	▲ 0.02	1.8

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、「World Agricultural Production」(9 October 2026)

写真 収穫前の短粒種(カリフォルニア州)



本圃場での収穫はまだ始まっていないが、他の産地では収穫が進んでいる(10 月 14 日撮影)。

撮影者：Kara Blake Chin

表 米国の全コメの輸出先国と輸出量

2025/26年度 (2025年8月～2026年7月)			2025/26年度 (2025年8～9月)			2026/27年度 (2026年8～9月)		
国	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国	輸出量 (万トン)	シェア (%)
日本	48.4	19.2	ハイチ	6.5	20.1	コロンビア	7.2	17.8
メキシコ	43.9	17.4	メキシコ	6.0	18.5	メキシコ	6.1	15.2
ハイチ	33.4	13.3	日本	5.2	16.0	日本	5.0	12.4
ホンジュラス	19.5	7.7	ホンジュラス	3.7	11.3	イラク	4.4	10.9
コロンビア	18.0	7.1	韓国	3.5	10.9	ハイチ	4.3	10.7
韓国	15.1	6.0	サウジアラビア	2.1	6.5	韓国	2.4	5.9
その他	73.9	29.3	その他	5.4	16.7	その他	10.9	27.0
合計	252.2	100.0	合計	32.4	100.0	合計	40.2	100.0

資料：USDA「Exports Sales Query System」をもとに農林水産省で作成

＜ 中国 ＞ 2026/27 年度の輸入量は、前年度から 14.2%減少する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2026/27 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、作付面積が安定し、単収が前年度を上回るとの予測から、前年度から 0.5%増の 147.0 百万トン（精米ベース）となる見込み。

中国国家統計局（2026.8.21）によれば、2026/27 年度の中国全土の一期作（早稲）の作付面積は、前年度から 0.14 万ヘクタール（0.03%）増の 474.4 万ヘクタール、単収は、前年度（6.02 籾トン/ヘクタール）から 0.8%減の 5.96 籾トン/ヘクタールとなる見込み。生産量（籾ベース）は 2,829.2 万トンと、前年度（2,851.3 万トン）と比べ 0.8%減となる見込み。

中国中央気象台「全国農業気象週報」（2026.10.12）によれば、10 月4～10 日の期間、一期作は安徽省、江蘇省、浙江省、雲南省で乳熟期及び成熟期にあり、湖北省と貴州省で乳熟期、遼寧省では成熟期にあった。湖北省と貴州省では日照時間が平年に比べ約2倍となり、登熟後期の条件として良好だった。二期作晩稲は、広西チワン族自治区、広東省、湖南省、江西省で出穂期及び乳熟期にあり、海南省では穂ばらみ期から乳熟期、福建省では出穂期、浙江省で乳熟期にあった。主産地では週の大半が晴天に恵まれ、穂ばらみ期から乳熟期にかけての生育に有利だった。総合的にみると、一期作及び二期作晩稲ともに概ね順調であるが、海南省の多雨及び日照不足については注意が必要である。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2026/27 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度からわずか 0.03%減少し、147.3 百万トンとなる見込み。

同「Grain and Feed Update」（2026.10.1）によれば、2026/27年度の輸入量は、アジアのコメ輸出価格が上昇傾向にあることを受け、前月予測から0.5百万トン下方修正され、前年度から14.2%減の3.5百万トンの見込み。

中国海関統計によれば、2026/27年度のうち2026年7～8月の輸入量は、前年同期（59.1万トン）に比べ21.0%減の46.6万トンとなっている。輸入先国別には、インド16.8万トン（36.1%）、ベトナム14.9万トン（31.8%）、パキスタン6.0万トン（12.9%）の順となっている（**表1**）。

USDA「Grain and Feed Update」（2026.10.1）によれば、2026/27年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、アフリカや中東からの需要に支えられ、前年度から6.8%増の2.2百万トンの見込み。中国海関統計によれば、2026/27年度のうち2026年7～8月の輸出量は、前年同期（20.3万トン）に比べ、34.5%増の27.3万トンとなっている（**表2**）。

2026/27年度の期末在庫量は、前月予測から0.5百万トン下方修正されたものの、政府保有米の購入意欲が低下し、入札不落が続いていることを受け、前年度から0.9%増の106.5百万トンの見込み。

コメ－中国

中国の主要コメ生産地域は、南部稲作地域（華南、華中、西南高原地域）で、インディカ米とジャポニカ米を栽培。北部稲作地域では、主にジャポニカ米を栽培。

（単位：百万精米トン）

年度	2024/25	2025/26（見込み）	2026/27（26年7月～27年6月） 予測値、()はIGC		前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	145.3	146.3	147.0	(146.3)	-	0.5
消費量	145.0	147.4	147.3	(146.7)	-	▲ 0.03
輸出量	1.2	2.1	2.2	(2.0)	-	6.8
輸入量	2.3	4.1	3.5	(3.8)	▲ 0.5	▲ 14.2
期末在庫量	104.5	105.5	106.5	(103.8)	▲ 0.5	0.9
期末在庫率	71.5%	70.6%	71.2%	(69.8%)	▲ 0.3	0.6
（参考）						
収穫面積(百万ha)	29.01	29.00	29.00	(29.00)	-	-
単収(籾t/ha)	7.15	7.21	7.24	(5.07)	-	0.4

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 October 2026)
IGC「Grain Market Report」(15 October 2026)（単収は精米t/ha）

表1　中国のコメの輸入先国と輸入量

2025/26年度 2025年7月～2026年6月			2025/26年度 2025年7～8月			2026/27年度 2026年7～8月		
国名	輸入量（万トン）	シェア（%）	国名	輸入量（万トン）	シェア（%）	国名	輸入量（万トン）	シェア（%）
ミャンマー	128.0	31.4	ミャンマー	23.5	39.7	インド	16.8	36.1
ベトナム	113.5	27.8	タイ	15.2	25.7	ベトナム	14.9	31.8
タイ	52.1	12.8	ベトナム	10.9	18.5	パキスタン	6.0	12.9
インド	45.7	11.2	インド	6.2	10.6	ミャンマー	5.4	11.5
パキスタン	38.5	9.4	パキスタン	2.2	3.7	タイ	3.3	7.0
カンボジア	27.3	6.7	カンボジア	1.1	1.8	カンボジア	0.3	0.7
その他	3.0	0.7	その他	0.0	0.0	その他	0.0	0.0
合計	408.2	100.0	合計	59.1	100.0	合計	46.6	100.0

表2　中国のコメの輸出先国と輸出量

2024/25年度 2025年7月～2026年6月			2025/26年度 2025年7～8月			2026/27年度 2026年7～8月		
国名	輸出量（万トン）	シェア（%）	国名	輸出量（万トン）	シェア（%）	国名	輸出量（万トン）	シェア（%）
コートジボワール	18.5	9.0	エジプト	3.5	17.3	リビア	5.0	18.3
カメルーン	17.9	8.7	カメルーン	2.8	13.8	パプアニューギニア	4.4	16.0
韓国	16.2	7.9	パプアニューギニア	2.3	11.4	シエラレオネ	2.2	8.1
パプアニューギニア	16.1	7.8	ベナン	2.2	10.8	コンゴ民主共和国	2.1	7.5
トルコ	15.0	7.3	コンゴ民主共和国	1.8	8.9	セネガル	2.0	7.4
エジプト	14.0	6.8	トルコ	1.5	7.4	マリ	2.0	7.3
その他	108.6	52.6	その他	6.2	30.5	その他	9.6	35.3
合計	206.3	100.0	合計	20.3	100.0	合計	27.3	100.0

資料：中国海関統計をもとに農林水産省で作成

＜ インド ＞ 2026/27 年度の輸出量は、前年度から 9.1%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2026/27 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 4.6%減、過去5年平均（141.5 百万トン）から 3.9%増の 147.0 百万トンとなる見込み。

インド農業・農民福祉省「作付進捗週報」によれば、2026/27 年度のカリフ米の作付面積は、9月４日時点で、エルニーニョ現象の影響を受け、前年同期（43.82 百万ヘクタール）から 1.64 百万ヘクタール（3.74%）減の 42.18 百万ヘクタールとなっている。北部ハリヤナ州では、10 月４日時点で、生殖生長後期又は収穫期にある（**写真**）。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2026/27 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 3.3%増の 125.0 百万トンと予測されている。同「Grain and Feed Annual」（2026.4.2）によれば、当該増加は、主に食料安全保障向けの政府補助米の供給増、民間取引増及びインド政府が実施するエタノール混合プログラム（EBP）によるエタノール製造者への補助金付きコメ販売によるインド国内市場へのコメ供給量増が要因となっている。また、インド政府は人口増加と食料安全保障を確保するための政府による公的配給制度（PDS）による配給も継続しており、400 万トン増の過去最高の消費量となる見込み。

USDA「Rice Outlook：October 2026」（2026.10.14）によれば、2026/27 年度の輸出量は、生産量の減少及び8月以降のコメ価格上昇を背景に、主要市場への輸出ペースが予測を下回ったことを受け、前月予測から 1.0 百万トン下方修正されたものの、依然として主要なコメ輸出国（タイ、ベトナム、パキスタン）の中で最も競争力のある輸出価格を維持していることから、前年度からは 9.1%増の 24.0 百万トンとなる見込み。

インド輸出入統計によれば、2025/26 年度のうち 2025 年 10 月～2026 年7月の輸出量は、1,881.8 万トンと前年同期（1,954.6 万トン）に比べ 3.7%減となっている。輸出先国別には、ベナン 182.8 万トン（9.7%）、サウジアラビア 104.3 万トン（5.5%）、アラブ首長国連邦 86.7 万トン（4.6%）の順となっている（**表**）。

USDA によれば、2026/27 年度の期末在庫量は、前月予測から 1.5 百万トン上方修正され、前年度からは 3.4%減の 57.0 百万トンとなる見込み。インド食料公社（Food Cooperation India）によれば、2026 年9月時点の期末在庫量は、39.05 百万トン（精米）と前年同期（36.91 百万トン）に比べ 5.8%増の見込み。USDA「Grain and Feed Update」（2026.8.28）によれば、インドの 2026/27 年度の在庫量は、世界全体の在庫の約3割を占めると見込まれ、過去 10 年平均（2016/17 年度～2025/26 年度）である約 20%を上回る水準となっている。

コメ－インド

カリフ米：雨季/モンスーン期（5～10 月）に栽培。
ラビ米：冬季の 11 月～翌3月に栽培。
夏季米：3～6月に栽培。

（単位：百万精米トン）

年 度	2024/25	2025/26（見込み）	2026/27（26年10月～27年9月） 予測値、()はIGC		前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生 産 量	150.2	154.0	147.0	(154.0)	－	▲ 4.6
消 費 量	121.4	121.0	125.0	(123.2)	－	3.3
輸 出 量	22.8	22.0	24.0	(22.2)	▲ 1.0	9.1
輸 入 量	0.0	0.0	0.0	(0.0)	－	－
期末在庫量	48.0	59.0	57.0	(57.1)	1.5	▲ 3.4
期末在庫率	33.3%	41.3%	38.3%	(39.2%)	1.3	▲ 3.0
（参考）						
収穫面積(百万ha)	51.27	52.83	51.00	(51.00)	－	▲ 3.5
単収(籾t/ha)	4.39	4.37	4.32	(2.90)	－	▲ 1.1

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 October 2026)
IGC「Grain Market Report」(15 October 2026)（単収は精米t/ha）

写真　ハリヤナ州の圃場



カリフ米の早生品種（収穫期：右）と晩生品種（生殖生長後期：左）（10 月4日撮影）。

表　インドのコメの輸出先国と輸出量

2024/25年度（2024年10月～2025年9月）			2024/25年度（2024年10月～2025年7月）			2025/26年度（2025年10月～2026年7月）		
国 名	輸出量（万トン）	シェア（%）	国 名	輸出量（万トン）	シェア（%）	国 名	輸出量（万トン）	シェア（%）
ベナン	216.7	9.4	ベナン	188.5	9.6	ベナン	182.8	9.7
バングラデシュ	149.9	6.5	サウジアラビア	122.9	6.3	サウジアラビア	104.3	5.5
サウジアラビア	139.8	6.1	バングラデシュ	118.6	6.1	アラブ首長国連邦	86.7	4.6
ギニア	114.5	5.0	コートジボワール	99.7	5.1	バングラデシュ	84.3	4.5
トーゴ	113.9	5.0	ギニア	99.3	5.1	トーゴ	82.1	4.4
コートジボワール	111.2	4.8	トーゴ	88.7	4.5	ギニア	81.8	4.3
その他	1,454.8	63.2	その他	1,236.9	63.3	その他	1,259.8	66.9
計	2,300.8	100.0	計	1,954.6	100.0	計	1,881.8	100.0

資料：インド農業・加工食品輸出振興局（APEDA）「Agri Xchange」をもとに農林水産省で作成

＜ ベトナム ＞ 2026/27 年度の輸入量は、前年度から 16.1%増加する見込み

【生育･生産状況】USDA によれば、2026/27 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、コメ農家がより収益性の高い作物等（果物･野菜･養殖）へシフトする傾向が続き、収穫面積が前年度から 1.5%減少し、前年度から 0.4%減の 26.1 百万トンとなる見込み。

ベトナム総統計局（2026.10.3）によれば、2026年（USDA：2026/27年度）の全国の雨季米（夏秋作）の作付面積は、9月20日時点で、前年同期に比べ3万6,800ヘクタール減の186万1,600ヘクタールとなっている。作付面積の減少は、生産性の低い水田の一部が、より収益性の高い一年生及び多年生作物、水産養殖、公共インフラや工業団地等の非農業用途へ転用されたことが主因とされる。単収は、5.89トン/ヘクタール（前年同期と比べ0.15トン/ヘクタール増）、生産量は約11.0百万トン（同7万1,200トン増）と見込まれている。

全国の雨季米（ムア作）の作付面積は、前年同期に比べ4万5,000ヘクタール減の133万7,100ヘクタールとなっている。作付面積の減少は、夏秋作と同様、他作物や非農業用途への転用による。全国の雨季米（秋冬作）の作付面積は、前年同期に比べ13万700ヘクタール減の47万4,100ヘクタールで、作付けは、台風や大雨を避けるための作付時期の調整や、例年よりも早い高潮の影響で、前年に比べ遅れている。

【貿易情報･その他】USDA によれば、2026/27 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、消費者のコメ離れや生産量の減少等を受け、前年度から 0.7%減の 22.1 百万トンとなる見込み。

2026/27 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 16.1%増の 3.6 百万トンと過去最高を記録すると予測されている。

2026/27 年度の輸出量は、前月予測及び前年度からの変更はなく 8.1 百万トンとなる見込み。同「Grain: World Markets and Trade」(2026.10.9)によれば、ベトナム産米（長粒種、5%砕米混入）の 10 月6日までの週の価格は、主要輸出先であるフィリピンを中心とした需要鈍化を反映し、前月9月6日までの週から8ドル/トン下落し、415ドル/トンとなった。

ベトナム税関総局によれば、2025/26 年度のうち 2026 年1～9月の輸出量は、636.3 万トンと前年同期（682.1 万トン）に比べ 6.7%減。輸出先国別には、フィリピン 272.9 万トン（42.9%）、中国 109.7 万トン（17.2%）、ガーナ 76.9 万トン（12.1%）の順（**表**）。USDA によれば、2026/27 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、生産量の減少を受け前年度から 21.7%減の 1.8 百万トンとなる見込み。

コメ－ベトナム

北部で二期作、南部で三期作。主に長粒種、一部で短粒種も栽培。

（単位：百万精米トン）

年 度	2024/25	2025/26（見込み）	2026/27（27年1月～27年12月） 予測値、()はIGC		前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生 産 量	26.9	26.2	26.1	(28.2)	－	▲ 0.4
消 費 量	22.3	22.3	22.1	(23.2)	－	▲ 0.7
輸 出 量	8.1	8.1	8.1	(8.3)	－	－
輸 入 量	3.5	3.1	3.6	(3.5)	－	16.1
期末在庫量	3.4	2.3	1.8	(3.7)	－	▲ 21.7
期末在庫率	11.0%	7.6%	6.0%	(11.8%)	－	▲ 1.6
（参考）						
収穫面積(百万ha)	7.02	6.80	6.70	(7.11)	－	▲ 1.5
単収(籾t/ha)	6.12	6.16	6.23	(3.96)	－	1.1

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 October 2026)
IGC「Grain Market Report」(15 October 2026)（単収は精米t/ha）

写真 ベトナム南部カントー市の稲作農家の圃場



カントー市にある 100 万ヘクタール高品質･低排出米プロジェクト参加農家の圃場。作付後 48 日が経過し、出穂期を迎えている（10 月 11 日撮影）。

表 ベトナムのコメの輸出先国と輸出量

2024/25年度（2025年1～12月） 国 名	輸出量（万トン）	シェア（%）	2024/25年度（2025年1～9月） 国 名	輸出量（万トン）	シェア（%）	2025/26年度（2026年1～9月） 国 名	輸出量（万トン）	シェア（%）
フィリピン	320.7	39.8	フィリピン	294.0	43.1	フィリピン	272.9	42.9
コートジボワール	105.5	13.1	コートジボワール	85.3	12.5	中国	109.7	17.2
ガーナ	91.9	11.4	ガーナ	76.5	11.2	ガーナ	76.9	12.1
中国	74.7	9.3	中国	60.0	8.8	コートジボワール	46.1	7.2
マレーシア	51.5	6.4	マレーシア	36.3	5.3	マレーシア	36.3	5.7
セネガル	16.8	2.1	セネガル	16.4	2.4	シンガポール	12.5	2.0
その他	145.1	18.0	その他	113.6	16.7	その他	81.9	12.9
計	806.3	100.0	計	682.1	100.0	計	636.3	100.0

資料：ベトナム税関総局「月別主要輸出統計データ」をもとに農林水産省で作成

Ⅱ　油糧種子　大豆

（1）国際的な大豆需給の概要（詳細は右表を参照）

＜USDA の見通し＞　　2026/27 年度

生産量　　**前年度比** ⇧ **前月比** ⇧

・インド等で下方修正されたものの、米国で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

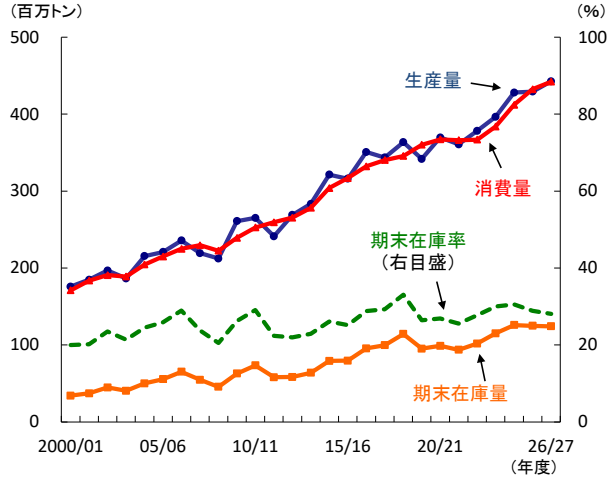
消費量　　**前年度比** ⇧ **前月比** ⇩

・タイ等で上方修正されたものの、ナイジェリア、韓国、インド等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

輸出量　　**前年度比** ⇧ **前月比** ⇧

・米国、ナイジェリアで上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

期末在庫量　**前年度比** ⇩ **前月比** ⇧



資料：USDA「PS&D」（2026.10.9）をもとに農林水産省で作成

◎世界の大豆需給

（単位：百万トン）

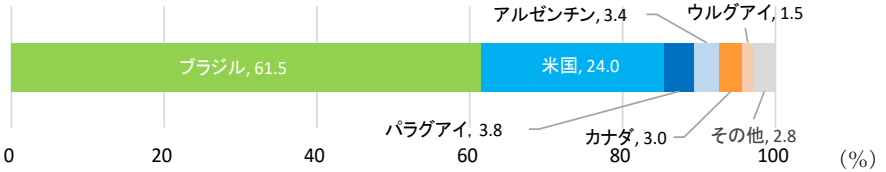
年　度	2024/25	2025/26（見込み）	2026/27 予測値	2026/27 前月予測からの変更	2026/27 対前年度増減率（%）
生　産　量	428.1	429.2	442.7	0.4	3.1
消　費　量	412.1	432.3	442.2	▲ 0.3	2.3
うち搾油用	359.2	375.8	385.7	0.5	2.6
輸　出　量	184.3	186.4	192.0	0.4	3.0
輸　入　量	179.2	188.5	190.8	0.4	1.2
期末在庫量	126.0	124.9	124.3	0.3	▲ 0.5
期末在庫率	30.6%	28.9%	28.1%	0.1	▲ 0.8

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」（9 October 2026）

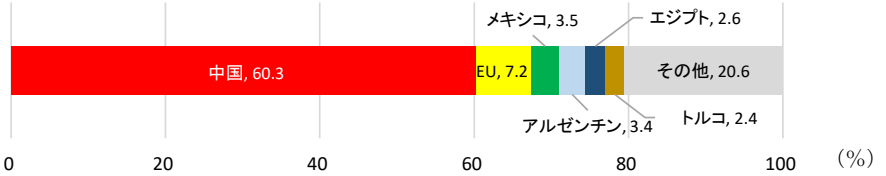
○　2026/27 年度　世界の大豆の生産量（442.7 百万トン）



○　2026/27 年度　世界の大豆の輸出量（192.0 百万トン）



○　2026/27 年度　世界の大豆の輸入量（190.8 百万トン）



（2）国別の大豆の需給動向

＜ 米国 ＞ 2026/27 年度の生産量は前年度から 7.1%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2026/27 年度の生産量は、前月予測から 0.7 百万トン上方修正され、単収及び収穫面積の増加を受け前年度から 7.1%増、過去5年平均（117.2 百万トン）から 5.9%増の 124.2 百万トンと史上最高の見込み。

同「Oil Crops Outlook」（2026.10.14）によれば、9月は、西部コーンベルト及び中部平原地域（特にネブラスカ州、カンザス州、アイオワ州）で大雨が続き、収穫作業が遅延した。加えて、大雨による影響で、品質が低下しているとの報告もある。

同「Crop Progress」（2026.10.13）によれば、10 月 11 日現在の収穫進捗率は 46%と、過去5年平均（50%）を下回っている。また、作柄評価は「良～優良」の割合が 57%となっている。

【需要状況】USDA によれば、2026/27 年度の消費量は、前月予測から 0.04 百万トン上方修正され、バイオディーゼル需要の増加等を受け前年度から 4.1%増の 78.7 百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2026/27 年度の輸出量は、前月予測から 0.3 百万トン上方修正され、生産量の増加を受け前年度から 11.9%増の 46.1 百万トンの見込み。

同「Federal Grain Inspection Services Yearly Export Grain Totals」によれば、2026/27 年度のうち 2026 年9月の輸出量は、前年同月（289.5 万トン）に比べ 28.8%増の 372.8 万トン。輸出先国別には、中国 221.1 万トン（59.3%）、アルジェリア 21.9 万トン（5.9%）、メキシコ 20.9 万トン（5.6%）の順となっている（**表**）。

国際穀物理事会（IGC）によれば、10 月6日現在の輸出価格は、米国は前月（9月８日）から6ドル/トン下落し 524 ドル/トン、ブラジルは前月から 12 ドル/トン下落し 528 ドル/トン、アルゼンチンは前月から2ドル/トン下落し 508 ドル/トンとなった（**図**）。USDA「Oilseeds: World Markets and Trade」（2026.10.9）によれば、米国の輸出価格は、米中首脳会談後に下落したものの、9月末に公表された米国農業統計局の在庫報告で旧穀在庫が減少したことに加え、西部コーンベルトにおける降雨により収穫が遅延したことから、下落幅は抑えられた。

USDA によれば、2026/27 年度の期末在庫量は、生産量の引上げを受け前月予測から 0.1 百万トン上方修正されたものの、消費量及び輸出量の増加を受け前年度から 0.1%減、過去5年平均（8.3 百万トン）からは 3.5%増の 8.6 百万トンとなる見込み。期末在庫率は、前年度から 0.5 ポイント減の 6.9%となる見込み。

大豆－米国

（5～6月に作付けされ、9～11 月に収穫される。）

（単位：百万トン）

年　度	2024/25	2025/26（見込み）	2026/27（26年9月～27年8月） 予測値	前月予測からの変更	対前年度増減率（%）
生　産　量	119.1	116.0	124.2	0.7	7.1
消　費　量	68.8	75.6	78.7	0.04	4.1
うち搾油用	66.6	72.0	75.7	－	5.1
輸　出　量	51.5	41.2	46.1	0.3	11.9
輸　入　量	0.8	0.6	0.7	－	11.5
期末在庫量	8.8	8.6	8.6	0.1	▲ 0.1
期末在庫率	7.3%	7.3%	6.9%	0.1	▲ 0.5
（参考）					
収穫面積（百万ha）	34.89	32.54	34.76	－	6.8
単収（t/ha）	3.41	3.56	3.57	0.02	0.3

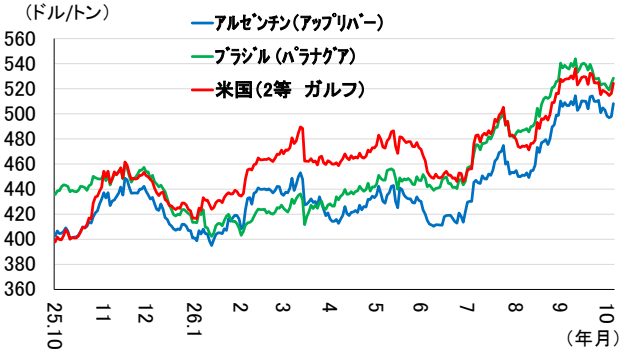
資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、「World Agricultural Production」（9 October 2026）

表　米国の大豆の輸出先国と輸出量

2025/26年度（2025年９月～2026年８月）			2025/26年度（2025年９月）			2026/27年度（2026年９月）		
国名	輸出量（万トン）	シェア（%）	国名	輸出量（万トン）	シェア（%）	国名	輸出量（万トン）	シェア（%）
中国	1,236.2	30.1	エジプト	51.6	17.8	中国	221.1	59.3
エジプト	511.8	12.5	メキシコ	42.7	14.8	アルジェリア	21.9	5.9
メキシコ	493.0	12.0	日本	23.7	8.2	メキシコ	20.9	5.6
インドネシア	270.2	6.6	インドネシア	21.0	7.3	エジプト	17.2	4.6
日本	218.3	5.3	トルコ	21.0	7.2	日本	16.7	4.5
その他	1,370.6	29.7	その他	129.4	38.3	その他	75.2	15.7
合計	4,100.3	100.0	合計	289.5	100.0	合計	372.8	100.0

資料：USDA「Federal Grain Inspection Services Yearly Export Grain Totals」をもとに農林水産省で作成

図　各国の大豆輸出価格（FOB）の推移



資料：IGC のデータをもとに農林水産省で作成

＜ ブラジル ＞ 2026/27 年度の生産量は前年度から 3.0%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2026/27 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 3.0%増、過去5年平均（160.0 百万トン）から 16.3%増の 186.0 百万トンと史上最高の見込み。

ブラジル食料供給公社（CONAB）の月例報告（2026.10.15）によれば、2026/27 年度の生産量は、作付面積の増加を受け前年度から 0.7%増の 181.6 百万トンとなる見込み。作付面積は、北部及び北東部（主に、ロンドニア州、トカンティンス州、ピアウイ州、マラニョン州）で特に拡大する見通し。また、9月末時点の作付進捗率は 9.6%であり、州別には、パラナ州で 28%、マット・グロッソ・ド・スール州で 15%、マット・グロッソ州（**写真**）で 14%となっている一方、ゴイアス州、バイーア州、ミナスジェライス州での作付けは灌漑地域や土壌条件の良好な一部地域に限られている。その他の州での作付けは、未開始または初期段階にとどまっている。

【需要状況】USDA によれば、2026/27 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、搾油用需要の増加を受け前年度から 4.0%増の 69.6 百万トンと史上最高の見込み。

CONAB 月例報告（2026.10.15）によれば、ブラジル国内の大豆需要は引き続き堅調に推移すると予測されている。2026/27 年度の搾油用の消費量は、バイオディーゼル混合義務比率が引き上げられると見込まれ、大豆の搾油用需要が増加することから、前年度から3.2%増の63.8 百万トンとなる見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2026/27 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、生産量の増加を受け前年度から 3.1%増の 118.0 百万トンと史上最高の見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2025/26 年度の輸出量は、前年度（10,313.8 万トン）に比べ 11.0%増の 11,445.9 万トン。輸出先国別には、中国 8,280.6 万トン（72.3%）、スペイン 452.2 万トン（4.0%）、タイ 392.0 万トン（3.4%）の順となっている（**表**）。

USDA によれば、2026/27 年度の期末在庫量は、前月予測から 0.4 百万トン上方修正され、消費量及び輸出量の増加を受け前年度から1.6%減となるものの、過去5年平均（33.9 百万トン）からは 10.0%増の 37.3 百万トンとなる見込み。期末在庫率は、前年度から 1.0 ポイント減の 19.9%となる見込み。

大豆－ブラジル

（9～12 月に作付けされ、1～4月に収穫される。）

（単位：百万トン）

年　度	2024/25	2025/26（見込み）	2026/27（26年10月～27年9月） 予測値	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生　産　量	172.5	180.5 (180.4)	186.0 (181.6)	－ (－)	3.0 (0.7)
消　費　量	62.2	66.9 (65.5)	69.6 (67.5)	－ (－)	4.0 (3.0)
うち搾油用	58.2	62.5 (61.8)	65.0 (63.8)	－ (－)	4.0 (3.2)
輸　出　量	103.1	114.5 (116.2)	118.0 (118.0)	－ (－)	3.1 (1.5)
輸　入　量	0.7	1.1 (0.9)	1.0 (0.9)	0.2 (－)	▲4.8 (－)
期末在庫量	37.7	37.9 (9.5)	37.3 (6.5)	0.4 (－)	▲1.6 (▲31.4)
期末在庫率	22.8%	20.9% (5.2%)	19.9% (3.5%)	0.2 (－)	▲1.0 (▲1.7)
（参考）					
収穫面積(百万ha)	47.40	48.50 (48.61)	50.00 (49.31)	－ (－)	3.1 (1.4)
単収(t/ha)	3.64	3.72 (3.71)	3.72 (3.68)	－ (－)	－ (▲0.8)

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 October 2026)
CONAB「Graos」(15 October 2026)※（ ）書き。なお、CONABの収穫面積は作付面積である。

写真　マット・グロッソ州の大豆圃場の様子



出芽が始まっている（10 月5日撮影）。

表　ブラジルの大豆の輸出先国と輸出量

2024/25年度（2024年10月～2025年９月）			2025/26年度（2025年10月～2026年９月）		
国名	輸出量（万トン）	シェア（%）	国名	輸出量（万トン）	シェア（%）
中国	7,968.8	77.3	中国	8,280.6	72.3
スペイン	396.3	3.8	スペイン	452.2	4.0
タイ	365.5	3.5	タイ	392.0	3.4
トルコ	184.8	1.8	トルコ	308.7	2.7
イラン	146.3	1.4	パキスタン	262.0	2.3
その他	1,252.1	12.1	その他	1,750.4	15.3
合計	10,313.8	100.0	合計	11,445.9	100.0

資料：ブラジル貿易統計のデータをもとに農林水産省で作成

＜ カナダ ＞ 2026/27 年度の生産量は前年度から 7.8%増加する見込み（AAFC）

【生育・生産状況】カナダ農務農産食品省（AAFC）「Outlook for Principal Field Crops」（2026.9.25）によれば、2026/27 年度の生産量は、単収の引下げを受け8月予測からわずかに下方修正されたものの、前年度から 7.8%増、過去5年平均（6.9 百万トン）から 8.2%増の 7.5 百万トンとなる見込み（**図**）。カナダ西部に比べ東部の生産が良好であり、ケベック州は前年度から 14%増、オンタリオ州は同 12%増となる一方、マニトバ州は同 0.3%減となる見込み。なお、カナダ東部・西部ともに大豆の収穫が開始されているものの、まだ本格化はしていない。

同「Outlook for Principal Field Crops」（2026.8.20）によれば、7月末時点でカナダ東部の生育状況は安定しており、オンタリオ州及びケベック州の単収は平年を上回ると予測されている。同2州でカナダの大豆作付面積の約 65%を占める。マニトバ州ではシーズン序盤に厳しい生育条件に見舞われたが、同州農業局及び大豆生産者によれば、最近数週間で生育が急速に進み、全体的に生育が改善している。

【需要状況】AAFC によれば、2026/27 年度の消費量は、8月予測から 0.2 百万トン上方修正され、飼料用消費等の増加を受け前年度から 14.6%増の 2.4 百万トンとなる見込み。このうち、搾油用消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度同、過去5年平均と比べても同水準の 1.8 百万トンとなる見込み。

【貿易情報・その他】AAFC によれば、2026/27 年度の輸出量は、8月予測から 0.2 百万トン下方修正されたものの、前年度から 1.9%増、過去5年平均から 11%増の 5.4 百万トンとなる見込み。

2025/26 年度の輸出量は、8月予測から 0.2 百万トン下方修正され、前年度から 4.2%減となるものの、過去5年平均から 12%増の 5.3 百万トンとなる見込み。

カナダ統計局によれば、2026/27 年度のうち 2026 年8月の輸出量は、前年同月（16.3 万トン）に比べ 33.6%減の 10.8 万トン。輸出先国別には、米国 2.5 万トン（23.2%）、日本 2.2 万トン（20.2%）、マレーシア 1.1 万トン（10.2%）の順となっている（**表**）。

AAFC によれば、2026/27 年度の期末在庫量は、輸出量の引下げ等を受け8月予測から 0.1 百万トン上方修正され、前年度から 25%増、過去5年平均から 21%増の 0.5 百万トンとなる見込み。過去7年間では 2023/24 年度（0.6 百万トン）に次ぐ在庫量となる見込み。

大豆－カナダ

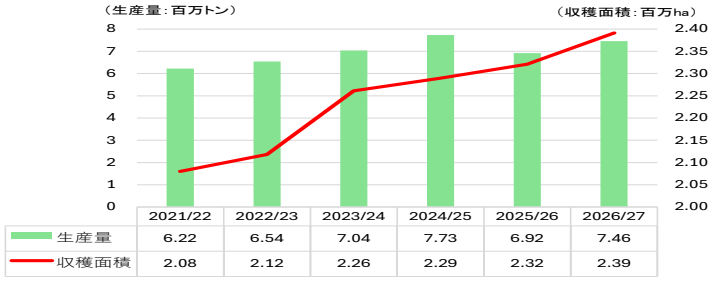
（5～6月に作付けされ、9～11 月に収穫される。）

（単位：百万トン）

年　度	2024/25	2025/26（見込み）	2026/27（26年8月～27年7月） 予測値、（）はAAFC	前月予測からの変更	対前年度増減率（%）
生　産　量	7.7	6.9 (6.9)	7.8 (7.5)	－（▲0.04）	12.7 (7.8)
消　費　量	2.4	2.3 (2.1)	2.4 (2.4)	－（0.2）	3.3 (14.6)
うち搾油用	1.7	1.7 (1.8)	1.7 (1.8)	－（－）	－（-）
輸　出　量	5.6	5.3 (5.3)	5.7 (5.4)	－（▲ 0.2）	7.8 (1.9)
輸　入　量	0.3	0.4 (0.4)	0.4 (0.4)	－（－）	4.1 (14.3)
期末在庫量	0.6	0.3 (0.4)	0.4 (0.5)	－（0.1）	35.7 (24.5)
期末在庫率	7.5%	3.9% (5.8%)	4.9% (6.9%)	－ 1.9	1.1 (1.1)
（参考）					
収穫面積（百万ha）	2.29	2.32 (2.32)	2.40 (2.39)	－（0.003）	3.4 (3.0)
単収（t/ha）	3.37	2.98 (2.98)	3.25 (3.12)	－（▲0.02）	9.1 (4.7)

資料：USDA「PS&D」（9 October 2026）
「World Agricultural Production」（9 October 2026）
AAFC「Outlook for Principal Field Crops」（25 September 2026）※（ ）書き

図　カナダの大豆の生産量・収穫面積の推移



資料：AAFC「Outlook for Principal Field Crops」（2026.9.25）をもとに農林水産省で作成

表　カナダの大豆の輸出先国と輸出量

2025/26年度（2025年8月～2026年7月） 国名	輸出量（万トン）	シェア（%）	2025/26年度（2025年8月） 国名	輸出量（万トン）	シェア（%）	2026/27年度（2026年8月） 国名	輸出量（万トン）	シェア（%）
中国	199.0	37.9	米国	3.7	22.9	米国	2.5	23.2
アルジェリア	52.7	10.0	日本	2.9	17.8	日本	2.2	20.2
オランダ	52.6	10.0	インドネシア	2.9	17.7	マレーシア	1.1	10.2
イラン	43.1	8.2	中国	1.8	11.2	ベルギー	1.0	9.3
日本	33.2	6.3	ノルウェー	1.0	6.1	インドネシア	1.0	8.9
その他	144.8	27.6	その他	4.0	24.3	その他	3.0	28.1
合計	525.3	100.0	合計	16.3	100.0	合計	10.8	100.0

資料：カナダ統計局のデータをもとに農林水産省で作成

＜ 中国 ＞ 2026/27 年度の輸入量は前年度から 1.8%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2026/27 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、単収増を受け前年度から 0.5%増、過去5年平均（19.8 百万トン）から 6.0%増の 21.0 百万トンと史上最高の見込み。

中国中央気象台「全国農業気象週報」（2026.10.12）によれば、10 月４～10 日の期間、大豆は子実肥大期から成熟期にあり、内モンゴル自治区、江蘇省、河北省では子実肥大期、安徽省で子実肥大期と成熟期、河南省、遼寧省で成熟期にある。河北省、河南省等では晴天が多く、作物の成熟と乾燥に有利な条件だった。

中国農業農村部「農産品供需形勢分析 2026 年 10 月号」（2026.10.9）によれば、2026/27 年度の生産量は、作付面積と単収減を受け、前月予測から 0.59 百万トン下方修正され、前年度（20.91 百万トン）から 2.6%減の 20.36 百万トンと予測されている。東北部の主要生産地では、収穫期間中の天候は概ね平年並みとなった。

【需要状況】USDA によれば、2026/27 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、家禽及び水産養殖部門の成長や養豚部門での飼料安定を受け、前年度から 1.6%増の 136.0 百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2026/27 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 1.8%増の 115.0 百万トンと史上最高の見込み。

米国及び中国は、2026 年9月 20～23 日にかけ経済貿易協議を行い、中国商務部は、9月 28 日、関税引下げの枠組み合意内容を発表した。対象品目の 90%以上は、追加関税を全て撤廃し、最恵国待遇の税率のみを適用するとの合意内容となったが、大豆は米国産輸入リストから外れ、米国産大豆には 10%の関税が引き続き課される。

中国海関統計によれば、2025/26 年度のうち 2025 年 10 月～2026 年8月の輸入量は、前年同期（9,651.5 万トン）に比べ 3.3%増の 9,973.9 万トン。輸入先国別には、ブラジル 7,376.3 万トン（74.0%）、米国 1,065.5 万トン（10.7%）、アルゼンチン 1,009.4 万トン（10.1%）の順（**表**）。中国農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2026 年8月号」によれば、原油価格の上昇が、バイオ燃料の需要見通しを押し上げ、大豆油及び大豆粕の価格を間接的に支え、8月の国際的な大豆価格は上昇した。国内価格は前月（4,920 元/トン）から 20 元/トン上昇し 4,940 元/トンとなった。同「農産品供需形勢分析 2026 年 10 月号」（2026.10.9）によれば、生産量の減少、作付費用の増加、国際価格の上昇を受け、国内大豆価格は昨年に比べ大幅に高くなっており、国内価格は今後暫くの間、高水準を維持すると予測されている。USDA によれば、2026/27 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、消費量の増加を受け前年度から 0.2%減となるものの、過去5年平均（37.9 百万トン）から 16.7%増の 44.3 百万トンとなる見込み。

大豆－中国

（4～6月に作付けされ、9～10 月に収穫される。）

（単位：百万トン）

年　度	2024/25	2025/26（見込み）	2026/27（26年10月～27年9月）		
			予測値、()はIGC	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生　産　量	20.7	20.9	21.0　(21.0)	－	0.5
消　費　量	127.4	133.9	136.0　(138.1)	－	1.6
うち搾油用	103.5	109.0	111.0　(113.9)	－	1.8
輸　出　量	0.1	0.1	0.1　(0.1)	－	▲ 23.1
輸　入　量	108.0	113.0	115.0　(115.5)	－	1.8
期末在庫量	44.5	44.4	44.3　(50.3)	－	▲ 0.2
期末在庫率	34.9%	33.1%	32.5%　(36.4%)	－	▲ 0.6
（参考）					
収穫面積（百万ha）	10.33	10.30	10.30　(10.25)	－	－
単収（t/ha）	2.00	2.03	2.04　(－)	－	0.5

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、「World Agricultural Production」（9 October 2026）
IGC「Grain Market Report」（15 October 2026）

表　中国の大豆の輸入先国と輸入量

2024/25年度（2024年10月～2025年9月）			2024/25年度 2024年10月～2025年8月			2025/26年度 2025年10月～2026年8月		
国名	輸入量（万トン）	シェア（%）	国名	輸入量（万トン）	シェア（%）	国名	輸入量（万トン）	シェア（%）
ブラジル	7,610.8	69.6	ブラジル	6,514.9	67.5	ブラジル	7,376.3	74.0
米国	2,440.9	22.3	米国	2,440.9	25.3	米国	1,065.5	10.7
アルゼンチン	476.6	4.4	アルゼンチン	359.3	3.7	アルゼンチン	1,009.4	10.1
ウルグアイ	244.3	2.2	ウルグアイ	176.1	1.8	ウルグアイ	228.6	2.3
カナダ	118.6	1.1	カナダ	117.1	1.2	カナダ	182.7	1.8
ロシア	45.0	0.4	ロシア	42.2	0.4	ロシア	102.2	1.0
その他	2.1	0.0	その他	1.1	0.0	その他	9.1	0.1
合計	10,938.3	100.0	合計	9,651.5	100.0	合計	9,973.9	100.0

資料：中国海関統計のデータをもとに農林水産省で作成

＜ アルゼンチン ＞ 2026/27 年度の生産量は前年度から 1.4%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2026/27 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積の増加を受け前年度から 1.4%増、過去5年平均(43.5 百万トン)から 14.9%増の 50.0 百万トンとなる見込み。

同「Oilseeds and Products Update」(2026.10.7)によれば、2026/27 年度の大豆の作付面積は、大豆に有利な価格動向、比較的低い生産コスト、病害虫ヨコバイによるとうもろこしへの悪影響懸念が重なり、増加する見込み。増加の大半は、特に北部の生産地域におけるとうもろこしからの転換によるものと予測されている。

【需要状況】USDA によれば、2026/27 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、搾油用需要の増加を受け前年度から 1.5%増の 49.7 百万トンとなる見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2026/27 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、輸出税一時撤廃(**表1**)により中国向け輸出が大幅増となった前年度から 27.5%減の 6.5 百万トンとなる見込み。

アルゼンチン国家統計局によれば、2025/26 年度のうち 2025 年 10 月～2026 年8月の輸出量は、前年同期(582.4 万トン)に比べ 36.0%増の 792.0 万トン。輸出先国別には、中国 737.7 万トン(93.2%)、米国 9.9 万トン(1.2%)、ペルー5.8 万トン(0.7%)の順となっている(**表2**)。

USDA「Oilseeds and Products Update」(2026.7.6)によれば、アルゼンチン政府は、2026 年6月３日、政令 423/2026 号にて、小麦及び大麦の輸出税を即時引き下げるとともに、2027 年1月から 2028 年 12 月にかけて、大豆、大豆製品(大豆油・大豆粕)、とうもろこし等の輸出税を段階的に引き下げると発表した(**表1**)。これらの引下げは同国の財政状況に応じて実施されることとなっている。輸出税の引下げは、直接的に農家の収入を増加させ、収益性の向上をもたらすとみられ、現地の農業界は今回の発表を歓迎している。

USDA によれば、2026/27 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、アルゼンチン最大の輸入先国であるパラグアイにおける生産量減少を受け、前年度から 13.3%減の 6.5 百万トンとなる見込み。

同「Oilseeds and Products Update」(2026.10.7)によれば、2025/26 年度のアルゼンチンの記録的な油糧種子・穀物の生産量が、貯蔵と輸出物流に大きな負荷をかけている。

2026/27 年度の期末在庫量は、期首在庫量の引下げを受け前月予測から 0.4 百万トン下方修正され、生産量の増加及び輸出量の減少を受け前年度から 1.7%増、過去5年平均(22.6 百万トン)から 6.4%増の 24.1 百万トンとなる見込み。期末在庫率は、前年度から 2.0 ポイント増の 42.9%となる見込み。

大豆－アルゼンチン

(10～１月に作付けされ、３～７月に収穫される。)

(単位:百万トン)

年　度	2024/25	2025/26 (見込み)	2026/27 (26年10月～27年9月) 予測値、()はIGC	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生　産　量	51.1	49.3	50.0 (50.5)	－	1.4
消　費　量	48.9	48.9	49.7 (50.5)	－	1.5
うち搾油用	43.2	43.0	43.5 (44.3)	0.5	1.2
輸　出　量	7.9	8.9	6.5 (6.2)	－	▲ 27.5
輸　入　量	6.3	7.5	6.5 (6.2)	－	▲ 13.3
期末在庫量	24.7	23.7	24.1 (5.3)	▲ 0.4	1.7
期末在庫率	43.4%	41.0%	42.9% (9.3%)	▲ 0.7	2.0
(参考)					
収穫面積(百万ha)	17.46	16.20	17.10 (17.15)	－	5.6
単収(t/ha)	2.93	3.04	2.92 (－)	－	▲ 3.9

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 October 2026)
IGC「Grain Market Report」(15 October 2026)

表1　アルゼンチンの輸出税率の推移(2022 年 12 月 30 日以降)

(単位:%)

政令	公布日	小麦	とうもろこし	大豆	大豆油 大豆粕
政令851/2021号	2022年12月30日	12	12	33	31
政令38/2025号	2025年1月27日	9.5	9.5	26	24.5
政令439/2025号	6月27日	9.5	12	33	31
政令526/2025号	7月31日	9.5	9.5	26	24.5
政令682/2025号	9月22日	0	0	0	0
政令526/2025号	9月24日(※)	9.5	9.5	26	24.5
政令877/2025号	12月12日	7.5	8.5	24	22.5
政令423/2026号	2026年6月3日	5.5	2027年1月～2028年12月		
			5.5に段階的に引下げ	15に段階的に引下げ	14に段階的に引下げ

※9月に一時的に輸出税を撤廃したものの、設定した輸出額の上限に達したため、以前の輸出税が復活した。
資料:アルゼンチン政府官報をもとに農林水産省で作成

表2　アルゼンチンの大豆の輸出先国と輸出量

2024/25年度 (2024年10月～2025年９月)			2024/25年度 (2024年10月～2025年８月)			2025/26年度 (2025年10月～2026年８月)		
国名	輸出量(万トン)	シェア(%)	国名	輸出量(万トン)	シェア(%)	国名	輸出量(万トン)	シェア(%)
中国	681.4	86.6	中国	485.2	83.3	中国	737.7	93.2
米国	15.9	2.0	米国	13.6	2.3	米国	9.9	1.2
イラク	11.2	1.4	イラク	11.2	1.9	ペルー	5.8	0.7
チリ	9.0	1.1	チリ	7.9	1.4	チリ	4.7	0.6
カナダ	1.9	0.2	カナダ	1.9	0.3	カナダ	3.1	0.4
その他	67.2	8.5	その他	62.6	10.8	その他	30.8	3.9
合計	786.6	100.0	合計	582.4	100.0	合計	792.0	100.0

資料:アルゼンチン国家統計局(INDEC)をもとに農林水産省で作成。なお、その他には秘匿「Confidential」の数量を含む。

(参考1)本レポートに使用されている各国の市場年度について（2026/27年度）

	小麦	とうもろこし	コメ	大豆
米国	26年6月～27年5月	26年9月～27年8月	26年8月～27年7月	26年9月～27年8月
カナダ	26年8月～27年7月			26年8月～27年7月
豪州	26年10月～27年9月		27年3月～28年2月	
EU	26年7月～27年6月	26年10月～27年9月		
中国	26年7月～27年6月	26年10月～27年9月	26年7月～27年6月	26年10月～27年9月
ロシア	26年7月～27年6月	26年10月～27年9月		26年9月～27年8月
ウクライナ	26年7月～27年6月	26年10月～27年9月		
ブラジル		27年3月～28年2月	27年4月～28年3月	26年10月～27年9月
アルゼンチン	26年12月～27年11月	27年3月～28年2月		26年10月～27年9月
タイ			27年1月～12月	
インド	26年4月～27年3月		26年10月～27年9月	
ベトナム			27年1月～12月	

※市場年度は、各国で概ね作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
　例えば、2026/27年度は、米国の小麦では2026年6月～2027年5月、ブラジルのとうもろこしでは2027年3月～2028年2月です。
　なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。
https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads（「Reference Data」タブを参照）

（参考2）単位換算表

1　容積→重量

1　Bushel （ブッシェル） （穀物により異なる）	0.027216 メトリックトン	小麦、大豆	米国等
	0.021772 メトリックトン	大麦	
	0.025401 メトリックトン	とうもろこし	
	0.014515 メトリックトン	オーツ	
1 CWT(百ポンド)	0.045359 メトリックトン	コメ	米国等

2　面積

1Acre（エーカー）	0.40469 ヘクタール	米国等
1rai（ライ）	0.16 ヘクタール	タイ
1 亩（ムー）	0.0667 ヘクタール	中国

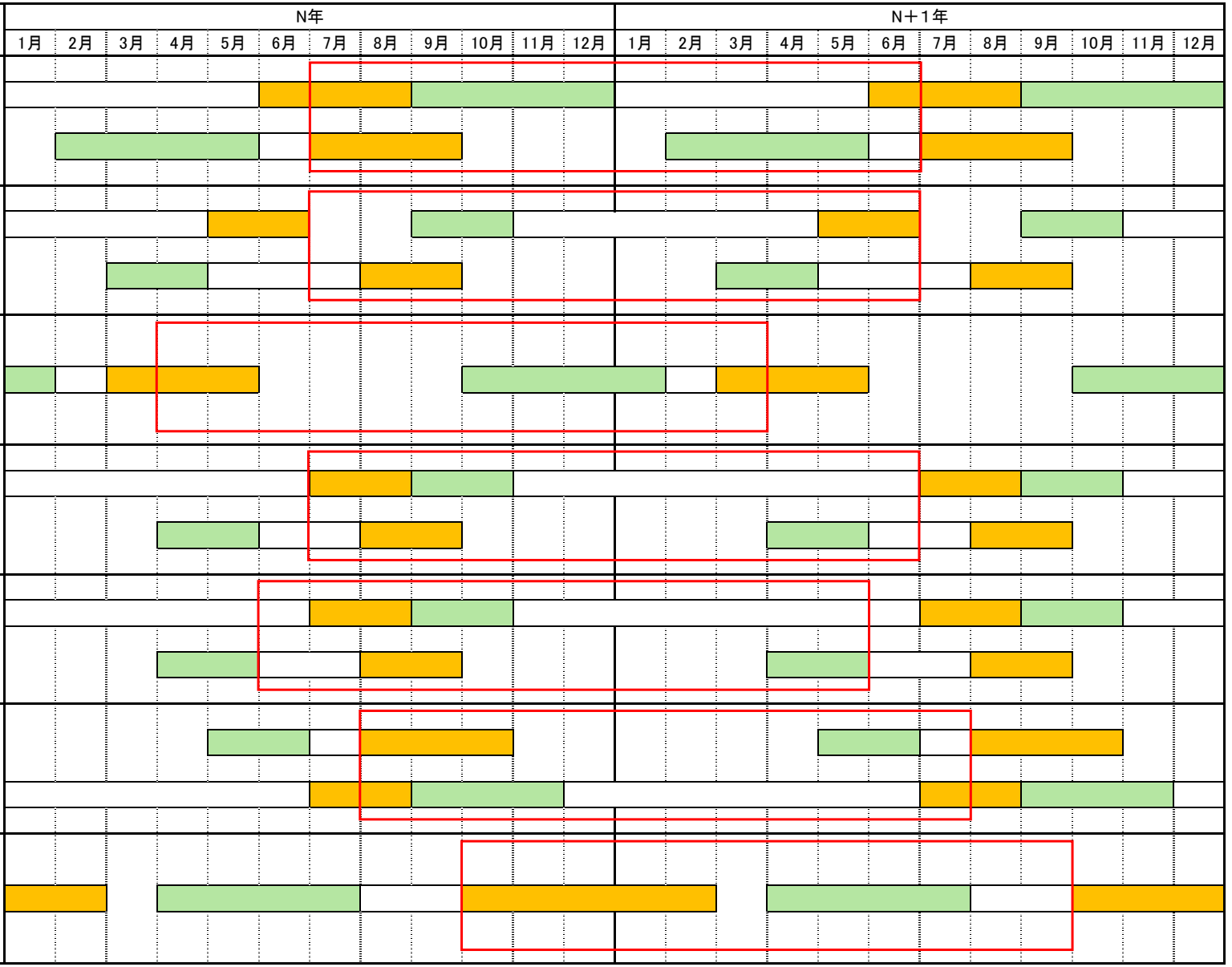
3　その他

1ガロン	4.536 リットル		英国
1ガロン	3.785 リットル		米国
1LAKH(ラーク)	10万	位取り	インド
1斤	500g	重量	中国
華氏（℉）	摂氏（℃）＝（℉－32）÷1.8		

クロップカレンダー（小麦）

播種　収穫　Market year

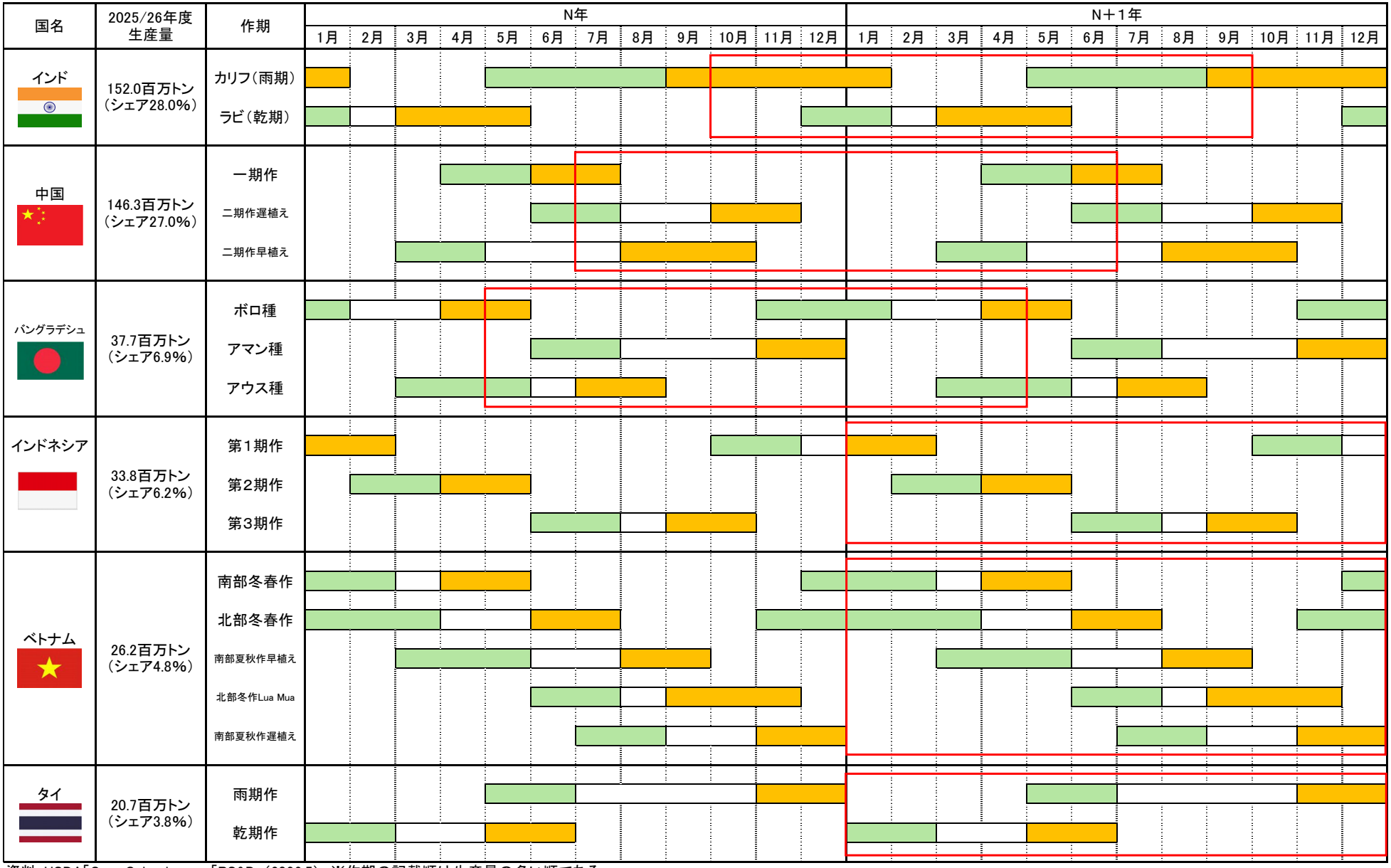
国名	2025/26年度生産量	作期
EU	145.1百万トン（シェア17.2%）	冬小麦 春小麦
中国	140.1百万トン（シェア16.6%）	冬小麦 春小麦
インド	117.9百万トン（シェア14.0%）	
ロシア	90.3百万トン（シェア10.7%）	冬小麦 春小麦
米国	54.0百万トン（シェア6.4%）	冬小麦 春小麦
カナダ	40.0百万トン（シェア4.7%）	春小麦 冬小麦
豪州	36.0百万トン（シェア4.3%）	



資料：USDA「Crop Calendars」、「PS&D」（2026.5）。※作期の記載順は生産量の多い順である。

クロップカレンダー（コメ）

播種　収穫　Market year

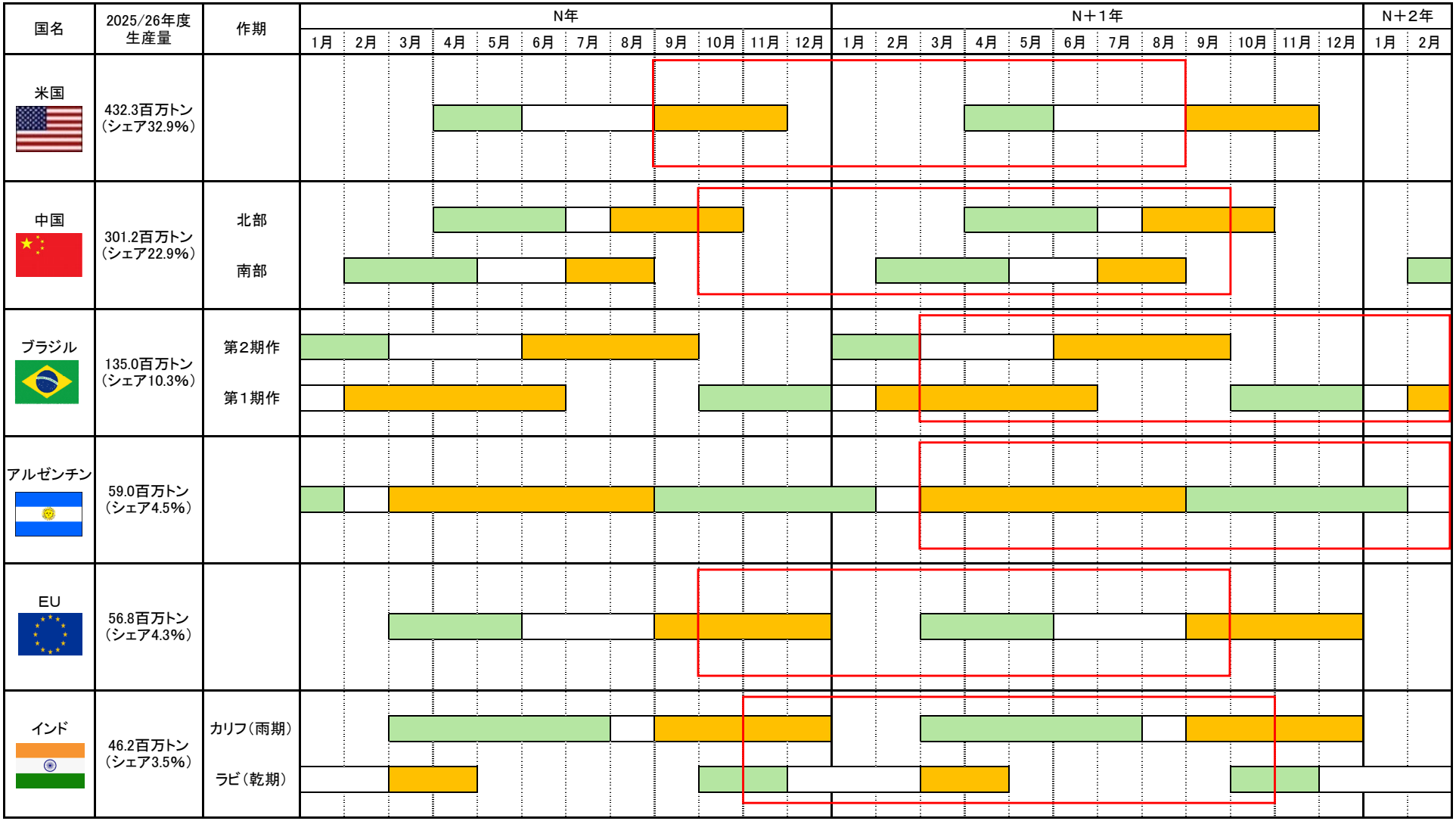


資料：USDA「Crop Calendars」、「PS&D」（2026.5）。※作期の記載順は生産量の多い順である。

クロップカレンダー（とうもろこし）

播種　収穫　Market year

国名	2025/26年度生産量	作期
米国	432.3百万トン（シェア32.9%）	
中国	301.2百万トン（シェア22.9%）	北部 南部
ブラジル	135.0百万トン（シェア10.3%）	第2期作 第1期作
アルゼンチン	59.0百万トン（シェア4.5%）	
EU	56.8百万トン（シェア4.3%）	
インド	46.2百万トン（シェア3.5%）	カリフ（雨期） ラビ（乾期）



資料：USDA「Crop Calendars」、「PS&D」(2026.5)。※作期の記載順は生産量の多い順である。

クロップカレンダー（大豆）

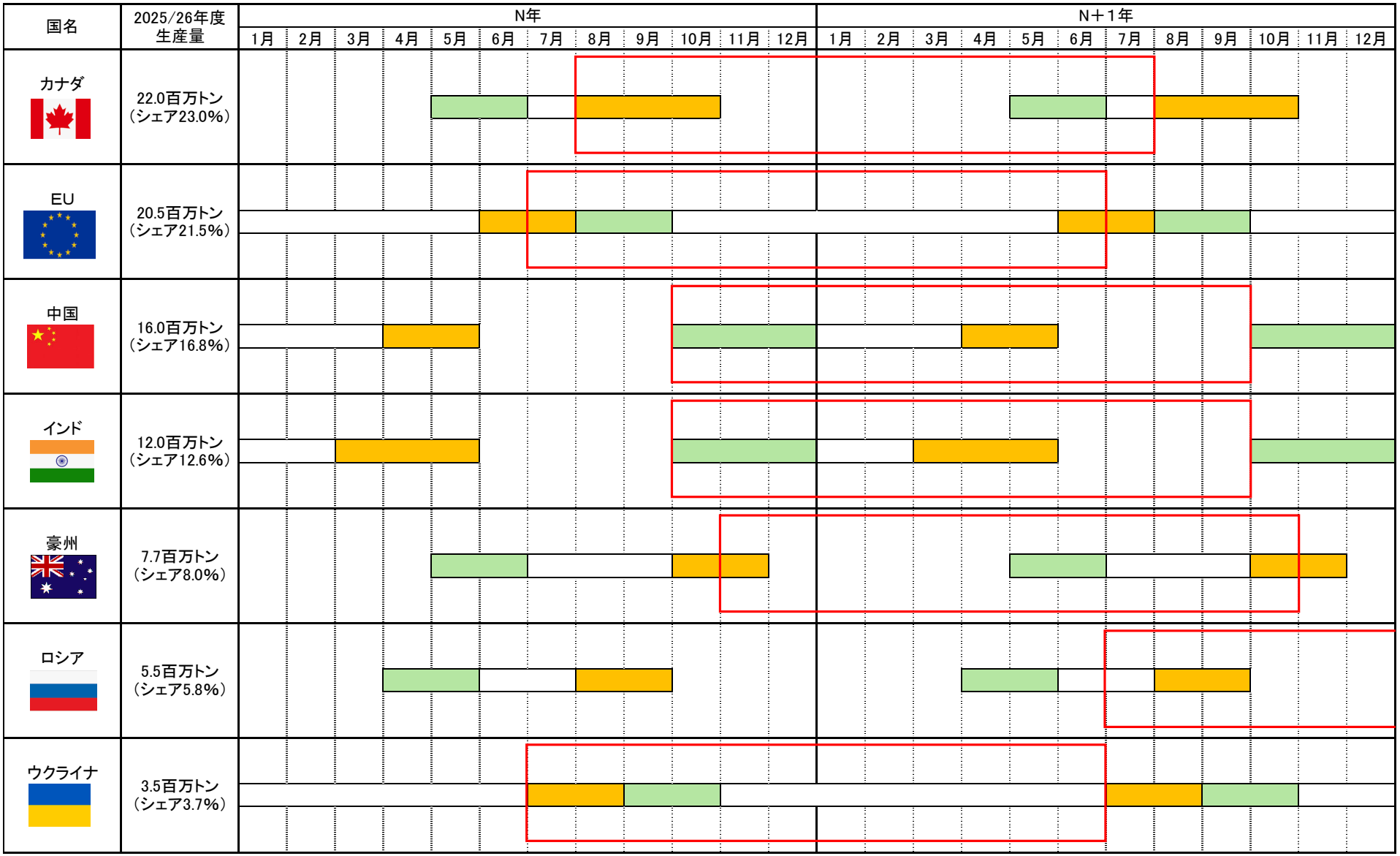
播種　収穫　Market year

国名	2025/26年度 生産量	作期	N年 1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	N＋1年 1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
ブラジル	180.0百万トン （シェア42.1%）																									
米国	116.0百万トン （シェア27.1%）																									
アルゼンチン	48.0百万トン （シェア11.2%）	第1期作 第2期作																								
中国	20.9百万トン （シェア4.9%）																									

資料：USDA「Crop Calendars」、「PS&D」（2026.5）。※作期の記載順は生産量の多い順である。

クロップカレンダー（なたね）

播種　収穫　Market year



資料：USDA「Crop Calendars」、「PS&D」（2026.5）。

【利用上の注意】

食料安全保障月報は、国際穀物需給に関し、在外公館からの情報、各国の現地コンサルタント等を通じて入手した情報、公的機関（各国政府機関、FAO、IGC 等）の公表資料、報道情報等を農林水産省の担当者において整理、分析したものです。

○ 食料安全保障月報で使用している統計数値は、主に米国農務省が毎月中旬までに発表した情報を引用しています。

さらに詳細なデータ等が必要な場合は、米国農務省のホームページを参照願います。
https://www.usda.gov/about-usda/reports-and-data/agency-reports
「World Agricultural Supply and Demand Estimates」
https://www.usda.gov/oce/commodity/wasde/
「Grain：World Markets and Trade」
https://www.fas.usda.gov/data/grain-world-markets-and-trade
「Oilseeds：World Markets and Trade」
https://www.fas.usda.gov/data/oilseeds-world-markets-and-trade
「World Agricultural Production」
https://www.fas.usda.gov/data/world-agricultural-production
「PS&D」
https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/advQuery

○ 本月報に記載のない情報は以下を参照願います。

（1） 農林水産省の情報

ア 我が国の食料需給表や食品価格、国内生産等に関する情報

・食料需給表：https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/fbs/

・食品の価格動向：https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/kouri/index.html

・米に関するマンスリーレポート：https://www.maff.go.jp/j/seisan/keikaku/soukatu/mr.html

イ 中長期見通しに関する情報

・食料需給見通し(農林水産政策研究所)：https://www.maff.go.jp/primaff/seika/jyukyu.html

（2） 農林水産関係機関の情報（ALIC の情報サイト）：https://www.alic.go.jp/

ア 砂糖、でんぷん：https://www.alic.go.jp/sugar/index.html

イ 野菜：https://www.alic.go.jp/vegetable/index.html

ウ 畜産物：https://www.alic.go.jp/livestock/index.html

（3） その他海外の機関（英語及び各国語となります）

ア 国際機関

・国連食糧農業機関（FAO）：https://www.fao.org/home/en

・国際穀物理事会（IGC）：https://www.igc.int/en/default.aspx

・経済協力開発機構（OECD）（農業・水産業分野）:
https://www.oecd.org/en/topics/agriculture-and-fisheries.html
・農業市場情報システム（AMIS）：https://www.amis-outlook.org/

イ　各国の農業関係機関(代表的なものです)
・米国農務省（USDA）：https://www.usda.gov/
・ブラジル食料供給公社（CONAB）：https://www.gov.br/conab/pt-br
・カナダ農務農産食品省（AAFC）：
https://agriculture.canada.ca/en/sector/crops/reports-statistics
・豪州農業資源経済科学局（ABARES）：https://www.agriculture.gov.au/abares

○　データは予測値であり、毎月各種データの更新を受けて改訂されますので留意してください。
○　資料原典で表示されるブッシェル及びエーカー等の単位は、それぞれトン及びヘクタールに換算して記載しています。
○　資料原典において現地通貨で表示される金額を円換算するにあたっては、日本銀行国際局・財務大臣公示の基準外国為替相場及び裁定外国為替相場等の換算レートを用いています。
○　市場年度は、各国で概ね作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。以下サイトの「Reference Data」を参照ください。
https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads
○　期末在庫率の対前年度増減率の欄は、前年度とのポイント差になります。なお、表示単位以下の数値により計算しているため、表上では合わない場合があります。
○　生産見通し等の予測は、各国際機関及び各国の農業機関によりそれぞれの分析手法に基づき行われるため、機関によってデータの相違がある場合があります。また、各国の農業機関の公表を受けて、国際機関の見通しが改訂される場合があります。
○　ロシアが占領しているウクライナのクリミアの生産量については、米国農務省はウクライナとして集計しています。

○　本資料の引用等につきましては、出所（農林水産省発行「食料安全保障月報」）を併記願います。
○　本資料の電子版は下記アドレスでご覧になれます。
農林水産省　食料安全保障月報
https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/jki/j_rep/index.html

○　本資料に関するご質問、ご意見等は、下記までお願いします。

連絡先　農林水産省大臣官房政策課食料安全保障室
TEL：03-6744-2368（直通）

「食料安全保障月報」に関するアンケート

いつも食料安全保障月報（以下、「月報」）を御愛読いただきありがとうございます。
今後のより良い月報の作成に生かすため、皆様の声を是非お聞かせください。

１　あなたの所属を教えてください。（選択式）
　　商社、食品・飼料メーカー、食品卸・小売業、調査会社、自治体、大学・研究機関、大学生・高校生、その他

２　あなたの所属する会社・組織が所在する地域を教えてください。（選択式）
　　北海道、東北、関東（東京以外）、東京、中部、近畿、中国、四国、九州・沖縄、海外
　その他

３　月報をどこで知りましたか。（選択式）
　　口コミ、以前から（海外食料需給レポート時代から）、検索エンジン、農水省 HP、書籍、その他

４　月報を書籍で知った場合、その書名が分かれば教えてください。

５　月報で一番関心／参考にしている項目は何ですか。（複数選択可）
　　概要編（今月の主な動き（穀物等の国際価格の動向）、今月の注目情報、今月のコラム、その他）
　　品目別需給編（小麦、とうもろこし、コメ、油糧種子（大豆））
　　特別分析トピック

６　今後重点的に取り上げてほしいテーマは何ですか。（自由記載）
　　テーマ例：世界的な異常気象（干ばつ、洪水など）の穀物生産への影響
　　地域別の穀物需給動向（米国、南米、豪州、東南アジア等）
　　ウクライナ情勢の生産・貿易への影響
　　中国の需要・輸入動向
　　世界的な人口増加による食料需要・貿易への影響
　　中長期（10 年先）、超長期（30 年先）的な食料需給見通し

７　今後月報に期待することはありますか。（自由記載）

ご回答は以下 URL または右の QR コードよりアクセス願います。

https://www.contactus.maff.go.jp/j/form/kanbo/anpo/anpo_geppou_ankeeto.html